名神高速道路内遺跡調査会調査報告書　第４輯

中央自動車道西宮線拡幅工事に伴う

梶　原　古　墳　群

発掘調査報告書

平成10年３月

名神高速道路内遺跡調査会

名神高速道路内遺跡調査会調査報告書　第４輯

中央自動車道西宮線拡幅工事に伴う

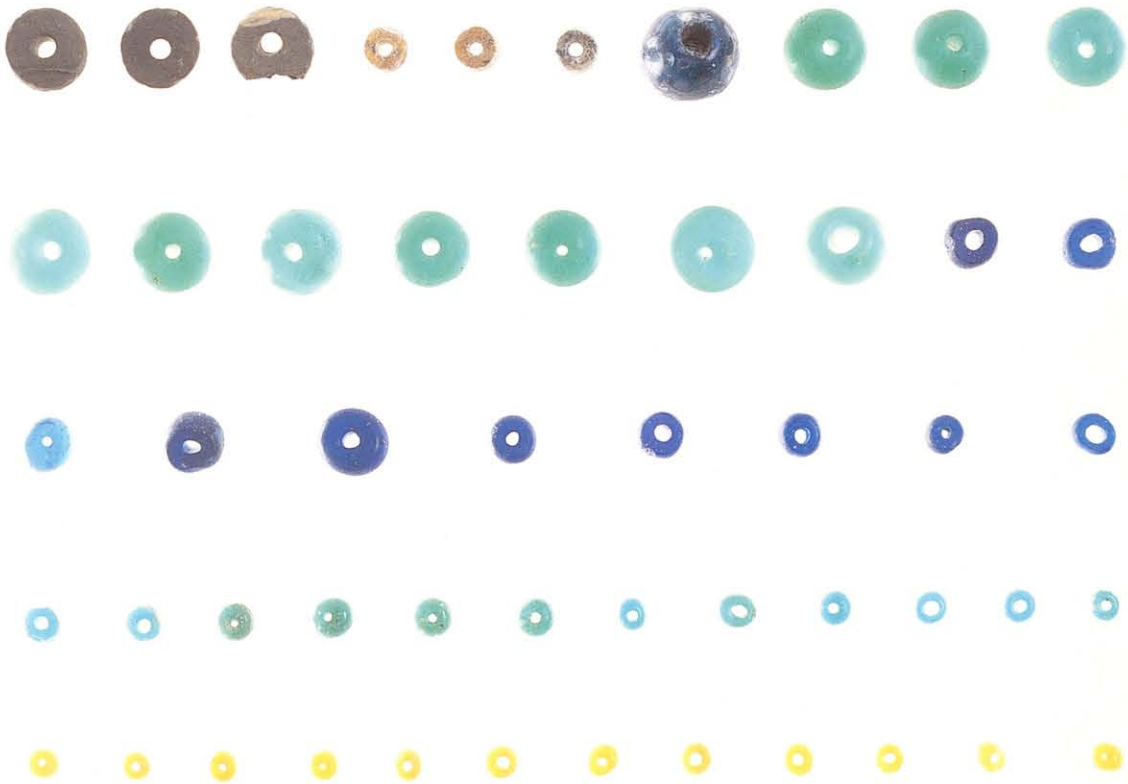
梶　原　古　墳　群

発掘調査報告書

平成10年３月

名神高速道路内遺跡調査会

梶原古墳群D－1号墳出土の双葉剣菱形杏葉



梶原古墳群D－1号墳出土の装身具

梶原古墳群D—1号墳の石室全景

はしがき

名神高速道路内遺跡調査会は、平成２年度の発足以来名神高速道路拡幅工事に伴って数多くの発掘調査を手懸けてまいりました。

今回報告いたします梶原古墳群は、宇治川・桂川・木津川の三河川が合流して形成された淀川を、間近に見下ろす丘陵地に展開する遺跡であります。古墳群の南側一帯は現在でも京阪神の交通網が集中し、古代から交通の要衝を占める重要な地域であったことは言うまでもありません。しかしながら、当地は今回の拡幅工事に伴う発掘調査が実施されます以前は、高槻市域のなかで、ほとんど本格的な発掘調査が行われていない地域でもあり、摂津の古代を考えるうえでも多くの課題が残されておりました。

今回の調査では18基に及ぶ古墳を検出し、家形石棺や豊富な武器、馬具等の副葬品が出土しております。なかでも、三累環式柄頭や双葉剣菱形杏葉などは全国的にも希少なものであり、陸上・水上交通の要衝地を抑えた古墳時代後期の豪族の勢力範囲や、他地域との関係を知るうえで、貴重な資料を提示することができたと考えております。

もとより、山積する多くの課題を解決するにはいまだ至りませんが、本報告書が今後の研究の基礎資料となり、さらに、文化財の大切さを理解して頂く一助となれば幸いです。

なお、調査の実施ならびに報告書作成にあたりまして多大なるご協力とご支援をいただきました日本道路公団大阪建設局をはじめ、大阪府教育委員会、高槻市教育委員会、その他関係各位に対し、心からお礼申し上げる次第です。

平成10年３月

名神高速道路内遺跡調査会
理事長　鹿　野　一　美

緒　　言

高槻市は古来より、淀川の水運と山陽道の陸運にささえられ、すばらしい歴史と文化を育んでまいりました。とくに古墳時代におきましては、史跡今城塚古墳附新池埴輪製作遺跡、史跡阿武山古墳、さらには「青龍三年」銘鏡など５面の鏡が発見されました安満宮山古墳などをはじめ全国的にも有数の遺跡が多く所在し、古代における当地域の重要性をうかがい知ることができます。

このような歴史的環境のなか、桧尾川以東地域の調査は、古代より連綿とつづく交通の要衝である三島の歴史を考える上で最も重要なものと考えられ、その調査成果には大きな期待がよせられておりました。とりわけ、梶原古墳群は淀川の水運を軸とした政治的、経済的背景によって成立した豪族層の墓域と推定され、この解明が三島地域の歴史的評価に大きく影響を及ぼすものと考えられておりました。

このたびの名神高速道路拡幅工事に伴う発掘調査は、大きく三島地域を考える上で貴重な成果と重要な歴史的事実を加えることができました。なかでも、梶原Ｄ－１号墳出土の二上山産出の凝灰岩でつくられた家形石棺をはじめ、全国でも希少例としての、馬具や武器など貴重な遺物の発見は、当地における豪族の権力基盤とその役割の重要性の一端を知るうえで重要な所見となるものです。ここにまとめました報告書が三島の歴史を、ひいては、古代を解明するうえで少しでも役立つならば幸いに存じます。

なお、このたびの調査の実施と報告書作成にあたりまして多大な御協力を頂きました日本道路公団大阪建設局、ならびに地元の方々、大阪府教育委員会をはじめとする関係機関各位に深く感謝いたします。

平成10年３月

高槻市教育委員会
教育長　奥田　晴基

例　　言

1．本書は、中央自動車道西宮線（名神高速道路）拡幅工事に伴って実施した大阪府高槻市梶原に所在する梶原古墳群の発掘調査報告書である。

2．調査は、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて、大阪府教育委員会、高槻市教育委員会の指導のもとに、名神高速道路内遺跡調査会が実施した。

3．調査及び報告書作成に要した費用は、日本道路公団大阪建設局が全額負担した。

4．発掘調査は、大塚　隆、土江文子（旧姓川崎）、川端博明、鎌田博子、和田　武、松本克恵（旧姓井上）が担当し、平成３年度から平成５年度まで実施した。

5．本書の遺構実測図に表示する方位は、国土座標第Ⅵ系に基づく座標北を示し、標高は東京湾標準潮位（T.P.＋）で表示した。

6．遺構写真撮影は調査担当者が行ない、遺物写真撮影は小倉　勝が行なった。

7．出土遺物の整理は川端、鎌田が行ない、金属器の保存処理については鎌田が担当した。

8．本書の執筆及び編集は川端が行なった。なお土器の観察表作成は上島玲子が行なった。

9．Ｄ－１号墳の石室の移築にあたっては、平成３年当時の高槻市立上牧小学校長加藤信久氏に多大なご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。

10. 発掘調査から本書の刊行に至るまでに、下記の関係諸機関ならびに諸氏の御指導をいただいた。記して謝意を表したい。（敬称略）

文化庁、大阪府教育委員会、高槻市教育委員会、茨木市教育委員会、島本町教育委員会、㈶大阪府文化財調査研究センター

穴沢咏光、網　伸也、大谷幹夫、梶村市郎、堅田　直、鐘ヶ江一朗、清村美徳、工楽善通、阪口和義、高倉洋彰、高橋公一、千賀　久、戸原和人、新納　泉、野口哲也、橋本久和、花谷　浩、林　博通、原口正三、福井康二、藤澤一夫、古川久雄、馬目順一、南　博史、宮崎康夫、百瀬正恒、森岡秀人、山崎純男、山田邦和、吉村和昭、和田晴吾

特に名神高速道路内遺跡調査会の理事である小野山　節先生には有益なご助言を頂きました。記して感謝申し上げます。

11. 調査の実施ならびに出土遺物の整理には、下記の方々の協力を得た。

荒井純子、池田理美、稲津ゆちこ、岩城　恵、大枝晃子、大島由紀、小田恵理子、佳川記子、片山勝元、片山実希、上島玲子、川地ちぐさ、河原善之、瓦林三千代、岸本晋一、木村知絵、桐本美香、熊田武生、瀬川大介、高木祐志、武田真一、武田靖宏、武村雅代、立岩美津子、田中裕子、永田景子、中西礼子、西村典昭、馬　蘭、前田和子、前田幸美、松井直子、松井芳美、丸岡鉄也、森光泰志、山口浩一、山中鹿次、吉岡果名子、吉宮和代

本　文　目　次

はしがき　名神高速道路内遺跡調査会理事長　鹿野一美
緒　言　高槻市教育委員会教育長　奥田晴基
例　言
第Ⅰ章　位置と環境 …… 1
　第１節　地理的環境 …… 1
　第２節　歴史的環境 …… 2
第Ⅱ章　調査に至る経緯 …… 5
　第１節　発掘調査に至る経緯 …… 5
　第２節　発掘調査の経過 …… 5
第Ⅲ章　調査の成果 …… 9
　第１節　Ａ尾根の調査（Ａ１調査地区） …… 9
　第２節　Ｂ尾根の調査（Ｂ１・２調査地区） …… 12
　第３節　Ｃ尾根の調査（Ｃ調査地区） …… 43
　第４節　Ｄ尾根の調査（Ｄ１調査地区） …… 54
　第５節　Ｆ尾根の調査（Ｆ調査地区） …… 80
　第６節　Ｇ尾根の調査（Ｇ調査地区） …… 89
　第７節　その他の遺構・遺物 …… 94
第Ⅳ章　総括 …… 109
　第１節　梶原古墳群の造営期間とその様相 …… 109
　第２節　梶原古墳群出土の金属製品について …… 110
　第３節　梶原古墳群の造墓活動の様相 …… 116

挿　図　目　次

図１　梶原古墳群の位置 …… 1
図２　梶原古墳群周辺の遺跡分布 …… 2
図３　調査地区の位置 …… 10
図４　梶原古墳群の古墳分布状況 …… 11
図５　Ａ１調査地区の調査前の地形測量図 …… 13・14
図６　Ａ１調査地区の平面図 …… 15・16
図７　Ａ－１号墳の石室 …… 17
図８　Ａ－１号墳出土の土器 …… 18
図９　Ａ－２号墳の石室 …… 18
図10　Ｂ－１号墳の墳丘・石室断面 …… 19
図11　Ｂ１調査地区の調査前の地形測量図 …… 21・22
図12　Ｂ１調査地区の平面図 …… 23・24
図13　Ｂ－１号墳の石室 …… 25・26
図14　Ｂ－１号墳の石室上面・遺物出土状況 …… 27・28
図15　Ｂ－１号墳出土の土器 …… 29
図16　Ｂ－１号墳出土の馬具 …… 30
図17　Ｂ－１号墳出土の大刀 …… 31
図18　Ｂ－１号墳出土の金属製品 …… 32
図19　Ｂ－２号墳の石室 …… 33・34
図20　Ｂ－２号墳の閉塞石 …… 35
図21　Ｂ－２号墳出土の土器 …… 35
図22　Ｂ－２号墳の墳丘・石室断面 …… 36
図23　Ｂ－３号墳の石室 …… 37
図24　Ｂ－４号墳の石室 …… 39
図25　Ｂ－３・－４号墳出土の土器 …… 39
図26　Ｂ２調査地区の調査前の地形測量図 …… 41
図27　Ｂ２調査地区の平面図 …… 42
図28　Ｂ－５号墳の石室 …… 43
図29　Ｃ調査地区の調査前の地形測量図 …… 45・46

図30　C調査地区の平面図 …… 47・48
図31　C－1号墳の周溝 …… 49
図32　C－1号墳出土の土器 …… 50
図33　C－2号墳の周溝 …… 50
図34　C－3号墳の周溝 …… 51
図35　C－4号墳の石室 …… 52
図36　C－5号墳 …… 53
図37　D1調査地区の調査前の地形測量図 …… 55・56
図38　D1調査地区の平面図 …… 57・58
図39　D－1号墳の石室上面・遺物出土状況 …… 59・60
図40　D－1号墳の石室1 …… 61・62
図41　D－1号墳の石室2 …… 63
図42　D－1号墳の墳丘・石室断面 …… 64
図43　D－1号墳の墳丘除去後の平面図 …… 65・66
図44　D－1号墳の排水溝 …… 67
図45　D－1号墳の家形石棺（蓋） …… 68
図46　D－1号墳の家形石棺（身） …… 69
図47　D－1号墳出土の土器1 …… 71
図48　D－1号墳出土の土器2 …… 72
図49　D－1号墳出土の珠文鏡 …… 73
図50　D－1号墳出土の馬具1 …… 74
図51　D－1号墳出土の馬具2 …… 75
図52　D－1号墳出土の馬具3 …… 76
図53　D－1号墳出土の馬具4 …… 77
図54　D－1号墳出土の武器 …… 78
図55　D－1号墳出土の装身具 …… 79
図56　D－2号墳 …… 81
図57　F調査地区の調査前の地形測量図 …… 83・84
図58　F調査地区の平面図 …… 85
図59　F－1号墳出土の土器 …… 86
図60　F－1号墳の石室 …… 87・88
図61　F－1号墳出土の装身具と石製品 …… 89

図62　G－1号墳出土の土器 …… 90
図63　G－2号墳出土の装身具 …… 90
図64　G調査地区の平面図 …… 91
図65　G－1号墳の石室 …… 92
図66　G－2号墳の石室 …… 93
図67　土壙1・2・3・4 …… 95
図68　土壙1出土の土器 …… 96
図69　土壙5 …… 97
図70　土器棺墓 …… 98
図71　火葬墓 …… 99
図72　竪穴住居1 …… 100
図73　竪穴住居1出土の遺物 …… 100
図74　竪穴住居2 …… 101
図75　竪穴住居2出土の土器 …… 101
図76　竪穴住居3 …… 102
図77　竪穴住居4 …… 103
図78　堀立柱建物1 …… 104
図79　堀立柱建物2 …… 104
図80　堀立柱建物3 …… 105
図81　堀立柱建物4 …… 105
図82　D2調査地区の平面図 …… 106
図83　堀立柱建物5 …… 107
図84　堀立柱建物6 …… 107
図85　堀立柱建物7 …… 108
図86　古墳出土の須恵器の変遷図 …… 112・113

表　目　次

表1　調査地区及び古墳名新旧対象表 …… 6
表2　調査地区一覧表 …… 8
表3　梶原古墳群一覧表 …… 111
表4　畿内及び周辺部における三累環式柄頭の出土地名表 …… 115

土器観察表（一）Ａ－１・Ｂ－１号墳出土の土器 …… 119
土器観察表（二）Ｂ－１～４号墳出土の土器 …… 120
土器観察表（三）Ｃ－１・Ｄ－１号墳出土の土器 …… 121
土器観察表（四）Ｄ－１号墳出土の土器 …… 122
土器観察表（五）Ｄ－１・Ｆ－１号墳出土の土器 …… 123
土器観察表（六）Ｆ－１・Ｇ－１号墳 土壙１ 土器棺墓 火葬墓
竪穴住居１・２出土の土器 …… 124

図　版　目　次

参照頁

巻頭図版１　梶原古墳群Ｄ－１号墳出土の双葉剣菱形杏葉・装身具 …… 71～80
巻頭図版２　梶原古墳群Ｄ－１号墳の石室全景 …… 54～63
図版１　梶原古墳群の全景航空写真 …… １・９
図版２　梶原古墳群Ｄ－１号墳の移築地の全景航空写真 …… 7
図版３　調査地区の航空写真 …… ９・12～16・21～24
上　Ａ１調査地区
下　Ｂ１調査地区
図版４　調査地区の航空写真 …… 12・42・43・54～58
上　Ｂ２調査地区
下　Ｃ・Ｄ１調査地区
図版５　調査地区の航空写真 …… 80・83～85・89・91
上　Ｆ調査地区
下　Ｇ調査地区
図版６　Ａ２調査地区 …… 13・14
上　調査前の状況（南西から）
下　全景（南から）

図版７　Ａ－１号墳の石室 …… ９・17
上　　全景（南東から）
中　左　敷石除去後の状況（南東から）
　　右　奥壁背面の状況（北西から）
下　左　全景（南西から）
　　右　全景（北西から）
図版８　Ａ－２号墳の石室 …… 12・18
上　全景１（南から）
下　全景２（西から）
図版９　Ｂ１調査地区 …… 21・22
上　調査前状況の遠景（東から）
下　調査前状況の近景（南東から）
図版10　Ｂ２調査地区 …… 41
上　調査前状況の遠景（南西から）
下　調査前状況の近景（南から）
図版11　Ｂ１調査地区 …… 23・24
上　全景１（北西から）
下　全景２（北西から）
図版12　Ｂ２調査地区 …… 42
上　全景１（南西から）
下　全景２（北東から）
図版13　Ｂ－１号墳の石室上段部 …… 19・25・26
上　　全景（南東から）
中　左　右側壁（南東から）
　　右　左側壁（南西から）
下　左　奥壁　（南東から）
　　右　左側壁奥部（南西から）
図版14　Ｂ－１号墳の石室 …… 19・25・26
上　完掘状況（南東から）
下　羨道側より奥壁をのぞむ（南東から）

図版15　B－1号墳の石室 …… 19・20・25・26・27・28
上　左　床面の遺物出土状況（西から）
右　床面の遺物出土状況（東から）
中　左　大刀出土状況（南東から）
右　三累環式柄頭出土状況（西から）
下　奥壁部の須恵器の出土状況（南東から）
図版16　B－2号墳の石室 …… 31～34
上　全景（南東から）
下　羨道側より奥壁をのぞむ（南東から）
図版17　B－2号墳の石室 …… 31～35
上　左　奥壁（南東から）
右　玄室左側壁（西から）
中　左　羨道部左側壁（西から）
右　閉塞石（西から）
下　左　羨道部右側壁1（東から）
右　羨道部右側壁2（東から）
最下　左　玄室側より羨道部をのぞむ（南東から）
右　掘方断面（南東から）
図版18　B－3号墳の石室 …… 36～38
上　全景（南東から）
中　左　羨道側より奥壁をのぞむ（南東から）
右　奥壁背面の状況（北西から）
下　左　右側壁（南東から）
右　右側壁側の掘方（南西から）
図版19　B－4号墳の石室 …… 38～40
上　全景（南東から）
中　左　奥壁側より（北西から）
右　羨道側より（南東から）
下　左　右側壁（東から）
右　左側壁（北から）

図版20　C調査地区 …… 45・46
上　調査前状況の遠景（南西から）
下　調査前状況の近景（南西から）
図版21　C調査地区 …… 43・47・48
上　全景1（北から）
下　全景2（北から）
図版22　C－1号墳 …… 43・44・49
上　全景1（南西から）
下　全景2（北から）
図版23　C－2号墳 …… 44・50
上　全景1（北西から）
下　全景2（南西から）
図版24　C－3・－5号墳 …… 44・51・53
上　C－3号墳の全景（南東から）
下　C－5号墳の全景（南東から）
図版25　C－4号墳の石室 …… 52
上　　全景1（南東から）
中　左　全景2（南東から）
　　右　全景3（北西から）
下　左　全景4（北東から）
　　右　全景5（南西から）
図版26　D調査地区 …… 54～56
上　調査前状況の遠景（南西から）
下　調査前状況の近景（北から）
図版27　D調査地区 …… 54・57・58
上　全景1（北西から）
下　全景2（南西から）
図版28　D－1号墳の石室 …… 54・59～63
全景1（南東から）

図版29　D－1号墳の石室 …… 54・59～63
上　左　全景2（北西から）
右　玄室　（北西から）
中　左　全景3（南東から）
右　玄室　（南東から）
下　左　全景4（南東から）
右　玄門　（南東から）
図版30　D－1号墳の石室 …… 64・68～70
上　　石棺出土状況1（北西から）
中　左　石棺出土状況2（東から）
右　石棺出土状況3（北から）
下　左　石棺出土状況4（南から）
右　石棺出土状況5（北西から）
図版31　D－1号墳の排水溝 …… 54・64～67
上　全景（南東から）
下　蓋石除去後の状況（南東から）
図版32　D－2号墳 …… 65・66・80・81
上　　全景1（東から）
中　　全景2（南から）
下　左　石室全景1（北東から）
右　石室全景2（南東から）
図版33　F調査地区 …… 80・82～85
上　全景1（南から）
中　全景2（東から）
下　全景3（西から）
図版34　F－1号墳の石室 …… 82・87・88
上　　全景（北東から）
中　左　羨道部（南西から）
右　框石　（北東から）
下　左　袖石　（南東から）
右　玄室床面の状況（南西から）

図版35　F－1号墳の石室 …… 82・87・88
上　玄室床面の土器出土状況1（南西から）
中　玄室床面の土器出土状況2（北東から）
下　玄室床面の敷石状況（南西から）
図版36　F－2号墳 …… 85・89
上　全景1（南東から）
下　全景2（北西から）
図版37　G調査地区 …… 89
上　　調査前状況の近景（西から）
中　左　調査地区中央部の調査前状況（東から）
　　右　調査地区中央部の調査前状況（南東から）
下　左　調査地区東端部の調査前状況（北西から）
　　右　調査地区西端部の調査前状況（東から）
図版38　G調査地区 …… 89・91
上　　全景（東から）
中　左　土壙の集中域（北から）
　　右　土壙の集中域（南東から）
下　左　調査地区東端域（南東から）
　　右　調査地区西端域（西から）
図版39　G－1号墳の石室 …… 89～92
上　　全景（南東から）
中　左　奥壁（南東から）
　　右　奥壁の背面（北西から）
下　左　玄室の右側壁の奥部（北東から）
　　右　玄室の右側壁（北東から）
図版40　G－2号墳の石室 …… 89～91・93
上　　全景1（南東から）
中　左　全景2（北西から）
　　右　入口付近（北西から）
下　左　石敷断面（西から）
　　右　掘方（南東から）

図版41　土壙１～４ …… 94～96
上　左　土壙１の全景（南から）
右　土壙１の土器出土状況（北から）
中　左　土壙２・３の全景１（南から）
右　土壙２・３の全景２（北から）
下　左　土壙４の検出状況１（南から）
右　土壙４の検出状況２（北から）
図版42　土壙５・土器棺墓・火葬墓 …… 96・97
上　左　土壙５の全景（西から）
右　土壙５の断面（南から）
中　左　土器棺墓の土器埋納状況（南東から）
右　土器棺墓の完掘状況（南東から）
下　左　火葬墓の骨壺埋納状況（南東から）
右　火葬墓の完掘状況（南東から）
図版43　竪穴住居１ …… 99・100
上　炭化材の検出状況（南西から）
下　完掘状況（南西から）
図版44　竪穴住居２～４ …… 101～103
上　竪穴住居２の全景（東から）
中　竪穴住居３の全景（南東から）
下　竪穴住居４の全景（南東から）
図版45　掘立柱建物１～５ …… 104・105・107
上　左　掘立柱建物１の全景（南東から）
右　掘立柱建物２・３の全景（南から）
中　左　掘立柱建物２の全景（南東から）
右　掘立柱建物３の全景（南東から）
下　左　掘立柱建物４の全景（南西から）
右　掘立柱建物５の全景（南東から）

図版46　Ｄ２調査地区・掘立柱建物６・７ …… 106～108
上　Ｄ２調査地区の全景１（北東から）
中　左　Ｄ２調査地区の全景２（南西から）
右　Ｄ２調査地区の遺構の集中域（北東から）
下　左　掘立柱建物６の全景（北から）
右　掘立柱建物７の全景（南から）
図版47　Ａ－１号墳出土の土器・Ｂ－１号墳出土の土器 …… 12・18・20・29
図版48　Ｂ－１号墳出土の土器 …… 20・29
図版49　Ｂ－１号墳出土の土器 …… 20・29
図版50　Ｂ－１号墳出土の土器・Ｂ－２号墳出土の土器 …… 20・29・32・35・36
図版51　Ｂ－２～Ｂ－４号墳出土の土器 …… 32・35・36・38・39
図版52　Ｃ－１号墳出土の土器 …… 44・50
図版53　Ｃ－１号墳出土の土器 …… 44・50
図版54　Ｄ－１号墳出土の土器 …… 70～72
図版55　Ｄ－１号墳出土の土器 …… 70～72
図版56　Ｄ－１号墳出土の土器 …… 70～72
図版57　Ｄ－１号墳出土の土器・Ｆ－１号墳出土の土器 …… 70～72・82・86
図版58　Ｆ－１号墳出土の土器 …… 82・86
図版59　Ｆ－１号墳・Ｇ－１号墳、土壙１出土の土器 …… 82・86・90・94・96
図版60　土壙１　土器棺墓　火葬墓　竪穴住居１・２出土の土器 …… 96～101
図版61　Ｂ－１号墳石室出土の金属製品　馬具 …… 20・30
図版62　Ｂ－１号墳石室出土の金属製品　武器・装身具 …… 20・29～32
Ｄ－１号墳石室出土の珠文鏡 …… 71～73
図版63　Ｄ－１号墳石室出土の金属製品　馬具１ …… 72～74
図版64　Ｄ－１号墳石室出土の金属製品　馬具２ …… 73・75
図版65　Ｄ－１号墳石室出土の金属製品　馬具３ …… 75・76
図版66　Ｄ－１号墳石室出土の金属製品　馬具４ …… 75・77・78
図版67　Ｄ－１号墳石室出土の金属製品　武器・装身具 …… 78・79
Ｆ－１号墳石室出土の金属製品　装身具 …… 89
Ｆ－１号墳石室出土の石製品 …… 89
Ｇ－１号墳石室出土の金属製品　装身具 …… 90
図版68　Ｄ－１号墳石室出土の石製品・ガラス製品 …… 79・80
竪穴住居１出土の石製品 …… 99・100

第Ⅰ章　位置と環境

第１節　地理的環境

梶原古墳群は高槻市梶原に所在し（図１）、小字名は平尾・石塚と称する。

大阪府の北東部に位置する高槻市は、山地と低地に区分することができ、北域を古生代の丹波層群からなる標高約150～700ｍの北摂山地が占地し、南域には淀川低地がひろがる。山地からは、大阪層群を基盤とする高槻丘陵・南平台丘陵・奈佐原丘陵が派生し、奈佐原丘陵の南端からは藍野と呼ばれる富田台地がひろがっている。

梶原古墳群は、大阪平野の北東最奥部で、北摂山地（ポンポン山山塊）が三島平野に向かって派生する標高約30～50ｍの尾根上に形成されている。

古墳群からは、淀川を挟んで東には男山を、南東方向には生駒山地が見渡せ、展望の良い場所に占地している。

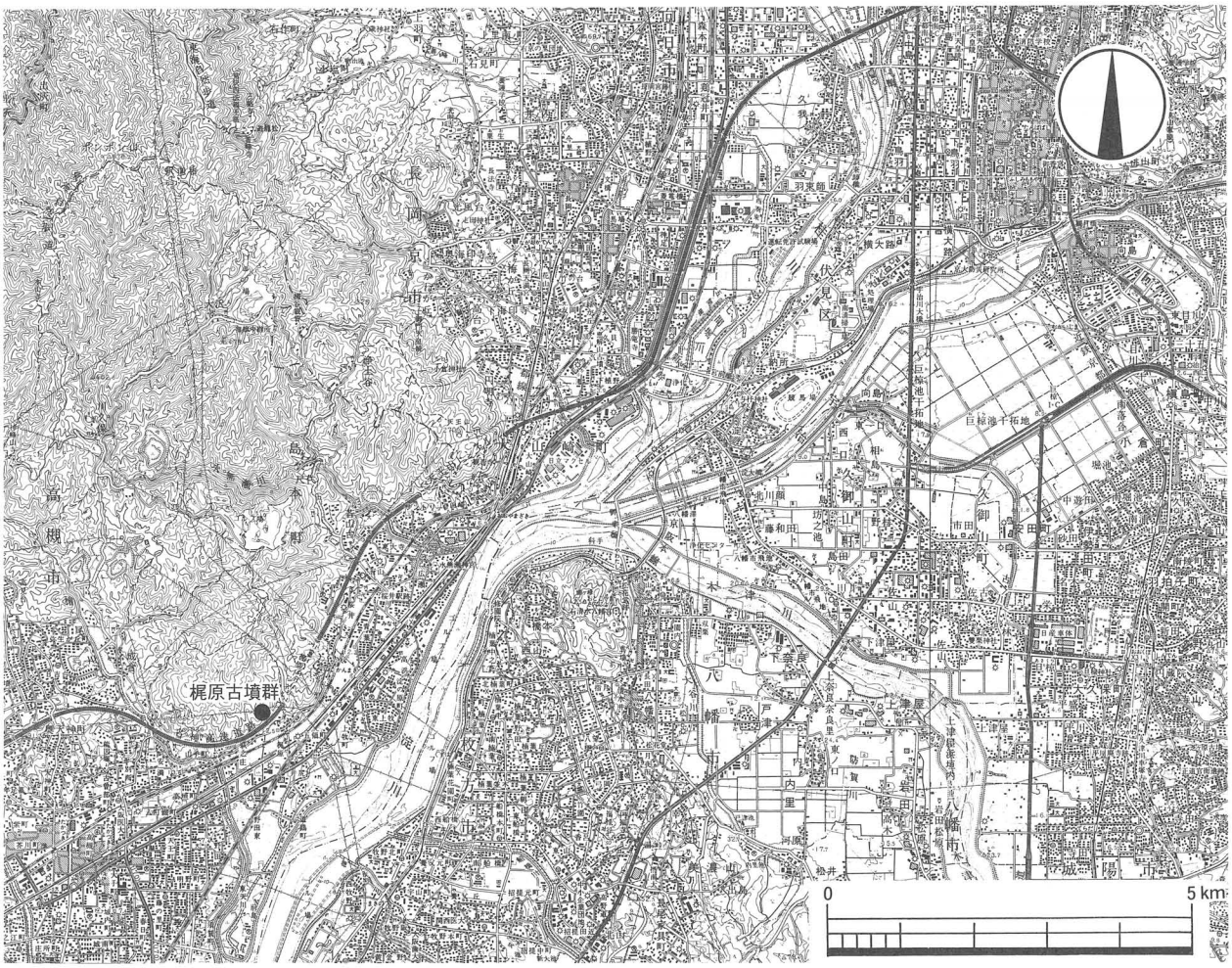
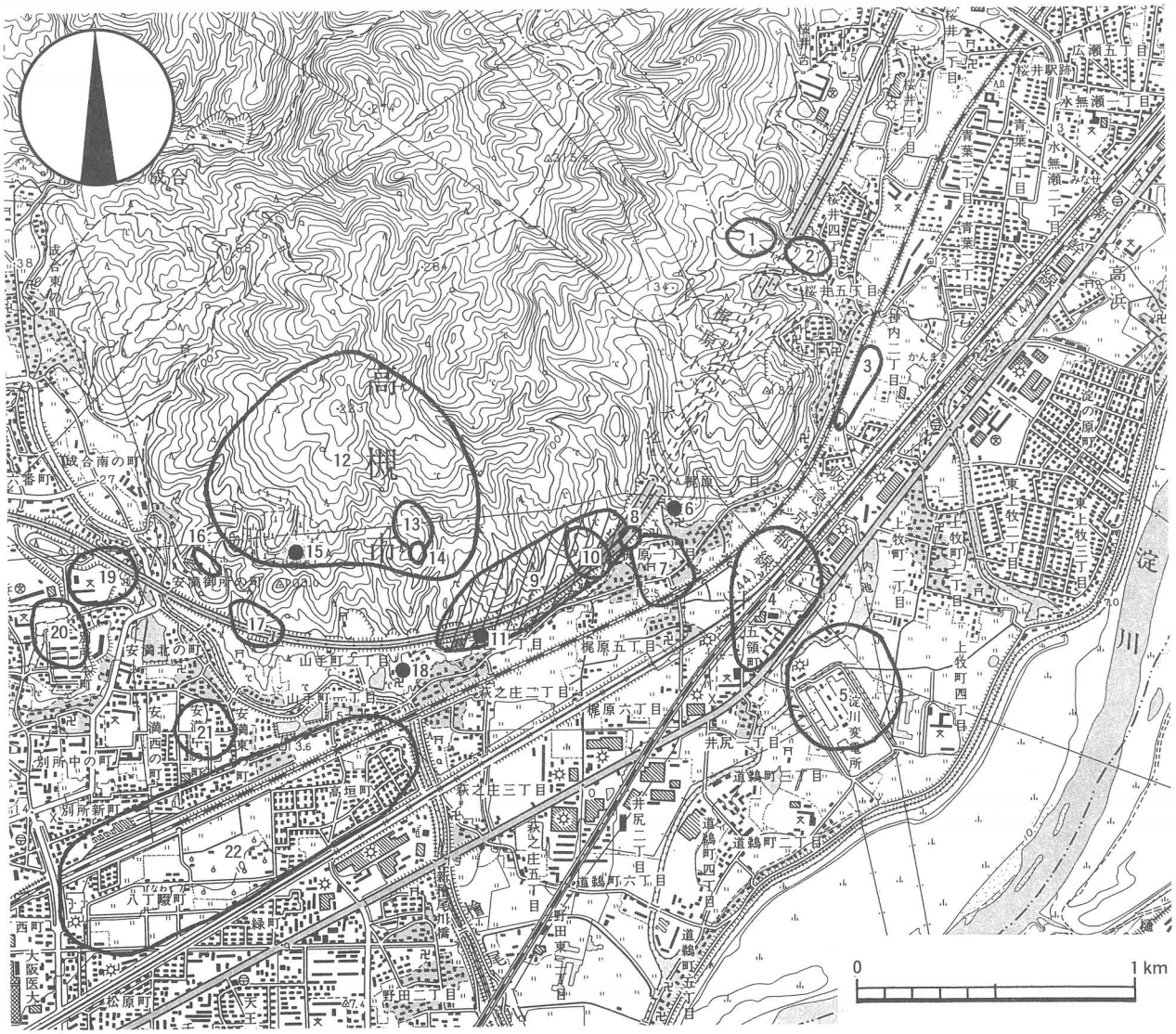


図１　梶原古墳群の位置

第２節　歴史的環境

三島平野を見下ろすことができる北摂山地には、各時期を通じ、地形に沿って、ほぼ南北方向に多数の古墳が点在する。梶原古墳群が立地する、檜尾川以東地域においても、急峻な地形を利用した群集墳が顕著に見られる。さらに、７世紀半ばから８世紀半ばにかけての瓦窯跡や寺院跡も見られ、当該地周辺は、三島地方の歴史的景観を復元するうえで重要な地域である。したがって、本節では、古墳時代を中心とした、歴史的環境を概述する（図２）。



1	神内古墳群	2	源吾山古墳群	3	神内遺跡	4	梶原南遺跡	5	上牧遺跡
6	梶原経塚	7	梶原寺跡	8	梶原瓦窯跡	9	**梶原古墳群**	10	梶原北遺跡
11	萩之庄瓦窯跡	12	安満山古墳群	13	萩之庄古墳群	14	萩之庄遺跡	15	安満宮山古墳
16	安満遺物散布地	17	磐手杜古墳群	18	法照寺古墳	19	紅茸山古墳群	20	奥坂古墳群
21	安満北遺跡	22	安満遺跡						

図２　梶原古墳群周辺の遺跡分布

当地における前期の古墳として萩之庄１・２号墳があり、それぞれが、単独墳的な在り方を見せてはいるが、比較的近接して築造されている。昭和43年に調査が実施された１号墳は、主体部の殆どが削平を受けていたが、竪穴式石室の内部に粘土床をもつ幅約0.6mの割竹形木棺のあったことが知られている。遺物は、付近の斜面や、撹乱坑より銅鏡片・碧玉製石釧・車輪石等が出土している。また平成９年７月より調査が実施されている安満宮山古墳は萩之庄１・２号墳の南西約400mに位置し、「青龍三年」銘方格規矩四神鏡を含む舶載鏡５面が出土し、注目を集めた。墓壙の規模は現存する範囲で、東西7.5m、南北3.5m、深さ0.3～0.4mを測り、墓壙中央部には上縁長5.3m、幅1.3m、深さ1.2mの木棺埋納壙が穿たれている。５面の舶載鏡は木棺埋納壙の東半分より出土している。その他の遺物としてはガラス小玉・鉄刀・鉄斧・鉇が出土している。

景初三年前後の三角縁神獣鏡と全国でも２例目の青龍三年銘鏡が一括して出土したことは畿内での３世紀後半における鏡の伝播の様相にも迫る極めて重要な成果である。

中期の古墳は現在のところ確認されていないが、後期になって比較的小規模な群集墳がみられる。それら群集墳の分布域は、安満山の南斜面に立地する安満山古墳群を除けば、名神高速道路を挾む山地の裾部に集中しており、梶原古墳群・磐手杜古墳群等があげられる。

安満山古墳群の南西方に位置する磐手杜古墳群は、現在３基の古墳が確認され、そのうち１基が名神高速道路建設に伴い調査が行なわれている。最下段のみ検出の石室から銀環１個と須恵器や土師器片・埴輪片・鉄器片が出土している。

萩之庄１・２号墳の北西方、安満山の南斜面に位置する安満山古墳群は古墳数40数基で構成され、標高100～200mの尾根上に展開する。昭和44年に、同一尾根上につくられている５基の調査が実施されている。いずれも横穴式石室を内部主体とし、比較的良好な遺存状態にあり、須恵器等の副葬品の組合せから被葬者数の推定がなされている。その時期は５基とも６世紀後葉から６世紀末葉に位置付けられている。

７世紀半ばから８世紀半ばに位置づけられる、梶原寺跡・梶原瓦窯跡も古墳群同様、山地の裾部に営まれる。

正倉院文書に記述がみられる梶原寺は、高槻市梶原１丁目地内に所在する畑山神社境内がその推定地とされており、昭和52年に同神社東隣で私立保育所建設に伴い調査が実施されている。梶原寺に関わる遺構として、２間×７間の僧坊と推定される掘立柱建物跡を検出しているが、基壇や礎石の類は発見されていない。

梶原瓦窯跡は平成４・５年度に調査が行なわれ、７世紀半ばの地下式の窖窯を３基、半地下式の窖窯を１基、８世紀前半のロストル式平窯を１基検出している。

檜尾川以東地域では、前述の安満宮山古墳の成果が示すように、古墳時代前期においては三

島を代表するような在地有力者層の存在がうかがえる。中期に入ると、造墓活動は希薄になるものの、後期群集墳が営まれ、その造営を停止した後は、寺院の建立や瓦窯の形成に力を注ぎ、中央と深い関係をもつ在地有力者層の変遷がみられ興味深い。

瀬戸内海に通じる淀川の水運にも関わったであろう在地有力者層の伸長は、3世紀後半を皮切りに6世紀後半に再び活発となり、7世紀中頃に顕在化したのであろう。

参考文献

1．原口正三　『高槻市史』第6巻　考古編　高槻市　1973年
2．森田克行ほか　『高槻市文化財年報　昭和51・52年度』高槻市教育委員会　1978年
3．『大日本古文書』4、pp.224－5　東京大学資料編纂所編　1903年
4．鎌田博子　『梶原瓦窯跡の調査』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第3輯　名神高速道路内遺跡調査会　1997年
5．高槻市教育委員会　「安満宮山古墳」　緊急報告会資料　1997年8月31日

第II章　調査に至る経緯

第１節　発掘調査に至る経緯

昭和38年に供用された名神高速道路（中央自動車道西宮線）は、近年の著しい交通量増加に伴う交通渋滞を解消すべく、昭和57年に栗東から瀬田東の両インターチェンジ間と、吹田から京都南の両インターチェンジ間を３車線化する拡幅事業が決定された。

この計画のもとに、事業対象地における文化財の取り扱いについて文化庁・関係府県教育委員会・日本道路公団との間で協議がなされ、文化財の保存については十分な配慮がなされることが確認された。

大阪府域においては、埋蔵文化財の取り扱いについて、大阪府教育委員会・当該市町教育委員会・日本道路公団大阪建設局の間で協議を重ね、既存の調査報告書による予備調査、現地の踏査等を経て確認された約40ヶ所の埋蔵文化財包蔵地については、拡幅事業に先立ち発掘調査を実施することで合意に達した。

発掘調査は、対象地が二市一町にまたがる大規模なものであり、かなり長い期間と多大な費用を要するため、調査方法・調査費用の積算・保存協議等については統一的な対応が必要となった。この為、市町教育委員会と大阪府教育委員会で共同調査を行うことが基本方針とされ、各市町より専門職員を派遣する調査会を組織し、調査を実施することとなった。

以上のような経過により、平成２年11月16日に「名神高速道路内遺跡調査会」が発足した。

第２節　発掘調査の経過

梶原古墳群の調査は平成３年６月から着手され平成５年12月に終了した。各調査区の面積・調査期間・担当者については表２に示す。以下発掘調査の経過についてはその概要を年度毎に順次述べるが、まずはじめに、発見した古墳の名称、号数等について整理しておきたい。

調査当時、調査の進行上、各古墳の号数は発見順に付されている。しかし、広範囲にわたって調査が実施された当古墳群の調査報告にあたっては、古墳が立地する尾根に名称を付し、各尾根ごとに古墳を整理することが必要である。また、今回の報告においては、丸山古墳群・萩之庄瓦窯跡として調査を実施した調査地区の成果も梶原古墳群の成果として再整理が行なわれている。これは、高槻市教育委員会が、平成３年・４年度の当調査会の調査成果をうけ、平成５年に梶原古墳群の範囲を変更拡大したことに起因する。

丸山古墳群という名称は現在使用されておらず、萩之庄瓦窯跡は、梶原古墳群の範囲の中で存続するものの、今回の調査においては瓦窯関連の遺構は全く検出されず、古墳を２基検出し

ている。これらを考慮すれば、上記の２遺跡の範囲を梶原古墳群の支群として扱い、報告することが当古墳群の性格に迫るうえでも必要であると考えられる。

調査当時使用していた遺跡の名称・調査地区名・各古墳の号数は、随時実施された記者発表や現地見学会等の資料に掲載し、周知されているので、混乱をさけるために統一的な名称に変更した（表１）。

表１　調査地区及び古墳名新旧対象表

調査地区名		古 墳 名		調査地区名		古 墳 名	
新名称	旧名称	新名称	旧名称	新名称	旧名称	新名称	旧名称
梶原古墳群 Ａ１調査地区	梶原古墳群 第５調査地区	梶原古墳群 Ａ－１号墳	梶原古墳群 10号墳	梶原古墳群 Ｄ１調査地区	梶原古墳群 第１調査地区	梶原古墳群 Ｄ－１号墳	梶原古墳群 １号墳
		梶原古墳群 Ａ－２号墳	梶原古墳群 11号墳			梶原古墳群 Ｄ－２号墳	梶原古墳群 ７号墳
梶原古墳群 Ａ２調査地区	梶原古墳群 第４調査地区			梶原古墳群 Ｄ２調査地区	梶原古墳群 第２調査地区		
梶原古墳群 Ｂ１調査地区	梶原古墳群 第８調査地区	梶原古墳群 Ｂ－１号墳	梶原古墳群 13号墳	梶原古墳群 Ｄ３調査地区	梶原古墳群 第11調査地区		
		梶原古墳群 Ｂ－２号墳	梶原古墳群 12号墳	梶原古墳群 Ｅ１調査地区	梶原古墳群 第10調査地区		
		梶原古墳群 Ｂ－３号墳	梶原古墳群 14号墳	梶原古墳群 Ｅ２調査地区	梶原古墳群 第９調査地区		
		梶原古墳群 Ｂ－４号墳	梶原古墳群 15号墳	梶原古墳群 Ｆ調査地区	丸山古墳群 第１調査地区	梶原古墳群 Ｆ－１号墳	丸山古墳群 ２号墳
梶原古墳群 Ｂ２調査地区	梶原古墳群 第６調査地区	梶原古墳群 Ｂ－５号墳	梶原古墳群 ９号墳			梶原古墳群 Ｆ－２号墳	丸山古墳群 １号墳
梶原古墳群 Ｃ調査地区	梶原古墳群 第３調査地区	梶原古墳群 Ｃ－１号墳	梶原古墳群 ３号墳	梶原古墳群 Ｇ調査地区	萩之庄瓦窯跡 第１調査地区	梶原古墳群 Ｇ－１号墳	萩之庄瓦窯 遺構No.８
		梶原古墳群 Ｃ－２号墳	梶原古墳群 ５号墳			梶原古墳群 Ｇ－２号墳	萩之庄瓦窯 遺構No.９
		梶原古墳群 Ｃ－３号墳	梶原古墳群 ６号墳				
		梶原古墳群 Ｃ－４号墳	梶原古墳群 ４号墳				
		梶原古墳群 Ｃ－５号墳	梶原古墳群 ２号墳				

1）平成３年度

平成３年度はＡ１・Ｃ・Ｄ１・Ｄ３・Ｆ調査地区の調査を実施した。Ａ１・Ｄ３調査地区は先行して実施された試掘調査の結果、遺構・遺物は確認できず、全面調査には移行しなかった。

Ｄ１調査地区では家形石棺を埋葬する横穴式石室（Ｄ－１号墳）を検出したため、平成３年10月３日に、Ｄ１調査地区（Ｄ－１号墳）・Ｆ調査地区（Ｆ－１号墳）の調査成果と併せて記者発表を行い、同５日に現地見学会を実施した。見学会には約180名の参加を得た。さらに12月４日にはＤ－１号墳出土の馬具についても記者発表が行なわれた。

Ｄ－１号墳の取り扱いについて、現状保存が不可能であると決定され、高槻市立上牧小学校へ石室を移築保存することとなった（図版２）。

2）平成４年度

平成４年度はＡ２・Ｂ１・Ｂ２・Ｅ１・Ｅ２・Ｇ調査地区の調査を実施した。Ｅ１・Ｅ２調査地区は先行して実施された試掘調査の結果、遺構・遺物は確認できず、全面調査には移行しなかった。

Ｂ－１号墳より多数の副葬品と伴に、大阪府下では初めての出土例にあたる三累環式柄頭が出土し、平成５年２月26日に記者発表が行なわれた。

Ｂ－１号墳は、現状保存のため、石室内には海砂を詰めて、保存処置が行なわれた。

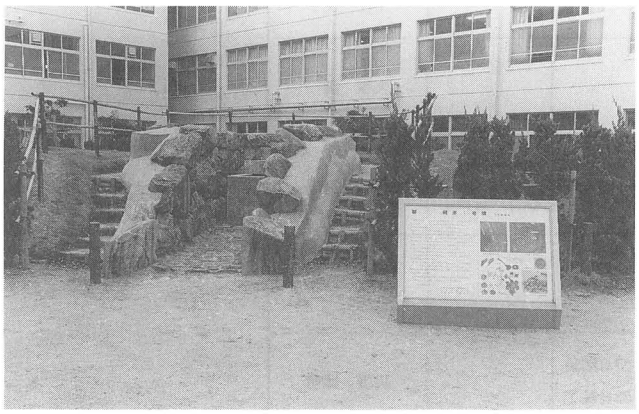


写真１　Ｄ－１号墳の移築後の全景
（上牧小学校校庭）

写真２　Ｄ－１号墳の説明掲示板

3）平成５年度

平成５年度はＤ２調査地区の調査を実施した。Ｄ２調査地区は現況が墓地であったため、移転地の墓地の完成を待って10月から調査に着手した。先行して試掘調査を実施したところ、墓地造成時の削平等の影響で、明瞭な遺物包含層は検出できなかったが、地山面において柱穴と思われる遺構を検出したため、全面調査に移行した。

表２　調査地区一覧表

調査地区（新名称）	面　積(㎡)	調　査　期　間			担　当　者
		平成３年度	平成４年度	平成５年度	
Ａ１	2,300		７月６日開始 10月17日終了		土江　文子 川端　博明
Ａ２	75	10月30日開始 11月14日終了			大塚　隆
Ｂ１	2,477		９月７日開始 H5.2月26日終了		川端　博明 鎌田　博子
Ｂ２	1,205		５月19日開始 ８月７日終了		土江　文子 和田　武
Ｃ	3,545	10月２日開始 H4.3月13日終了			大塚　隆 土江　文子
Ｄ１	1,755	６月24日開始 H4.3月13日終了			大塚　隆
Ｄ２	822			10月13日開始 12月13日終了	松本　克恵
Ｄ３	162	６月16日開始 ７月３日終了			大塚　隆
Ｅ１	227		９月28日開始 10月23日終了		川端　博明
Ｅ２	2,100		10月13日開始 H5.1月28日終了		川端　博明
Ｆ	1,009	６月14日開始 10月５日終了			土江　文子
Ｇ	1,619		11月24日開始 H5.3月26日終了		和田　武

旧名称は表１を参照

第Ⅲ章　調査の成果

今回の調査において総数18基の古墳を検出している（図４）。名神高速道路建設に伴い消滅したであろう古墳を考えれば、当古墳群は、さらに多くの古墳で構成されていたと推定される。

当古墳群は北摂山地（ポンポン山山塊）から派生する標高30～50mを測る尾根上に展開しており、各調査地区の成果は地形的区分による尾根上での位置付けが必要である。そこで本報告書より呼称する尾根（Ａ～Ｄ・Ｆ・Ｇ尾根）ごとにその成果を述べる。

第１節　Ａ尾根の調査（Ａ１調査地区）

Ａ尾根では、２基の古墳を検出している。（図４・５・６、図版３）

１）Ａ－１号墳

この古墳は南西に延びる尾根線上やや北東に偏して立地しており、石室床面の標高は44.1mを測る。

１．墳丘

後世の削平が著しく、墳形や規模は不明である。

２．主体部（図７、図版７）

主体部は南東に開口する横穴式石室であり、奥壁から羨道方向をみると、右片袖の石室である。石室の長軸線の方向はＮ－27°－Ｗにとる。

石室上部は撹乱を受け、玄室と羨道部の一部だけが原位置で残っていた。

石室の掘方の平面形状は長方形で、全長約3.60m、幅約1.60～1.70m、深さは最深部（奥壁付近）で約0.30mを測る。

石室は長方形を呈する玄室に、短い羨道がつく。現存の長さは3.37mを測る。玄室の長さは2.25mで、玄室幅は奥壁部で0.87m、玄門部で1.12mを測る。羨道は現存する長さが0.75m、幅は0.75mを測る。石室の石材は、花崗岩とみられる自然石を使用している。奥壁は高さ0.42m、幅0.70m、奥行0.25mの石材を基底石として横積みし、左側壁との間に高さ0.25m、幅0.32mの石を２段積みにして高さを揃えている。玄室の左側壁の基底石は５石、右側壁は４石で構成され、各石材は横積みを基本とする。

袖石は高さ0.80m、幅0.25mの石材を縦に据えている。羨道中程から奥壁にかけての床面には、直径３～10㎝程度の河原石が部分的にみられ、敷石のなごりであると考えられ、床面のほぼ全面に敷かれていたのであろう。

羨道部の規模は不明で、羨門部付近の掘方も判然としない。

200m
0
A1調査地区
A2調査地区
B1調査地区
B2調査地区
C調査地区
D1調査地区
D2調査地区
D3調査地区
E1調査地区
E2調査地区
F調査地区
G調査地区
名「神」高「速」道「路」
田中寺
安楽寺
畑山神社
豊富尾原住宅
尾原
秋之庄一丁目
秋之庄二丁目
置賜和竜神社

図3　調査地区の位置

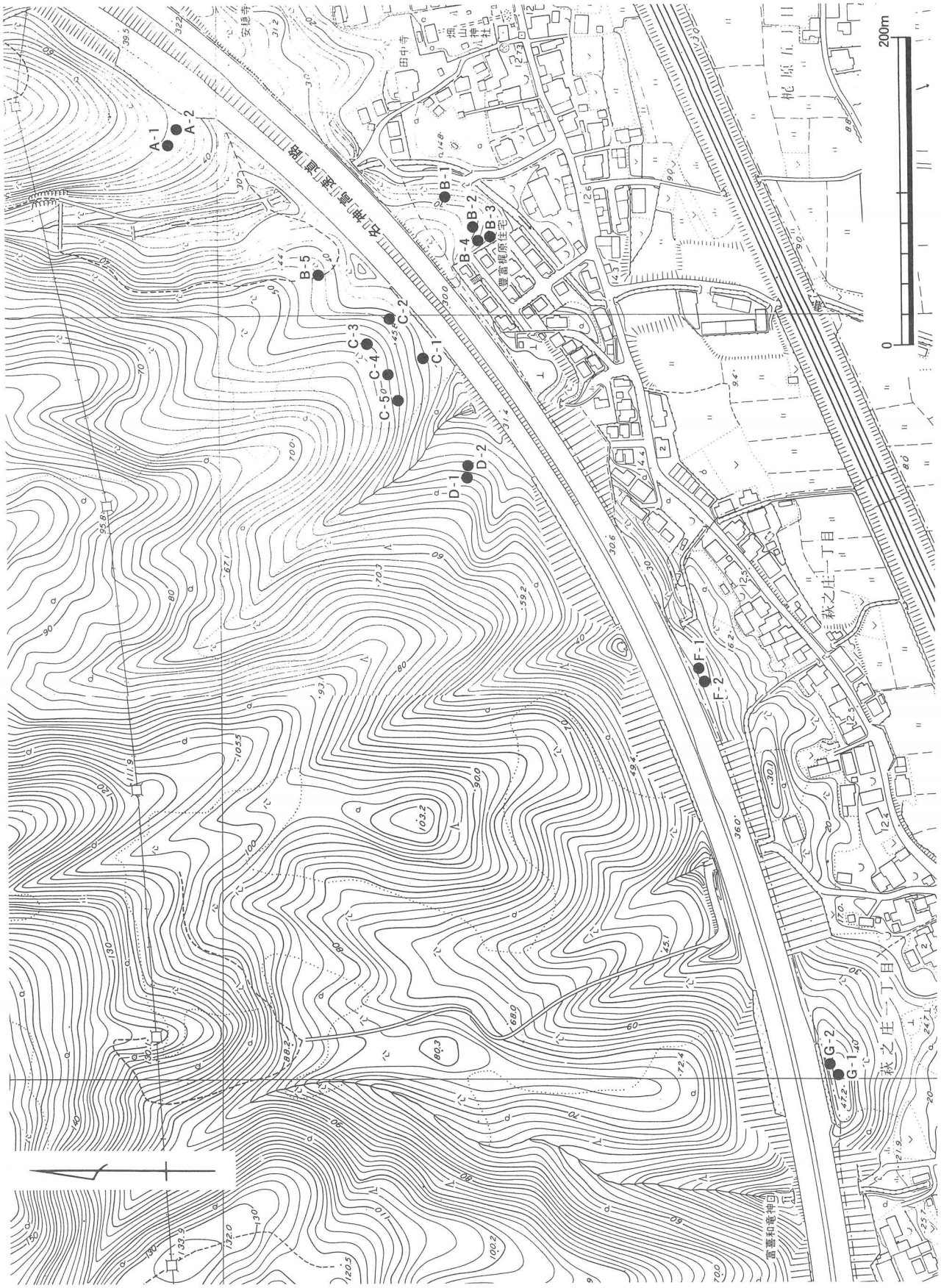


図 4　梶原古墳群の古墳分布状況

3．遺物の出土状況

A－1号墳に伴う遺物は石室床面付近の堆積土より出土している。石室床面の遺存状況から判断しても、原位置を保っているものはほとんどないと考えられる。

4．遺物

土器（図8、図版7）

須恵器は杯蓋が4点、杯身が1点、土師器は杯が2点出土している。1・2は土師器の杯である。1の底体部は深く、底部は平らで、体部内面には放射状の暗文が施される。2の口縁部は、わずかに屈曲して外方にひらき、端部は丸くおさめる。体部は内彎して内下方に下り底部は平らである。3～6は須恵器の杯蓋である。天井部と口縁部の稜は完全に消滅するが、口縁部はほぼ垂直に下る。口径は10～11㎝程度と小型である。7は須恵器の杯身である。口縁部は短く内傾し、端部は鋭い。須恵器はすべて、後述するⅣ期（TK217型式）に該当する。

2）A－2号墳

この古墳はA－1号墳の東方約10mに位置する。石室床面の標高は45.1mを測る。

1．墳丘

A－1号墳同様、竹林の開墾の際に削平を受けており、墳形や規模は不明である。

2．主体部（図9、図版8）

主体部は破壊が著しく、構造や規模を推定するのは困難であるが、残存する掘方の一部の深さから判断すれば、本来は石室を構築するために明瞭な掘方が掘削されていたと考えられ、古墳の主体部であった可能性がある。立地条件から鑑みて、北側に組まれた石組みを横穴式石室の奥壁とするならば、その長軸方向はN－20°－Wとなり、石室の奥壁側の幅は1.24m、石室の長さは2.20m以上となる。石室の石材は花崗岩とみられる自然石が使用されている。

3．遺物の出土状況

石室内やその周辺からも遺物は出土していない。

第2節　B尾根の調査（B1・2調査地区）

B尾根は、5基の古墳を検出している。（図4・11・12、図版4・11・12）

1）B－1号墳

この古墳は南に延びるやや痩せた尾根の裾部の東側縁辺部に立地する。石室床面の標高は25.3mを測る。

1．墳丘（図10・12）

墳形は直径約11mを測る円墳と推定されるが、墳丘の北から東側にかけての基底部は大きく

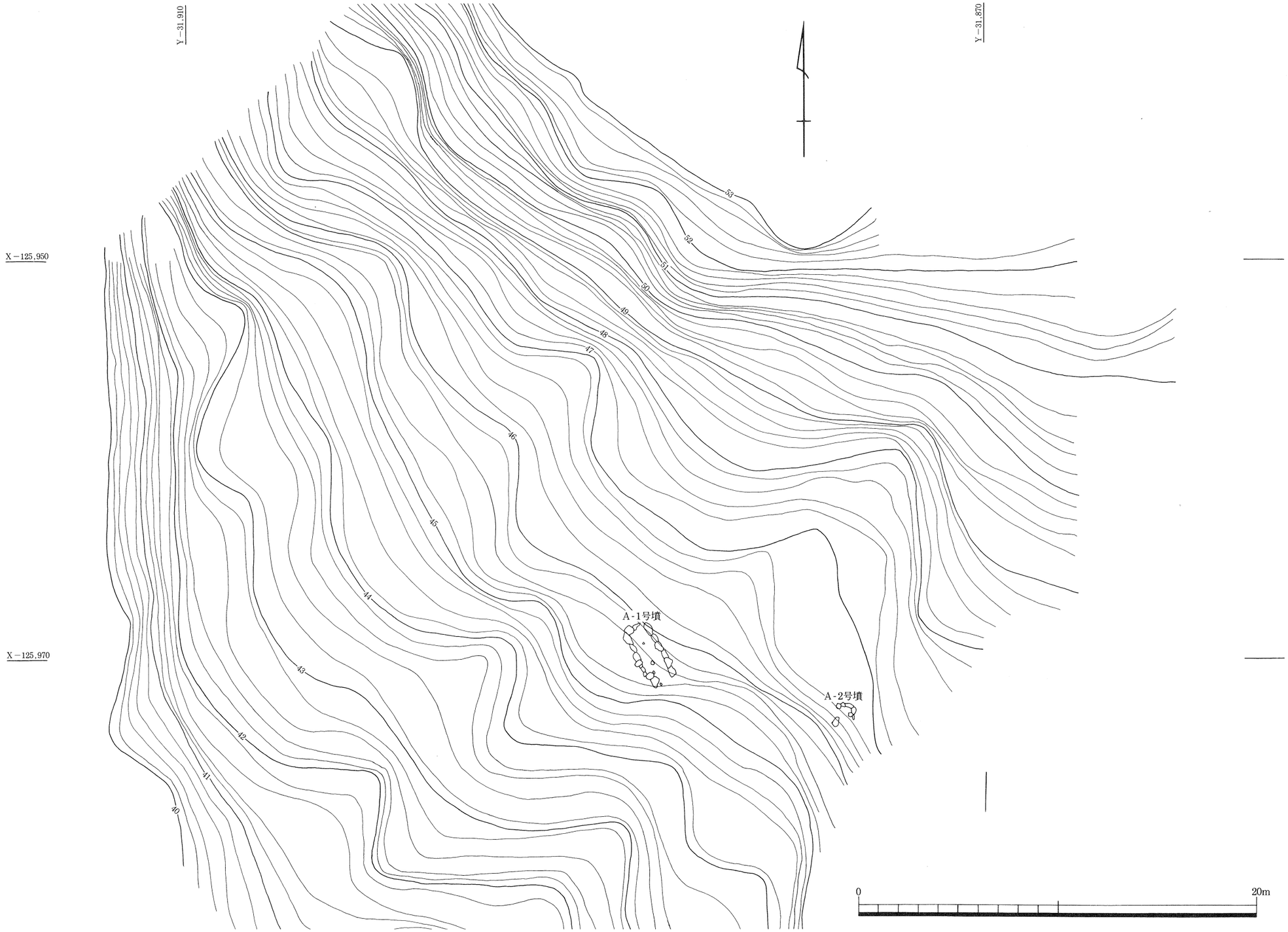


図５　Ａ１調査地区の調査前の地形測量図

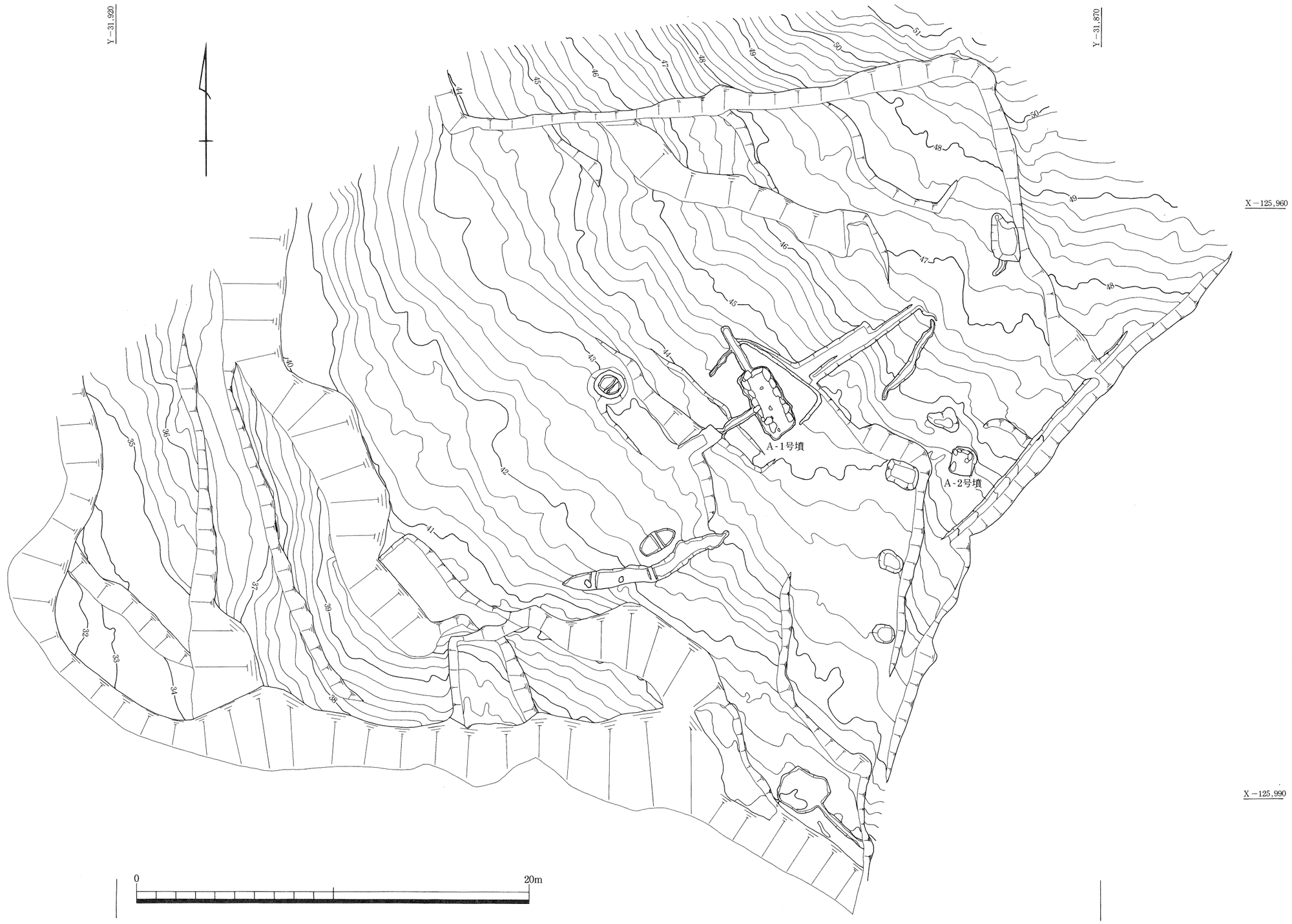


図６　Ａ１調査地区の平面図

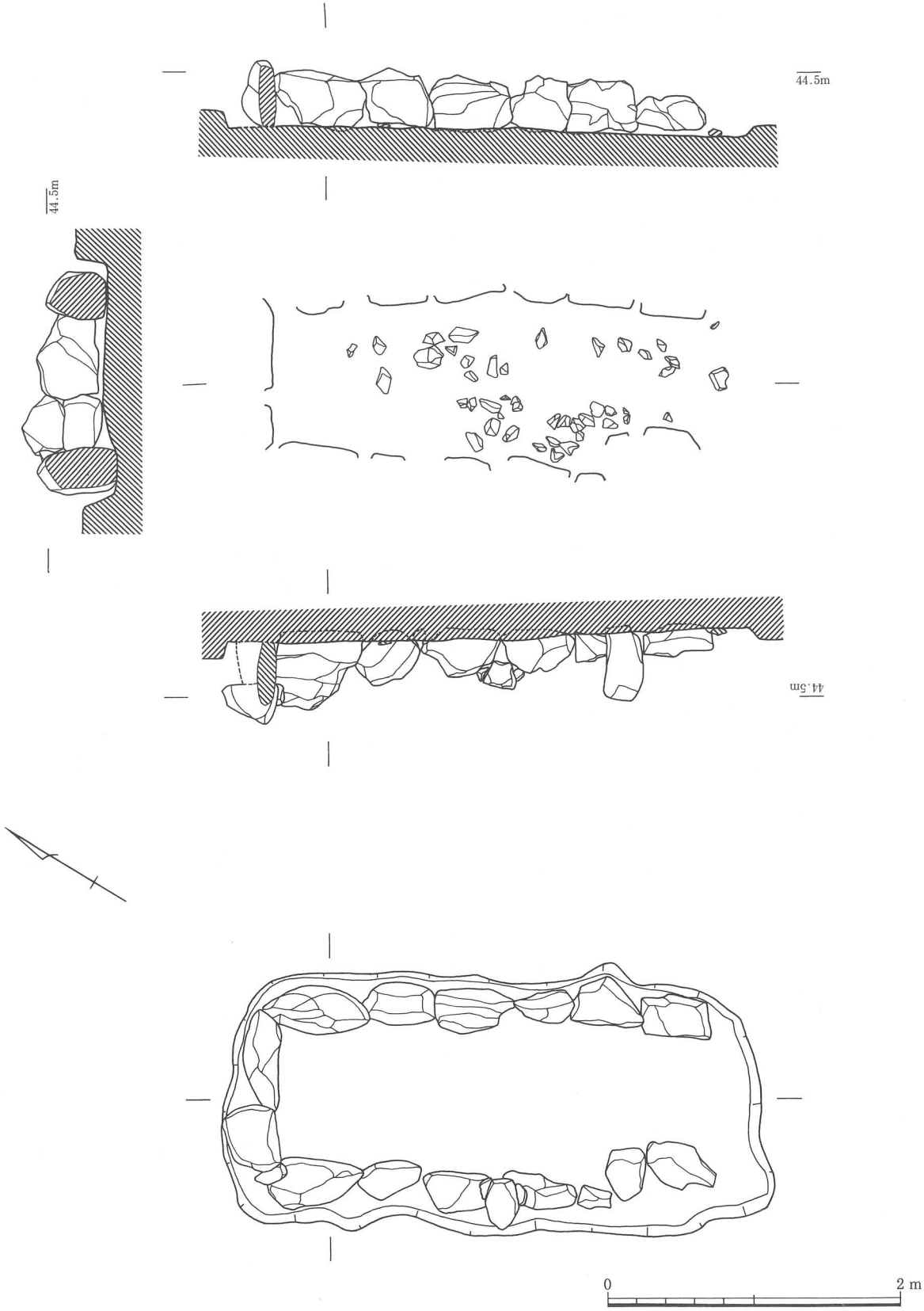


図７　Ａ－１号墳の石室

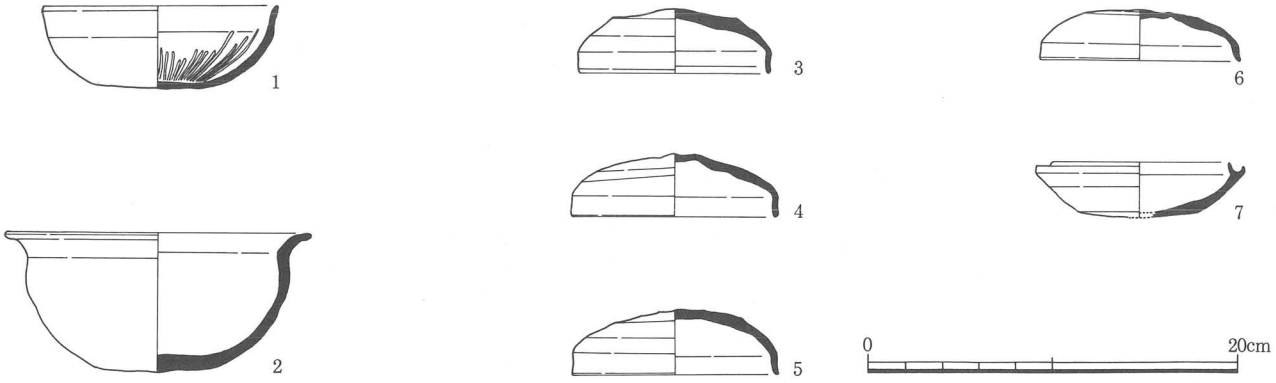


図８　Ａ－１号墳出土の土器

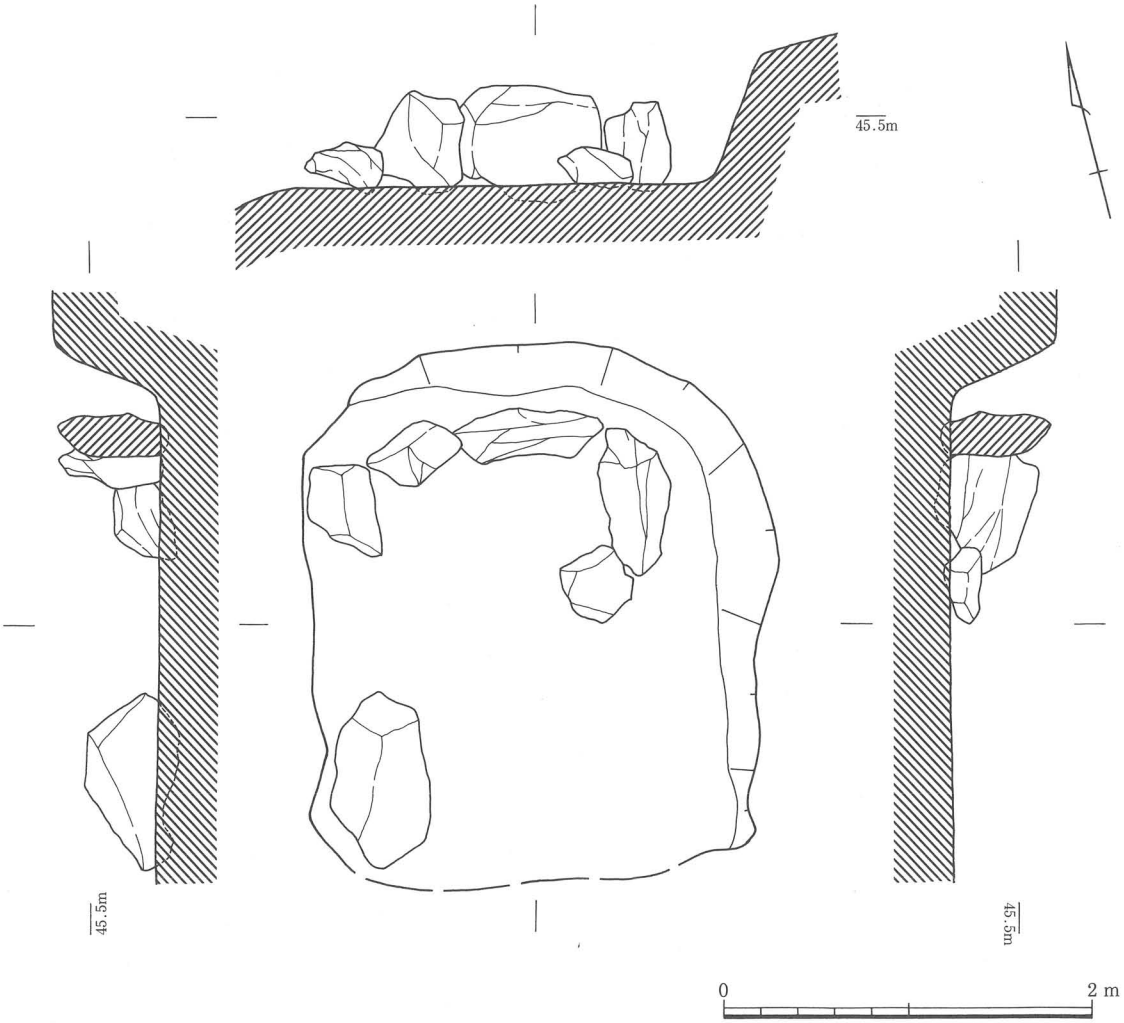


図９　Ａ－２号墳の石室

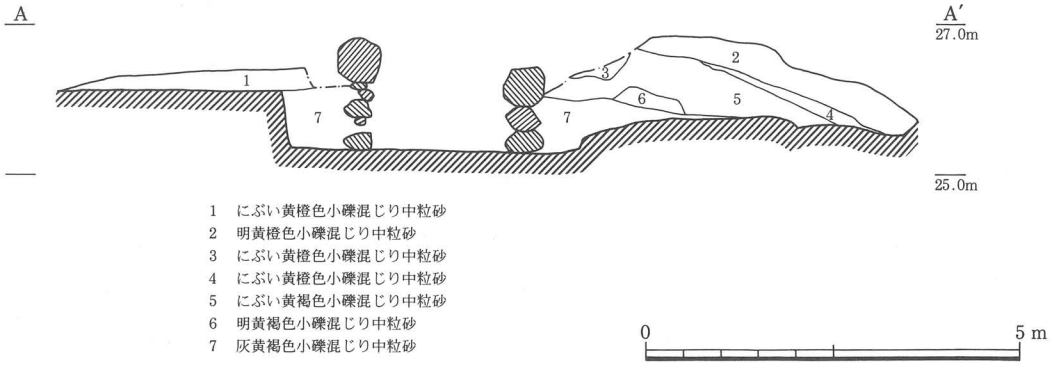


図10　B－1号墳の墳丘・石室断面

削り取られており、確定はできない。主体部の東側では、基底部は削平をうけているが、墳丘盛土の一部が遺存しており、残存する高さは約1mを測る。墳丘の北西部分に、残存する幅が約2m、残存する深さは約0.20mの周溝を検出している。

2．主体部（図13・14、図版13・14）

主体部は南東に開口する横穴式石室で、石室の長軸方向はN－14°－Wになる。

玄門部付近から開口部にかけて破壊を受け袖石が残存しておらず、構造に不明な点を残すが、右側壁の基底石の遺存状況から判断すれば、奥壁から羨道方向をみると、無袖もしくは左片袖式の横穴式石室となろう。

石室の掘方の平面形状は隅丸長方形で、残存長8m、残存最大幅4.30m、残存する深さは最深部で0.75mを測る。石室の現存する長さは6.30mを測る。石室幅は、奥壁で1.80m、奥壁から2m付近において最大幅2mを測る。

石室を構成する石材は花崗岩とみられる自然石を使用している。

奥壁は残存する高さが1.80mを測り、基底石は4石で構成されている。奥壁に向って右側の基底石は2段積みにして他の基底石と高さを揃えているが、それより上段は不揃いの石材で構成されている。左側壁側の石材は、ほぼ同じ大きさの石材が5段目まで遺存する。

両側壁の基底石も奥壁同様に、ほぼ高さを揃えるが、上段の石材は各々が不揃いとなり、石材の安定や高さ調整のために、各石材間には小礫の充塡が目立つ。

右側壁の基底石は奥壁と接する幅約1.60m、高さ約0.80mを最大とするやや大型の石材を横積みにして構成されている。左側壁の基底石は右側壁に比して小さく、高さも、約0.20m程度低くなる。

奥壁から羨道方向に向かって4.80m付近までの床面には、直径3～20cm程度の小礫が敷かれる。敷石の状況は奥壁から入口方向に向うほど礫の径が大きくなる傾向がみられる。

床面の調査では、敷石を除去して、精査を行なったが、排水溝は確認できなかった。

3．遺物の出土状況（図14、図版15）

この古墳に伴う遺物は全て石室内より出土している。奥壁から中央部付近にかけては遺物の遺存状態は良く、奥壁付近では須恵器が一括して出土している。金属製品の出土状況をみると、大刀だけがほぼ原位置を保つものと思われる。

4．遺物

土器（図15、図版47～50）

出土した土器は須恵器のみで、杯蓋が5点、杯身が4点、高杯が1点、台付長頸壺が2点、短頸壺の蓋が1点、短頸壺が1点、提瓶が1点出土している。8～12は杯蓋である。8～9は天井部と口縁部の境の稜は消滅し、なだらかである。10・11は天井部と口縁部の境に明瞭な凹線が巡り、口縁端部外面にはほぼ全周にわたって刻み目が見られる。11の天井部外面にヘラ記号「＝」を、12の天井部外面にヘラ記号「—」を記す。13～17は杯身である。たちあがりは内傾してのび、端部を丸くおさめている。16の底部外面にヘラ記号「--」を記す。18は短頸壺の蓋、19は短頸壺で、19に18がかぶさった状態で出土している。19の口径は4.7㎝と小型である。20・21は提瓶である。体部は円形の水筒様の形を呈し、肩部に鉤状の把手が付く。22は無蓋高杯である。平らな底部から口縁部が外反気味に立ち上がる杯部に細長い脚部がつくものである。杯底部に櫛描列点文を施し、脚部の凹線の上下に切り込みを入れたような3方向スカシを穿つ。23は台付長頸壺である。長い口頸部をもち、大きく肩の張る体部に2方向スカシを穿つ脚部が付く。10～12・16・17がⅠ期（ＴＫ10・ＭＴ85型式）、8・9・13～15・22がⅢ期（ＴＫ209型式）に該当する。

金属製品

金属製品は馬具・武器・装身具が出土している。馬具には轡が、武器には大刀・刀子・鉄鏃等が、装身具には金環がある。

馬具（図16、図版61）

1は鉄製素環鏡板付轡である。銜は両端に環がつく2本の鉄棒を連結した二連式となり各8.3㎝、9.2㎝を測る。短い方の鉄棒は2つの環が直角にねじられている。端環は鏡板にのみとりつき、引手には連結しない。鏡板は直径1.0㎝の鉄棒で作られた7.4㎝×9.0㎝を測る楕円形の環体に、長さ4.0㎝、幅1.9㎝の立聞がつく。立聞は中央に長さ2.4㎝、幅0.7㎝の方孔があく。引手は直径1.0㎝、残存する長さは14.0㎝を測り、引手壺は残存していない。

武器（図17・18、図版62）

2は大刀である。全長96㎝、刀身90㎝、茎長6.0㎝を測り、茎の中央やや身よりに目釘孔が1つ確認できる。3は三累環式柄頭である。幅5.2㎝、残存する長さは5.2㎝を測り、茎長は1.0㎝を測る。外環をもたず、偏円の「C」字環を3環、二等辺三角形状に繋ぎ、底辺部には

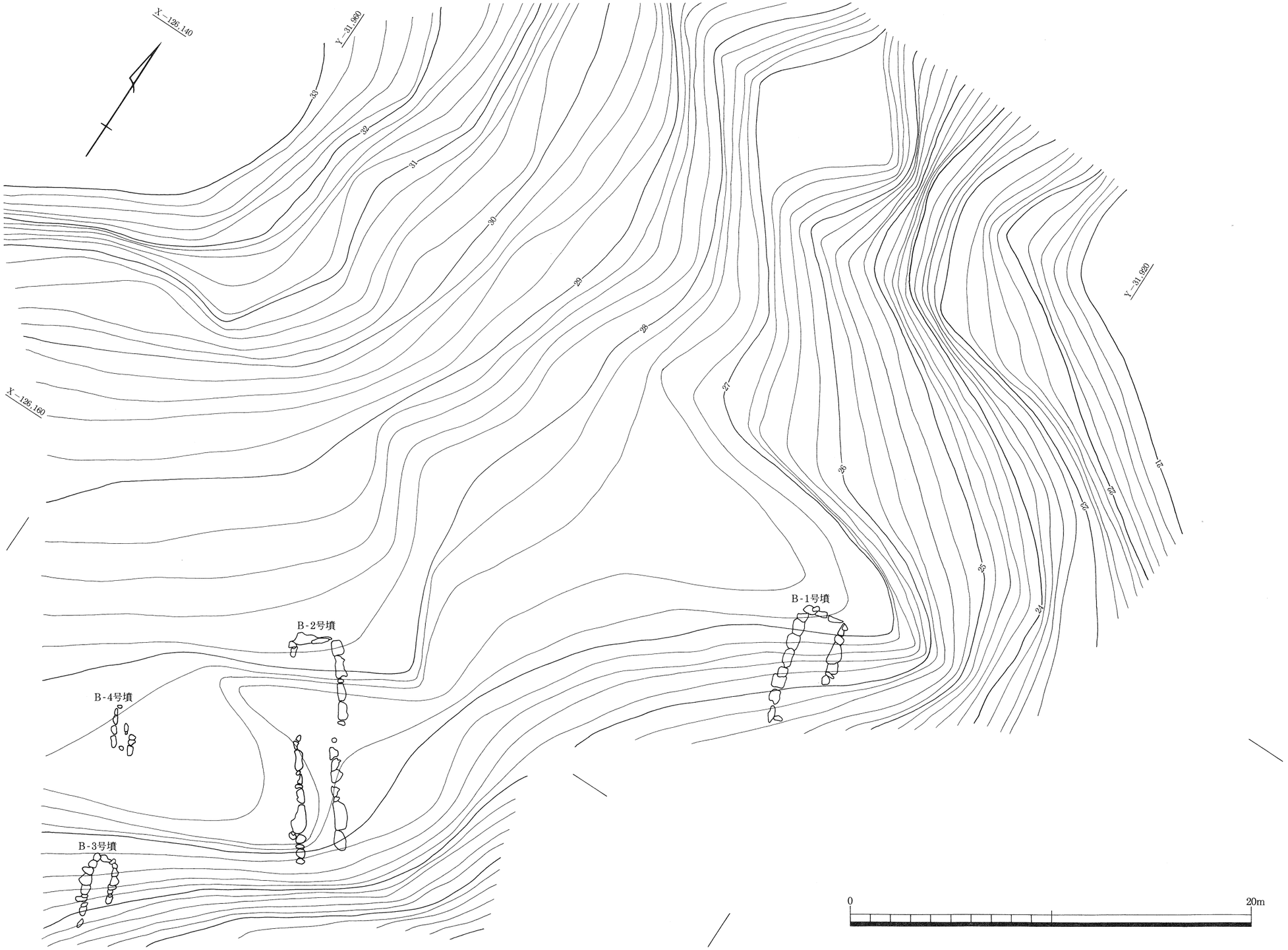


図11　Ｂ１調査地区の調査前の地形測量図

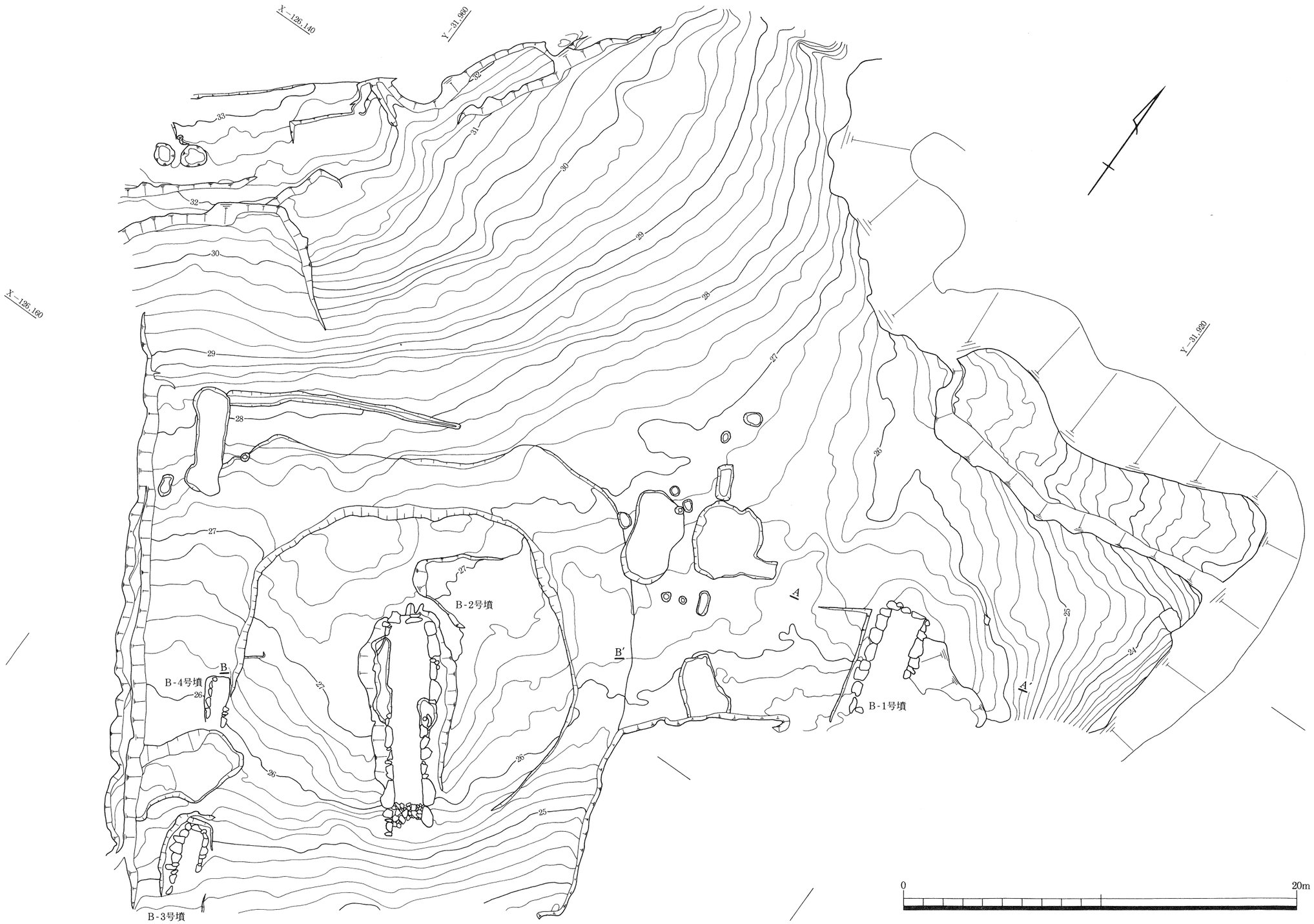


図12　Ｂ１調査地区の平面図

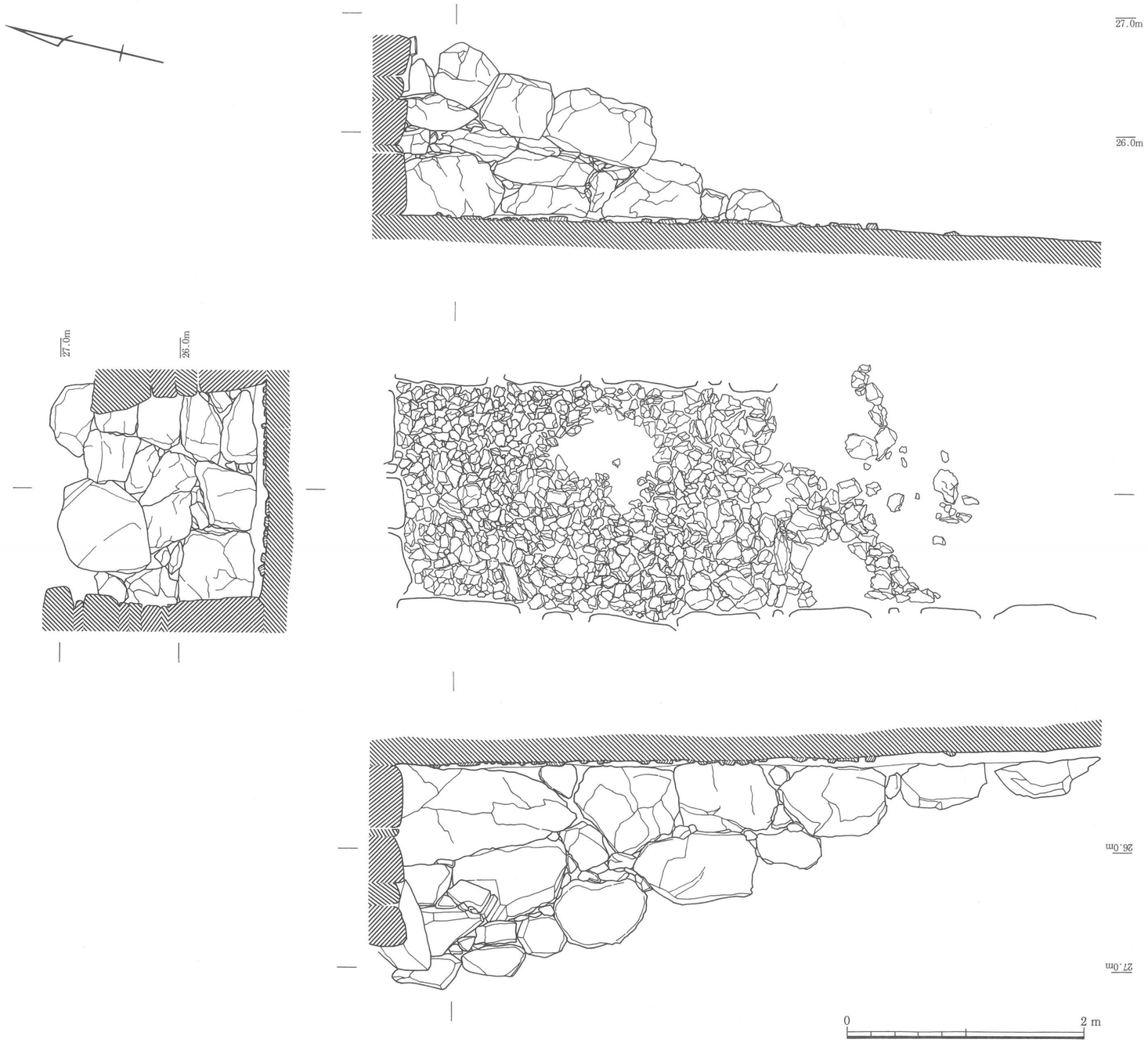


図13　B－1号墳の石室

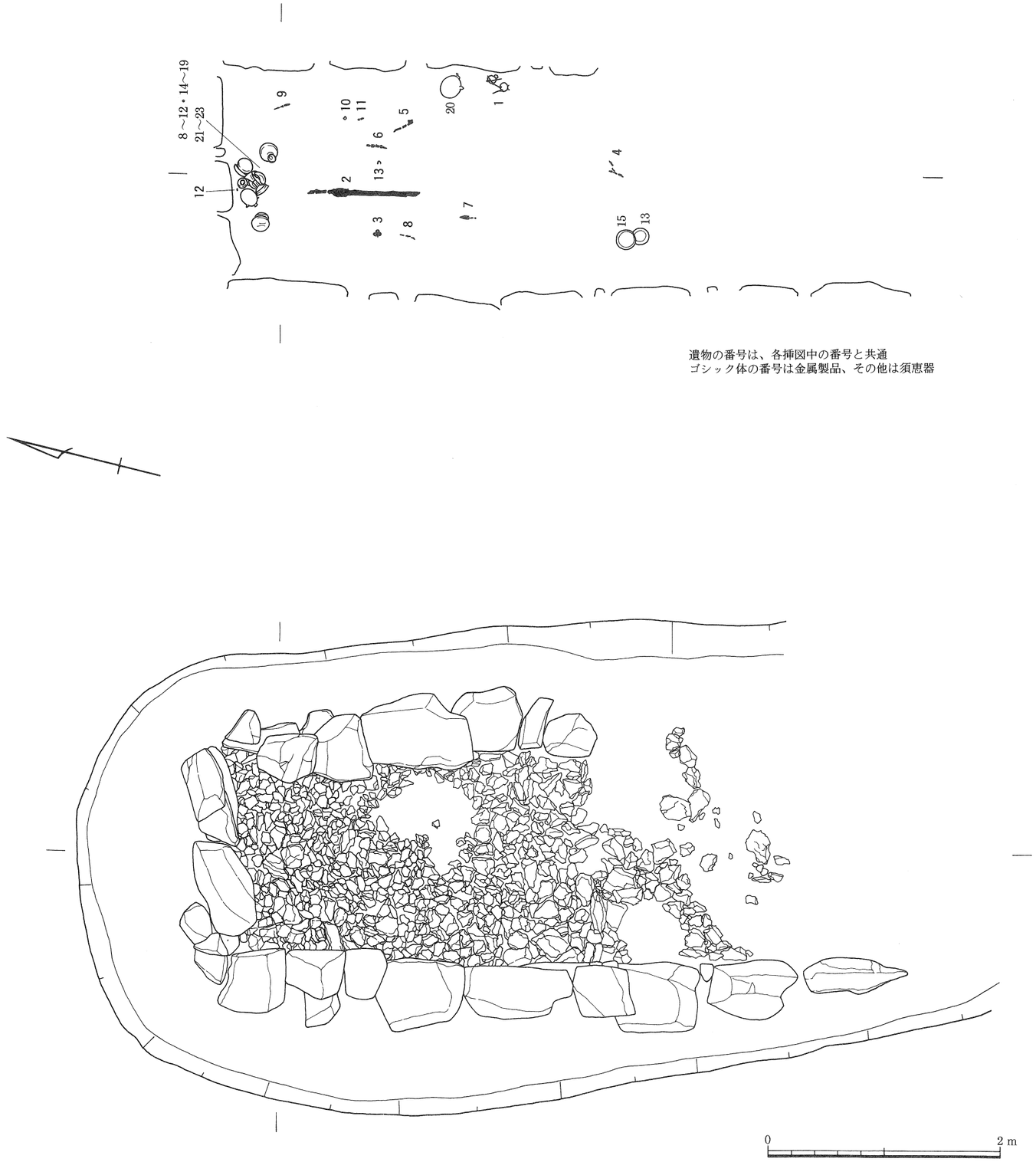


図14　B－1号墳の石室上面・遺物出土状況

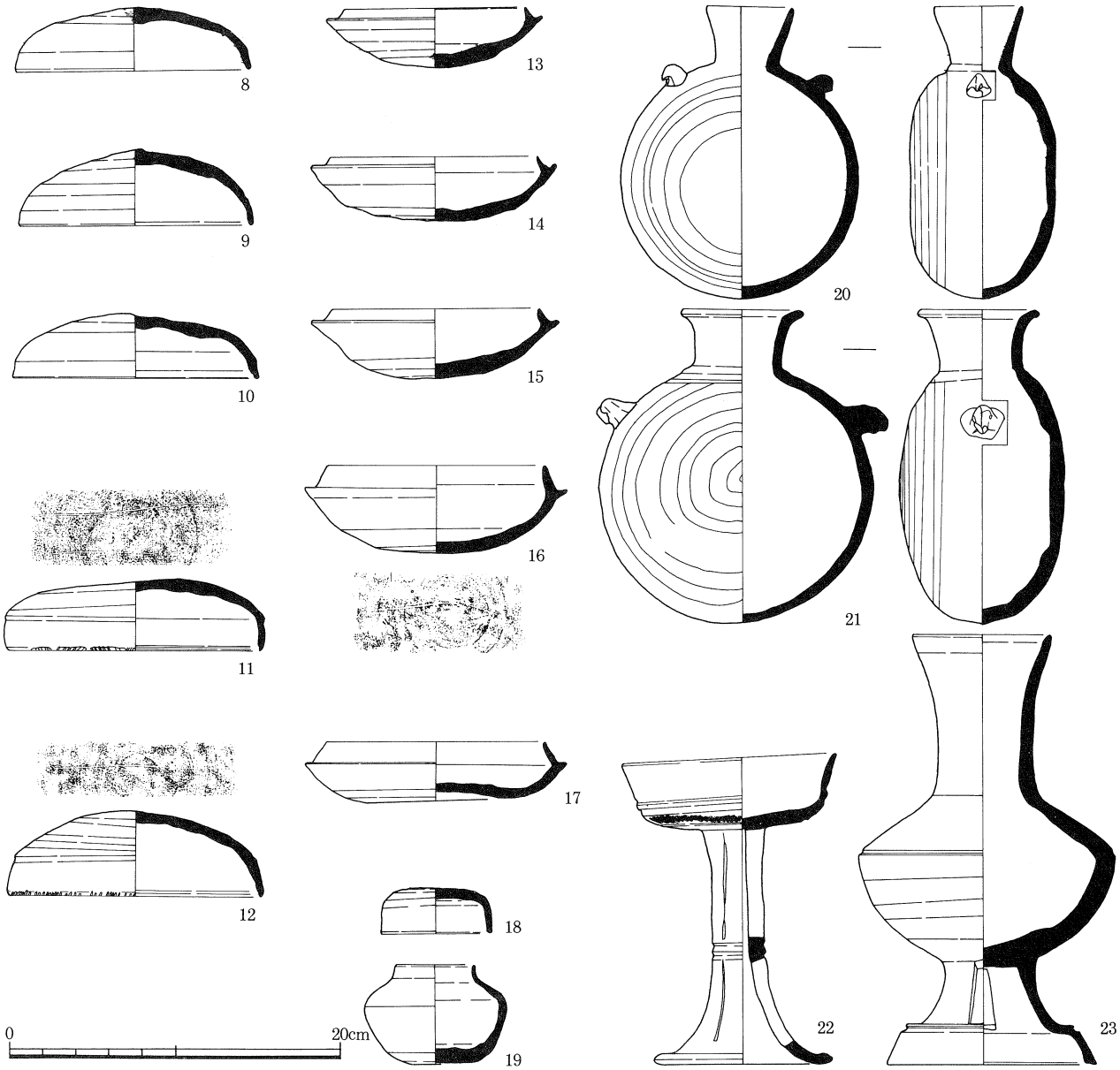


図15　B－1号墳出土の土器

台座をもち、中央部に茎がつく。

4～6は刀子である。いずれも刃部の断面が二等辺三角形を呈する。4の身と茎の境には刃と棟の両側に関をもつ。茎は断面が長方形を呈し、表面に木質が残る。全長14.3㎝、刀身9.1㎝、幅1.4㎝、茎長5.2㎝を測る。5は残存する長さが16.2㎝、幅は1.9㎝を測る。身の一部が欠損し、茎も残っていない。身の表面には木質が残り、刃先付近には鹿角も固着している。6は残存する長さが17.5㎝、幅1.8㎝、茎長3.0㎝を測る。関は明瞭ではないが、ゆるいくびれをもち茎が意識されている。茎の表面には木質が残る。7～9は鉄鏃である。7は腸抉をもつ有茎柳葉式鏃、8・9は片刃式の長頸鏃である。13・14は責金具であり、両方とも銅地に金を被せている。刀子の鞘の責金具であるとみられる。

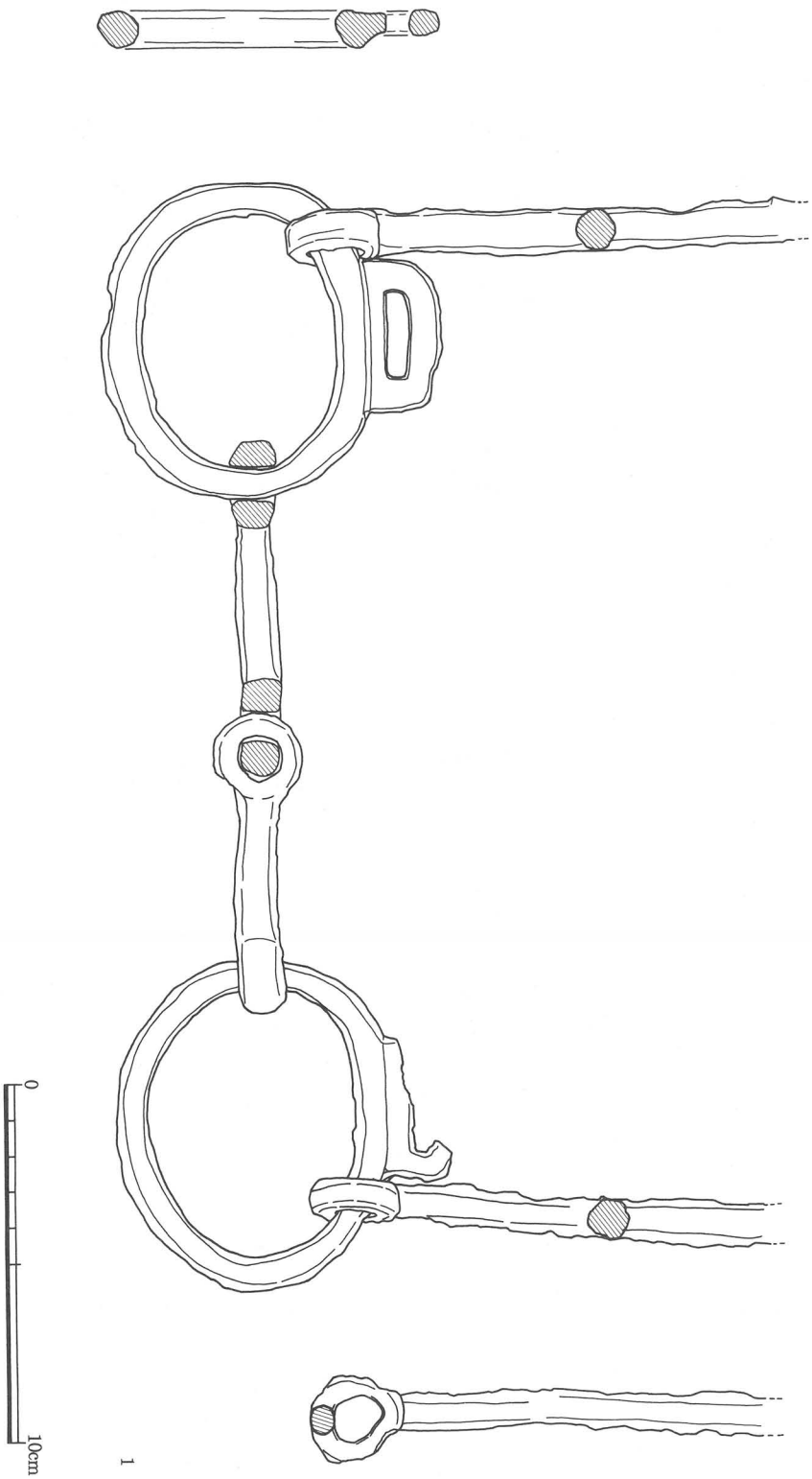


図16　B－1号墳出土の馬具

装身具（図18、図版62）

10・11は金環である。10は銅地に銀を被せた中実のものである。11は細身で銅芯のみ遺存し、表面の加工は不明である。

2）B－2号墳

この古墳はB－1号墳の南西25mに位置し、尾根のほぼ中軸線上に立地する。推定される石室床面の標高は25.5mを測る。

1．墳丘（図12・22、図版16・17）

墳形は直径約17.0mを測る円墳と推定される。墳丘の大半は盛土によって構築されており、残存する盛土の厚さは墳丘中央で約0.80mを測る。残存する頂部の標高は27mを測る。

墳丘の北西から北東にかけて、地山面を円形に整形した溝状の痕跡がみられる。溝の最小幅は3.80m、最大幅が5.50mを測る。

2．主体部（図19・20、図版16・17）

主体部は南東に開口する横穴式石室で、石室の長軸方向はN－37°－Wになる。

玄室の右側壁と袖石は完全に抜き取られているが、石材設置のための掘方の状況から、奥壁から羨道方向をみて、左片袖の横穴式石室であると推定できる。玄室及び羨道部の床面も完全に撹乱を受け、床面に石敷が施されていたかは不明である。

石室の掘方の平面形は隅丸長方形を呈し、羨道部まで及ぶ。残存する長さは約11.8m、幅は玄室側で約4.90m、羨道部側で約4.60mを測る。深さは最深部で1.40mを測る。

石室の規模は内法で、現存する長さが約10.8mを測る。玄室の長さは約3.80m、幅は奥壁で1.80mを測り、羨道部の長さは約7m、最大幅は1.60mを測る。

石室の石材は花崗岩とみられる自然石を使用している。奥壁は2段目まで遺存し、残存する高さは1.90mを測る。基底石は大型石材の2石で構成されている。左側の基底石は高さ1.10m、幅0.84mを測る。右側の基底石は高さ1.10m、幅0.96mを測り、高さを揃えている。基底石の上段には高さ1.36m、幅0.98mの

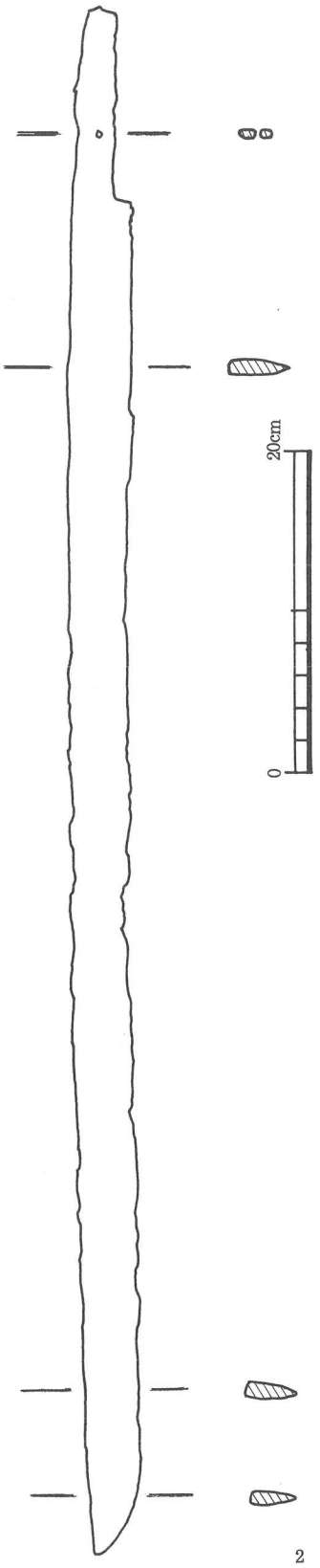


図17　B－1号墳出土の大刀

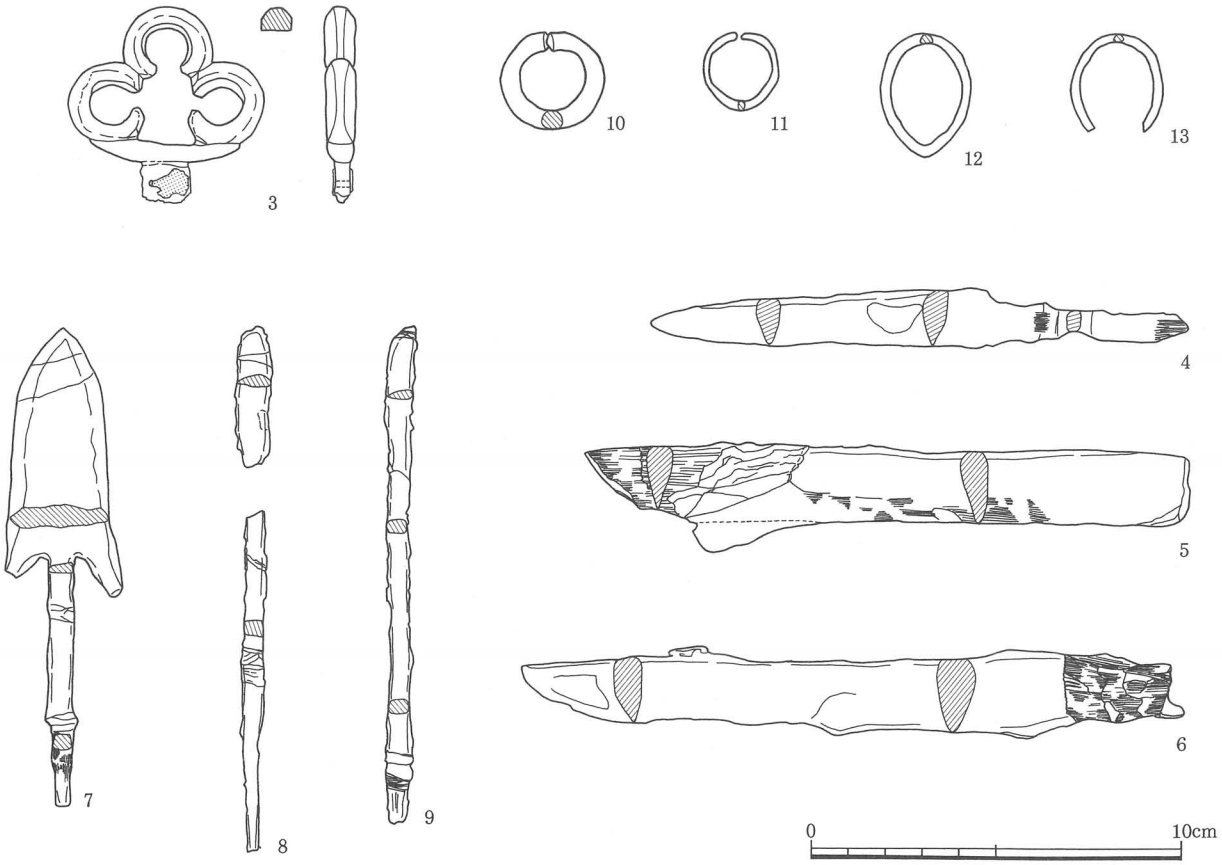


図18　B－1号墳出土の金属製品

大型石材を縦積みにし、横には高さ0.56m、幅0.48mの石材を配置している。玄室の右側壁は遺存していないが、左側壁の基底石は大小の石材を交互に配置させた4石が遺存し、奥壁側の2石では2段目まで遺存している。大型の石材は奥壁の基底石の石材とほぼ同規模である。

羨道部の遺存状態は玄室のそれに比して良好で、入口付近では閉塞石が検出され、石材は直径0.15～0.50mの自然石が使用されている。両側壁とも基底石は4石で構成され、左側壁の基底石は、高さ1.12m、幅1.34mを最大とする大型の石材3石をふくむ。右側壁では高さ1.20m、幅1.46mを測る最も大きい石材の下に、高さ0.14～0.16m、幅0.16～0.30mの礫を2個、根石として使用している。

4．遺物の出土状況

B－2号墳に伴う遺物は石室内より出土した。

石室内に厚く堆積する埋土中より全ての遺物が出土している。

5．遺物

土器（図21、図版50・51）

須恵器は杯蓋が3点、高杯蓋が1点、高杯が3点、長頸壺蓋が2点、土師器は長頸壺が1点出土している。24は土師器の長頸壺である。外反気味にのびる口頸部をもつ。25～27は杯蓋、

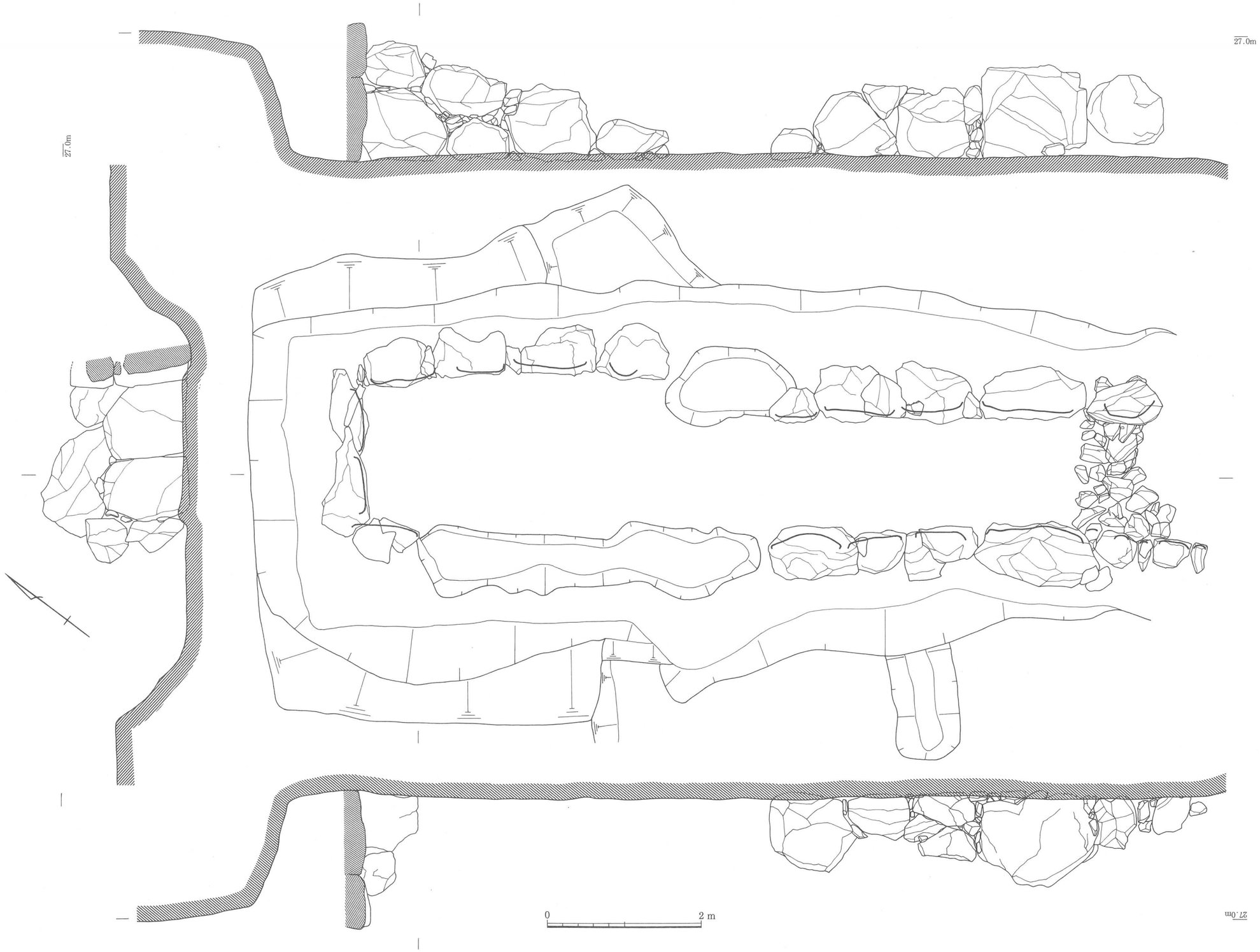


図19　B－2号墳の石室

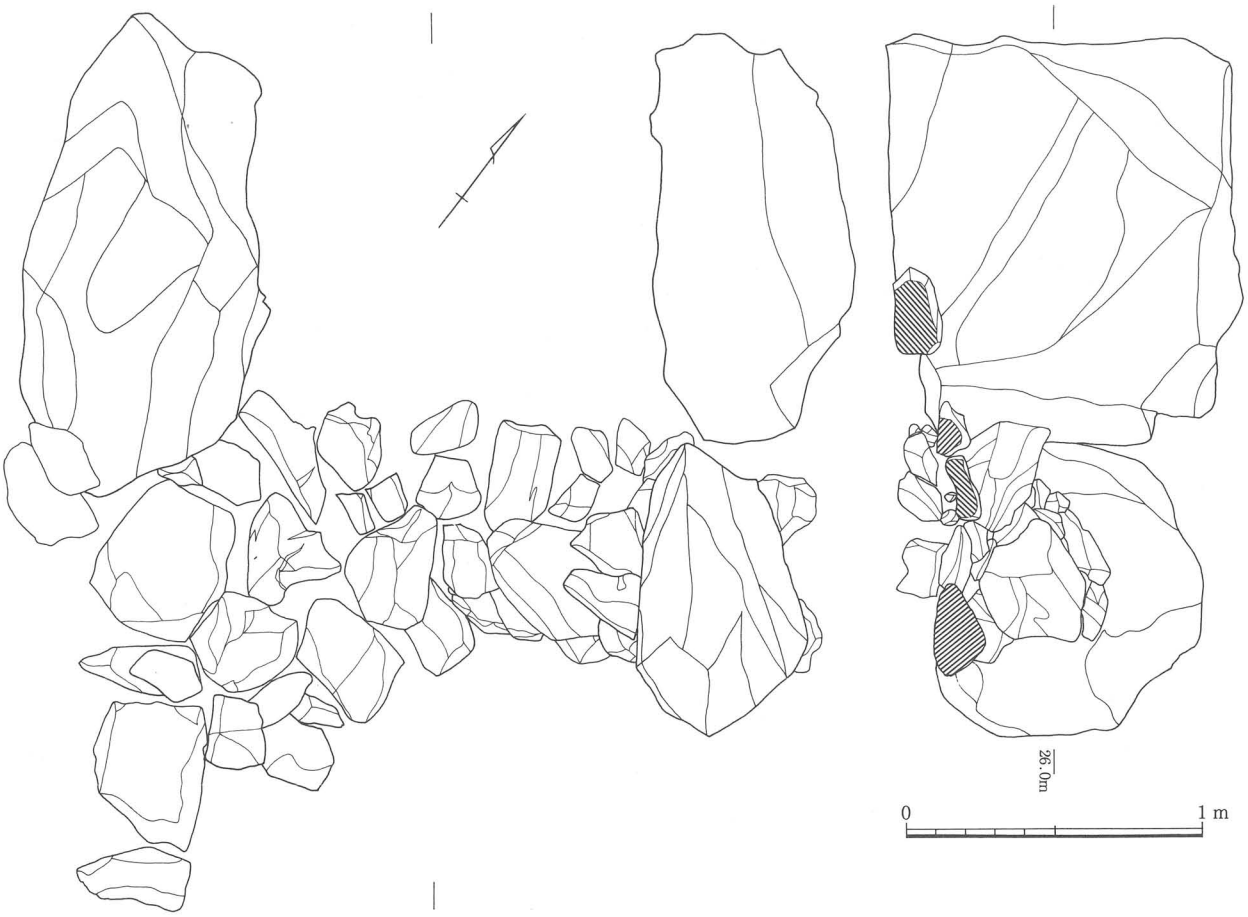


図20　B－2号墳の閉塞石

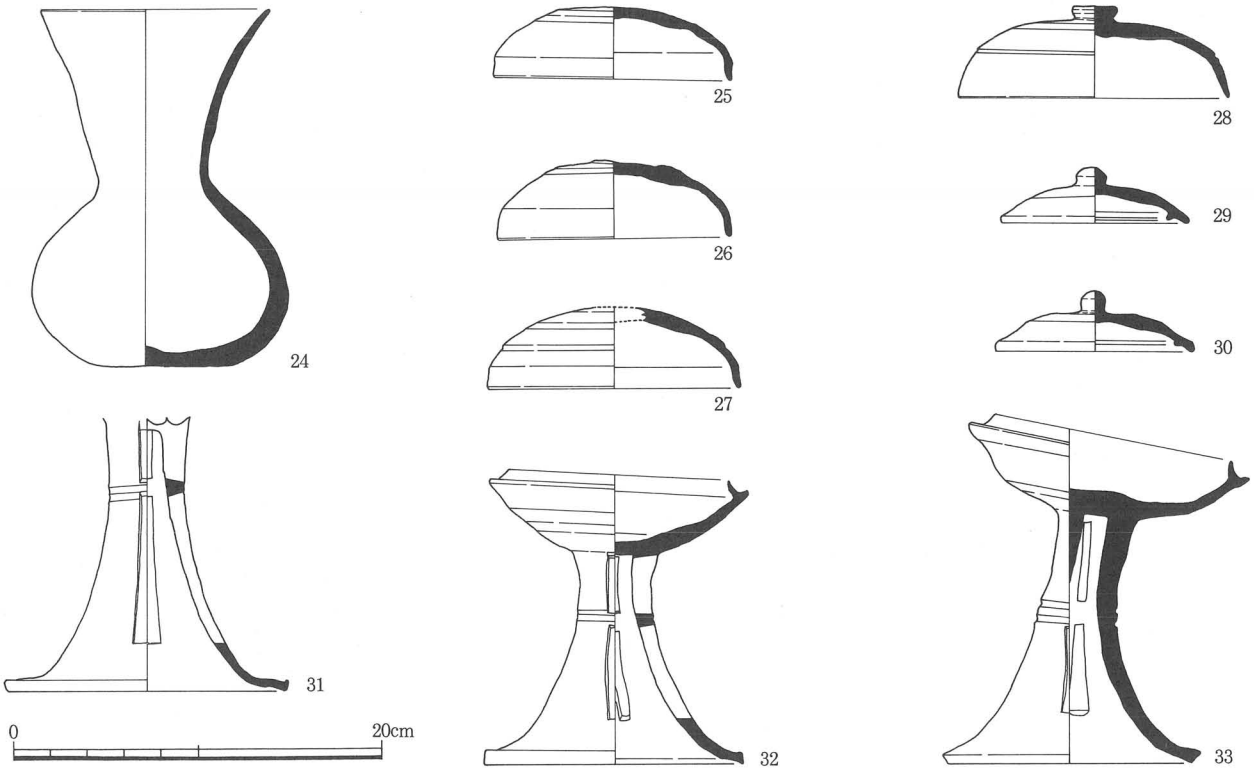


図21　B－2号墳出土の土器

28は有蓋高杯の蓋である。25・26は天井部と口縁部の境の稜が消滅し、なだらかである。27・28は天井部と口縁部の境に凹線が巡り、28の天井部中央にわずかに中くぼみのつまみが付く。壺蓋の29・30は内面に短いかえりが付き、天井部の中央から少しずれた位置に宝珠様のつまみが付く。

31～33は長脚二段スカシの高杯である。31は杯部が欠損し、基部が細い。32・33はたちあがりが内傾する杯部をもち、脚部はやや低い。27がⅠ期（ＴＫ10・ＭＴ85型式）、30がⅡ期（ＴＫ43型式）、25・26・32・33がⅢ期（ＴＫ209型式）、28・29がⅣ期（ＴＫ217型式）にそれぞれ該当する。

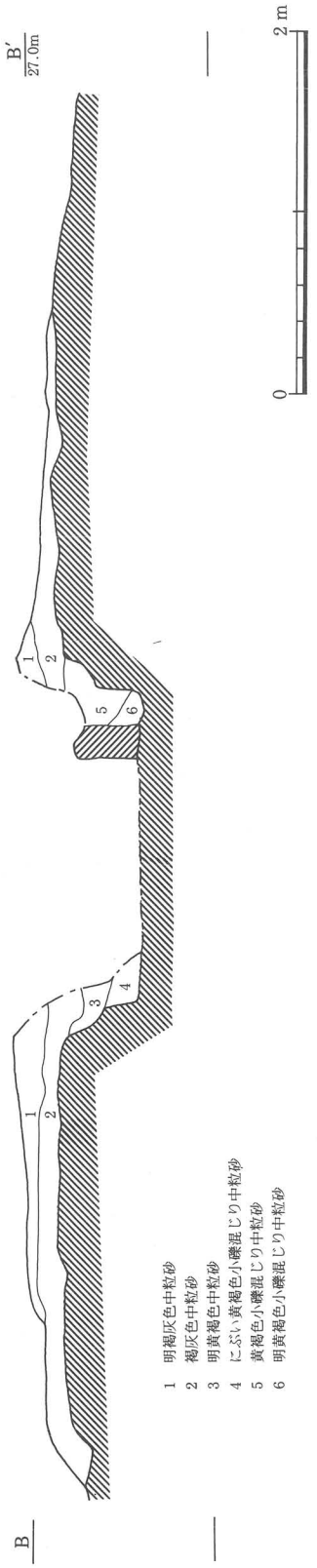


図22　Ｂ－２号墳の墳丘・石室断面

３）Ｂ－３号墳

この古墳はＢ－２号墳の主体部より南方約14mに位置しており、石室床面の標高は24.8mを測る。

１．墳丘

後世の削平のために、墳丘は完全に削平を受けており、墳形や規模は不明である。

２．主体部（図23、図版18）

主体部は南東に開口する横穴式石室である。石室の長軸方向はＮ－17°－Ｗになる。羨門部付近の石材が失われており、構造に不明な点を残すが、玄室右側壁の奥から５石目に高さ0.50m、幅0.24mの縦に置いた石材を10㎝程度内側に置いていることから、奥壁から羨道方向をみて、右片袖の石室と考えることができる。

石室の掘方は右側壁付近で削平を受けており、判然としないが、その平面形状は隅丸長方形であると考えられる。規模は残存する長さが4.16m、最大幅2.40m、深さは最深部で0.48mを測る。

石室の規模は内法で、現存する長さが2.80mを測り、玄室の幅は、奥壁で0.86m、最大幅１mを測る。羨道は残存する長さが0.68m、幅は0.80mである。

石材は花崗岩とみられる自然石を使用している。奥壁は２

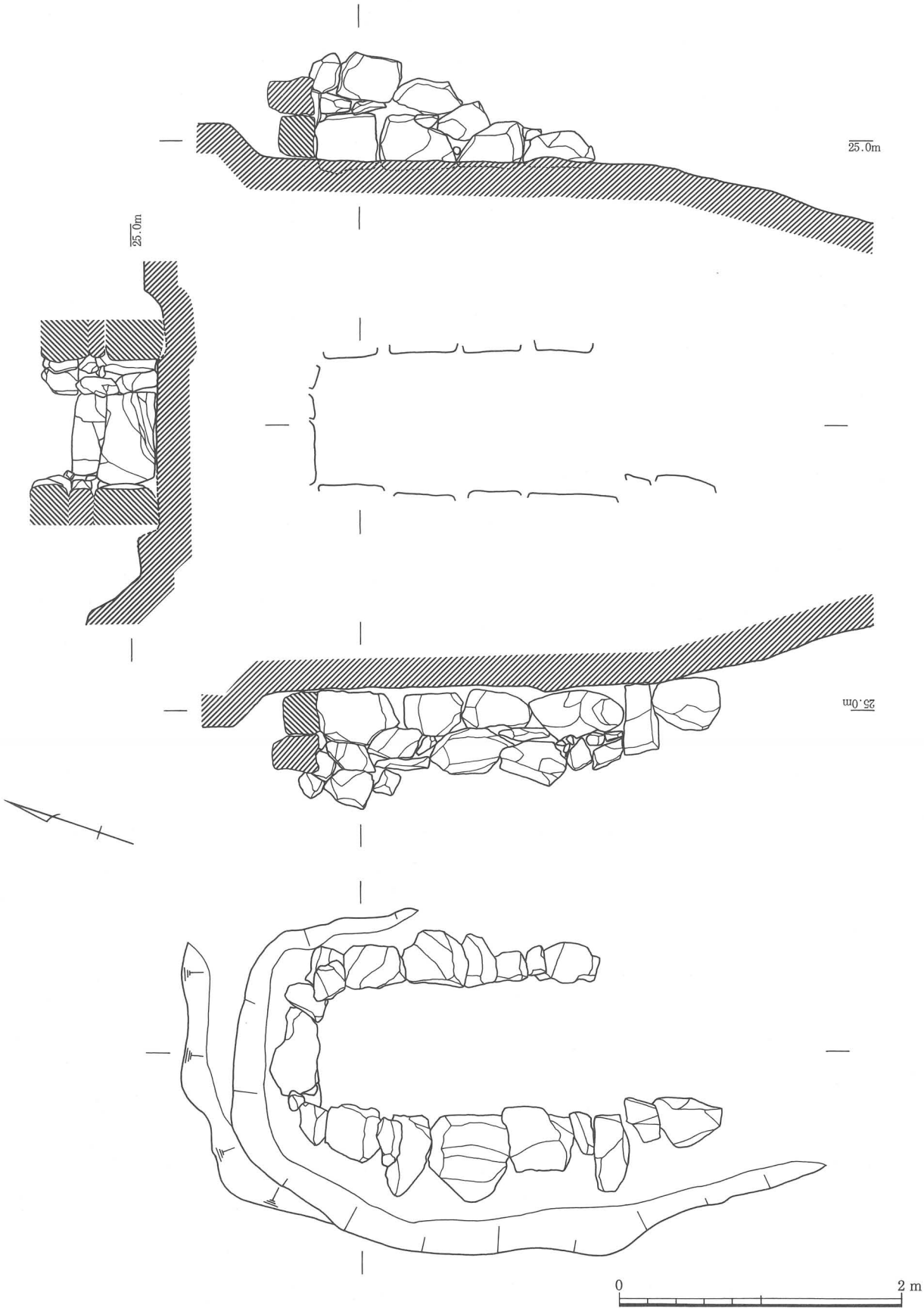


図23　B－3号墳の石室

段目まで遺存し、残存する高さは0.60mを測る。基底石には高さ0.40m、幅0.64m、奥行0.24mの直方体に近い石材を1石使用しており、2段目にも高さ0.20m、幅0.60m、奥行0.30mの直方体に近い石材を横積みにしている。

玄室の右側壁の基底石は、高さ0.36m、幅0.66mの石材を最大とするほぼ同じ大きさの石材4石で構成され、奥壁から1石目の上部は3段目まで、その他は2段目まで遺存している。

右側壁も基底石は、高さ0.32m、幅0.52mの石材を最大とするほぼ同じ大きさの石材4石で構成されており、側壁の奥側の2石は2段目まで遺存している。

3．遺物の出土状況

B－3号墳に伴う遺物は、石室内に堆積した土中より出土している。

4．遺物

土器（図25、図版51）

須恵器は杯蓋が1点、長頸壺の蓋が1点、杯身が2点、高杯が1点出土している。

34は長頸壺の蓋であり、天井部は、中央のつまみが欠損している。35は杯蓋で、天井部と口縁部の境の稜は消滅し、なだらかにおちる。36・37は杯身である。たちあがりは短く内傾し、底体部は深く底部は平らである。38は有蓋高杯である。たちあがりが内傾する杯部をもち、脚部はやや低く、凹線の上下に切り込みを入れたような2方向スカシを穿ち、外端面は内傾する平面をなす。須恵器のすべてが、Ⅳ期（ＴＫ217型式）に該当する。

4）B－4号墳

この古墳はB－2号墳の墳丘裾に接しており、推定される石室床面の標高は26mを測る。

1．墳丘

墳丘は完全に削平を受けており、墳形や規模は不明である。

2．主体部（図24、図版19）

主体部は南東に開口する横穴式石室であり、石室の長軸方向はN－28°－Wになる。

石室の奥壁と奥壁から羨道方向をみて、左側壁の大半が後世の削平により失われており、構造に不明な点を残すが、石室の規模や、入口付近で残存する石材の配置から無袖の横穴式石室であったと考えられる。

石室の掘方は右側壁付近では削平を受けており不明瞭ではあるが、その平面形状は隅丸長方形であったと考えられる。規模は残存する長さが2.70m、最大幅1.30m、深さは最深部で0.10mを測る。石室の規模は、現存する長さが2.34m、幅は両側壁の残存部で0.62mを測る。

石室を構成する石材は花崗岩とみられる自然石を使用している。

奥壁は向って左側の基底石しか遺存しておらず、残存する高さは0.34mを測る。

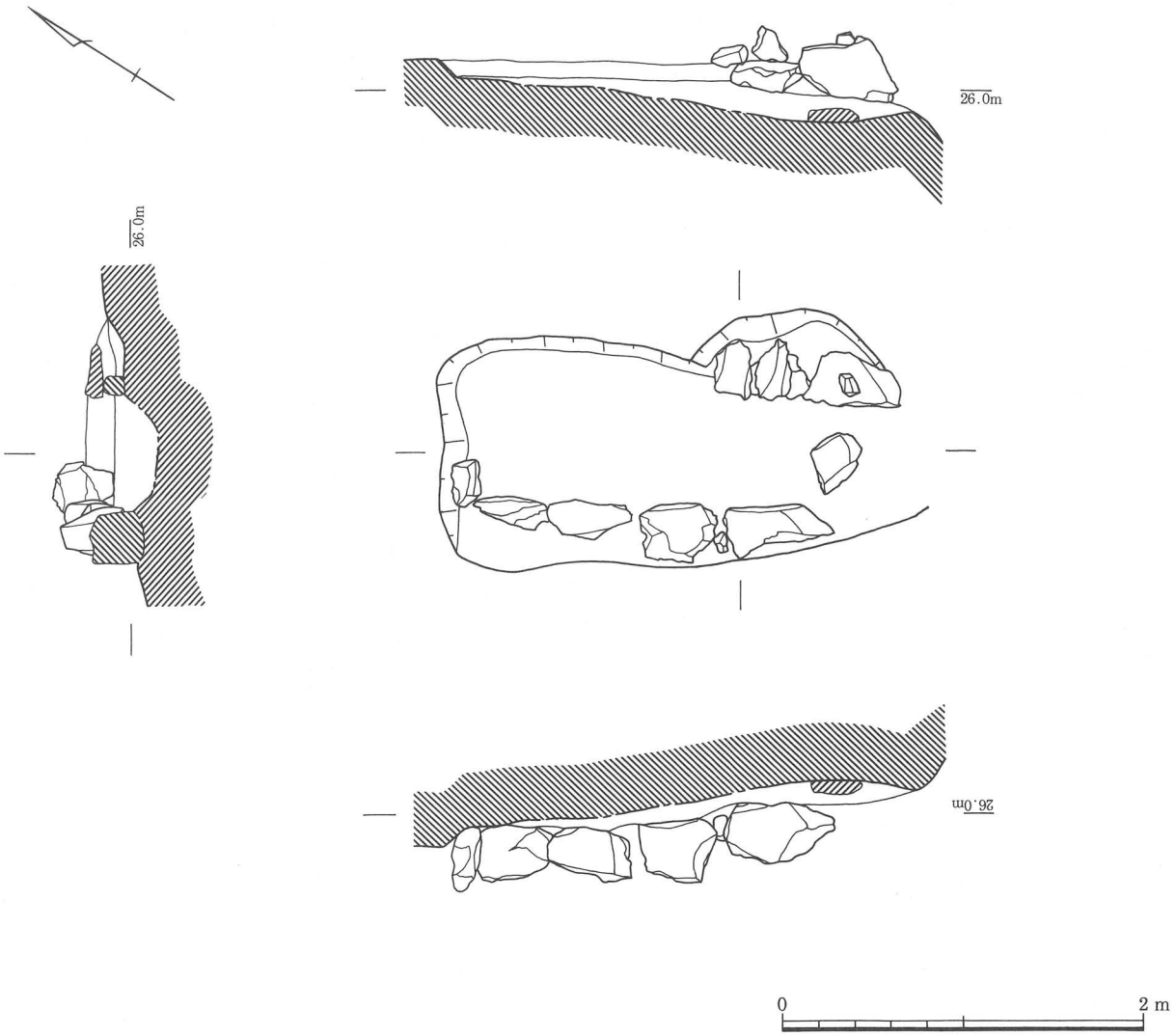


図24　B－4号墳の石室

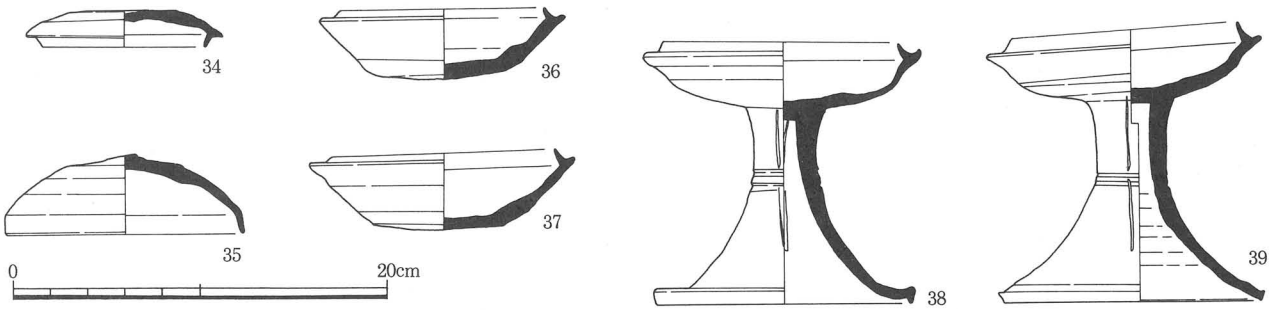


図25　B－3・－4号墳出土の土器

右側壁は基底石が４石のみ遺存し、高さ0.32m、幅0.60mの石材を最大とするほぼ同じ大きさの石材で構成されており、横積みを基本としている。

左側壁では基底石が入口付近で２石のみ遺存し、そのうち１石は右側壁の石材とほぼ同じ大きさの石材を使用している。

３．遺物の出土状況

この古墳に伴う遺物は石室内より出土した。

石室内には土が厚く堆積し、その土中より遺物が出土している。

４．遺物

土器（図25、図版51）

有蓋高杯が１点出土し、付属する蓋は出土していない。

39はたちあがりが内傾する杯部をもち、脚部はやや低く、凹線の上下に切り込みを入れたような２方向スカシを穿ち、外端面は内傾する平面をなす。

この高杯はＢ－３号墳出土の38とほぼ同型であり、Ⅳ期（ＴＫ217型式）に該当する。

５）Ｂ－５号墳

この古墳は、Ｂ－１～Ｂ－４号墳が位置する尾根の端部域（Ｂ１調査地区）から、名神高速道路を挟んで、北西約110mを測る尾根のやや奥まったところ（Ｂ２調査地区）に位置し、推定される石室床面の標高は39.8mである。

１．墳丘（図27、図版12）

墳丘は完全に削平を受けており、墳形や規模は不明である。

主体部を取り囲む浅い溝状の落ち込みを検出しているが、これは地山の整形作業時に何らかの要因で残された痕跡であると考えられ、周溝であるとは考えにくい。

２．主体部（図28、図版12）

主体部はその大半が失われているが、南東に開口する横穴式石室と推定される。

奥壁と奥壁に向って右側壁の一部とみられる石列のみ検出している。

石室の掘方もその大半が削平され、形状や規模は不明であるが、残存部では幅2.40m、深さ0.50mを測る。残存する掘方の長軸方向はＮ－18°－Ｗになる。

石室の石材は花崗岩の自然石を使用し、奥壁では高さ0.48m、幅0.74m、奥行0.42mの横長の石材と、高さ0.50m、幅0.58m、奥行0.50mの石材を使用した基底石が２石遺存しており、残存する高さは0.56mを測る。

奥壁に向って右側壁に遺存している基底石は高さ0.48m、幅0.64m、奥行0.44mを測り、奥壁の基底石とほぼ同じ大きさである。奥壁の幅は約1.50mであったと推定される。

図26　B 2 調査地区の調査前の地形測量図

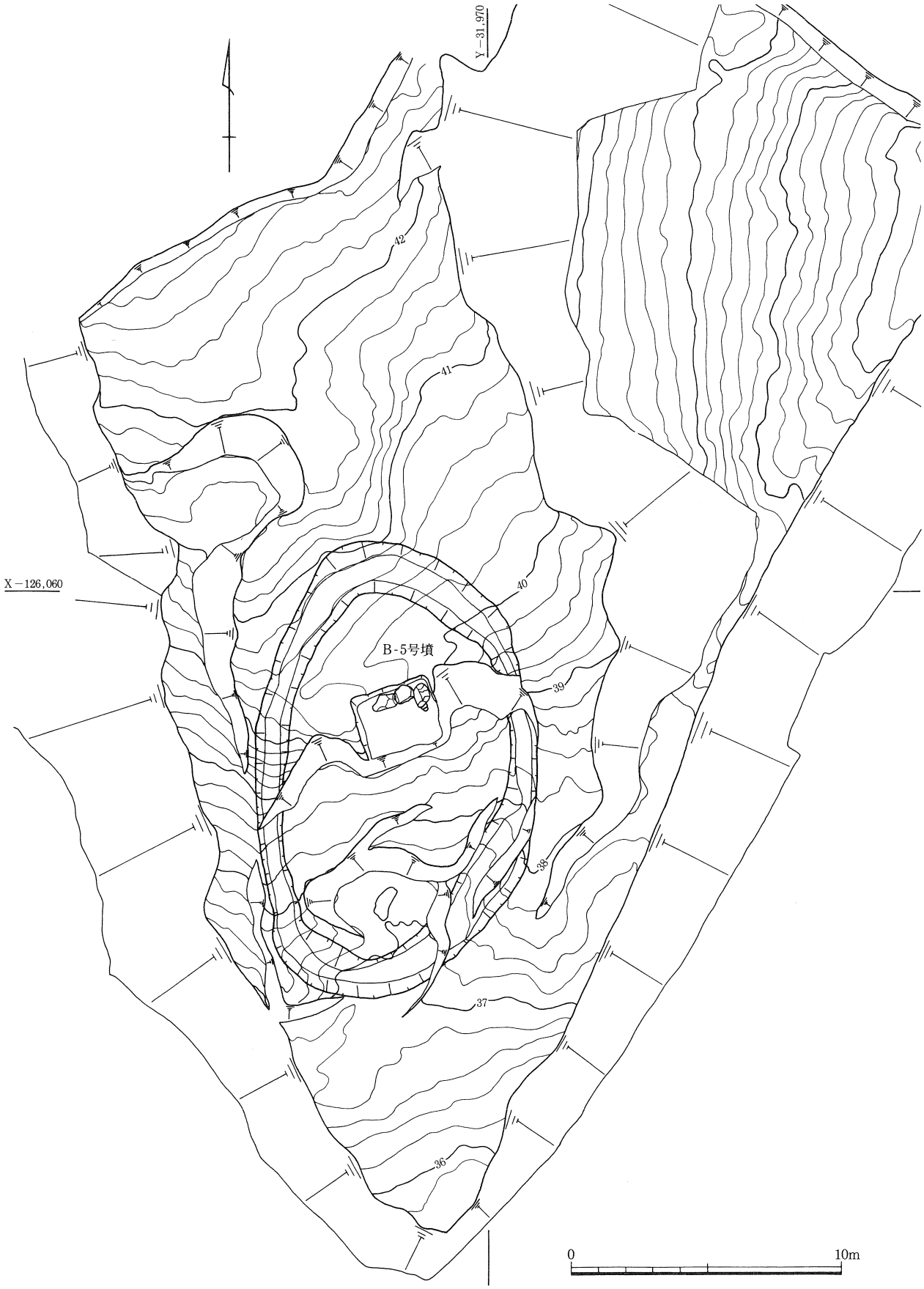


図27　B 2 調査地区の平面図

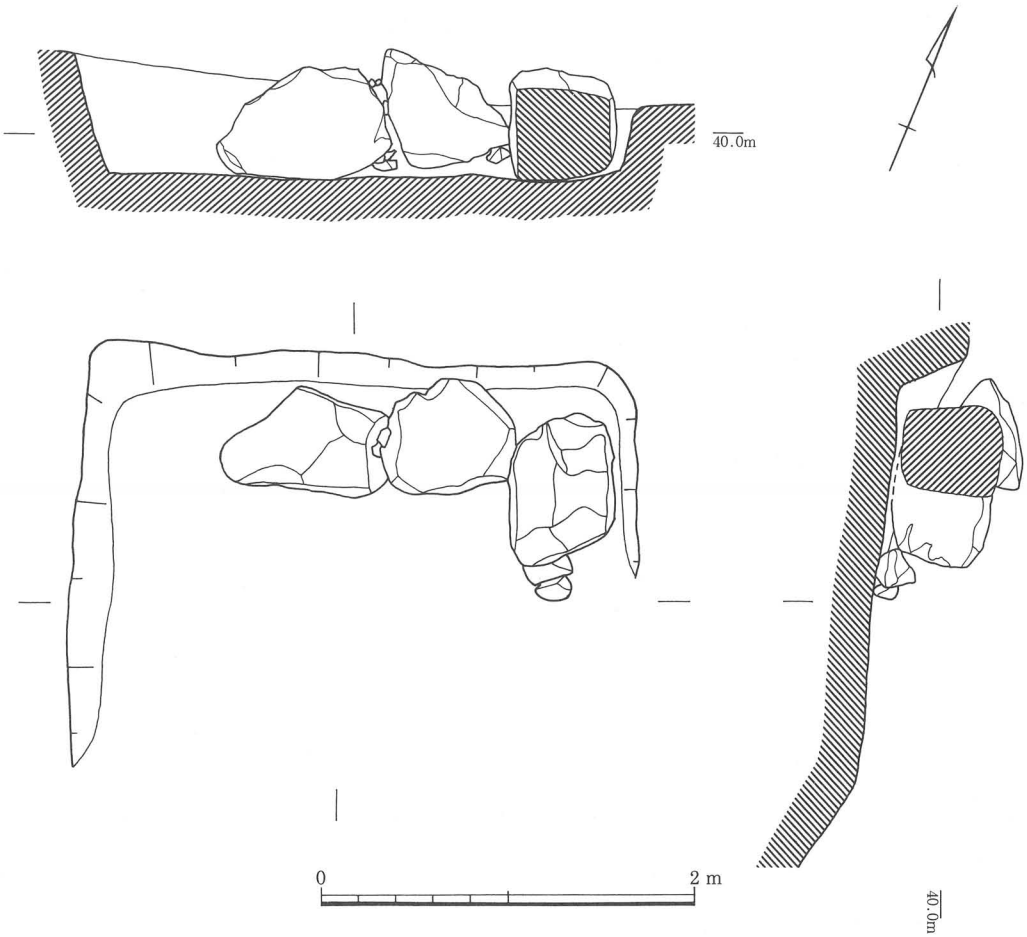


図28　B－5号墳の石室

第3節　C尾根の調査（C調査地区）

C尾根では、5基の古墳（図4・30、図版4）と竪穴住居4基、掘立柱建物5棟、土器棺墓1基、火葬墓1基を検出した。古墳以外の遺構については第7節（P94～108）で記述する。

1）C－1号墳

この古墳は南東に延びる尾根の先端域に立地する。当墳の南東部の大半が昭和38年の名神高速道路建設の際に完全に破壊されており、周溝の一部しか残っていなかった。周溝の検出面の標高は39mである。主体部の構造は不明で、墳形についても定かではないが、直径約12m程度の円墳になるものと推定される。

1．周溝（図31、図版22）

周溝の残存する最大幅は7m、最小幅は3mで、深さは約0.60mを測る。

周溝内の北東域に集石がみられ、長さ2.60m、幅1mの範囲を測る。

集石は直径10～40㎝の礫で構成されており、周溝の底面に張りつくように置かれていた。石材は周辺の石室同様、花崗岩とみられる自然石が使用されている。集石がおこなわれたのは、その状況からみて周溝掘削と同時、もしくは直後と推定される。

2．遺物の出土状況

出土した遺物のすべてが周溝内より出土している。集石を中心に周溝の東半域から集中して出土している。

3．遺物

土器（図32、図版52・53）

須恵器は杯蓋が7点、杯身が5点、短頸壺蓋が1点、高杯が1点、提瓶が1点、平瓶が2点、長頸壺が1点出土している。土師器は杯が1点出土している。40は須恵器の短頸壺の蓋である。口縁端部は内傾する平面をなす。天井部は平らである。41～46は須恵器の杯蓋である。41～44は天井部と口縁部の境の稜はなくなだらかにおちるもので、口径は9～11㎝と小型である。45・46は口縁部よりもわずかに高いだけの低いかえりを有するもので、46は天井部の中央につまみの痕跡がみられる。47は土師器の杯である。底体部内面に放射状の暗文を施す。48～51は須恵器の杯身であり、受部よりわずかに高いたちあがりが内傾する。52は提瓶である。口頸部に2条の凹線、口縁部に1条の明瞭な稜を施す。肩部には環状の把手が付き、体部は丸味のある水筒様形を呈する。53は短脚高杯である。体部・口縁部は上外方にのび、端部は丸くおさめる。脚部は基部がやや細く、裾部で水平にひらき、端部は丸くおさめる。54は長頸壺である。口頸部は外反気味にのび、肩部に1条の凹線が巡る。55・56は平瓶である。55は小型で、口縁部は筒型に近い漏斗状をなす。体部上面および底部は平らで、器形は扁平である。体部上面にボタン状の粘土粒を二つ張り付ける。56は口頸部を欠き、体部上面は丸味をもつが、底部は平らである。須恵器の52はII期（ＴＫ43型式）、その他はすべてⅣ期（ＴＫ217型式）に該当する。

2）Ｃ－2号墳（図33、図版23）

この古墳はＣ－1号墳の北東方約38.0mに位置しており、Ｃ－1号墳同様に、大半が昭和38年の名神高速道路建設の際に完全に破壊され、周溝の一部しか遺存していない。周溝の規模から推定すれば、一辺約10.5mの方墳である。周溝の検出面の標高は39mを測る。

周溝の残存する最大幅は2.55m、最小幅は0.60m、深さは0.35mを測る。

遺物は周溝より土師器の細片がわずかに出土しただけである。

3）Ｃ－3号墳（図34、図版24）

この古墳はＣ－2号墳の北西方約24mに位置し、検出面の標高は46mを測る。主体部は完全に削平を受けており、周溝の一部しか遺存していない。周溝の規模から推定すれば、一辺約7.50mの方墳である。周溝の残存する最大幅は1.45m、深さは約0.20mを測る。

周溝内からは遺物は全く出土しなかった。

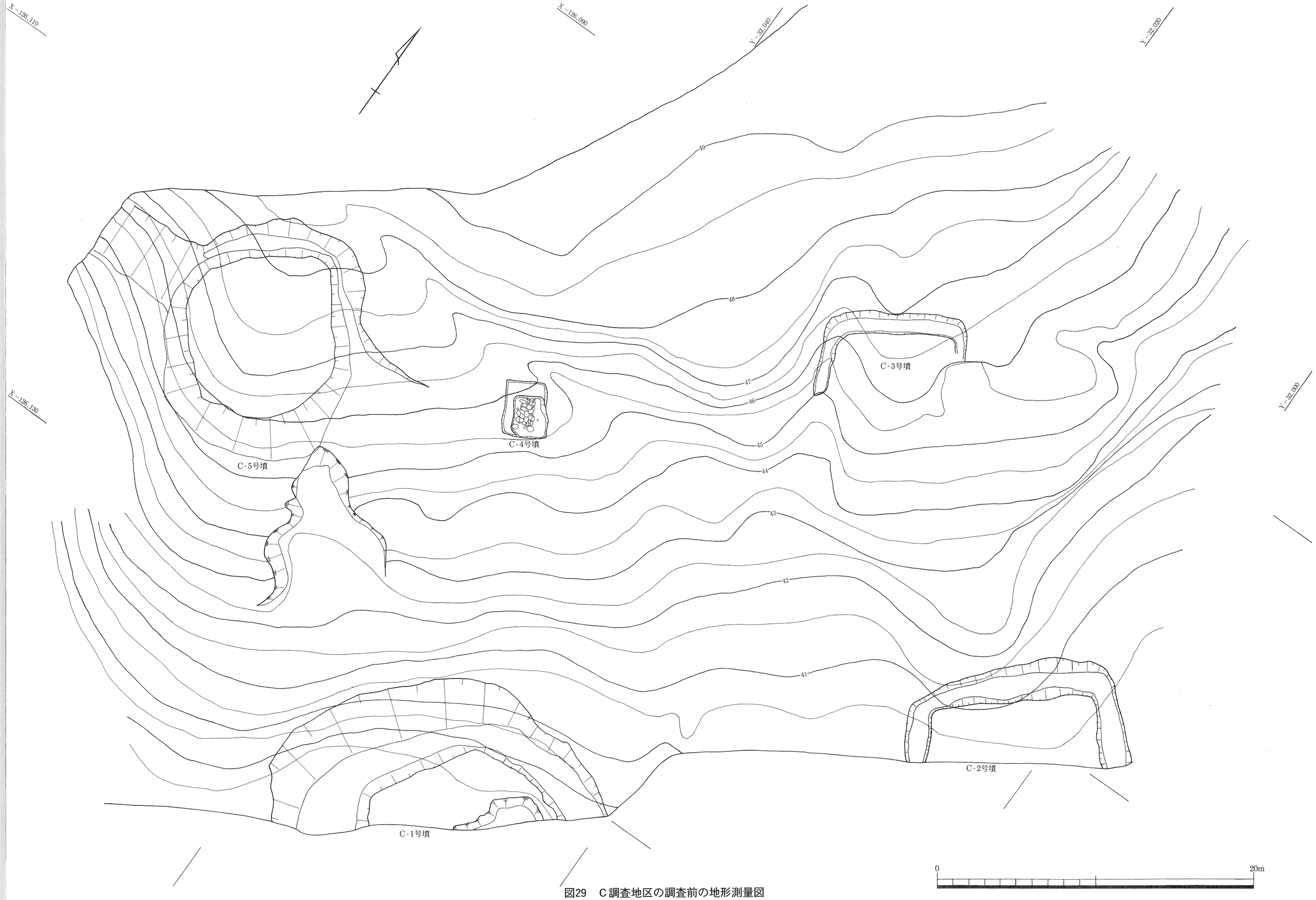


図29　C調査地区の調査前の地形測量図

図30　C調査地区の平面図

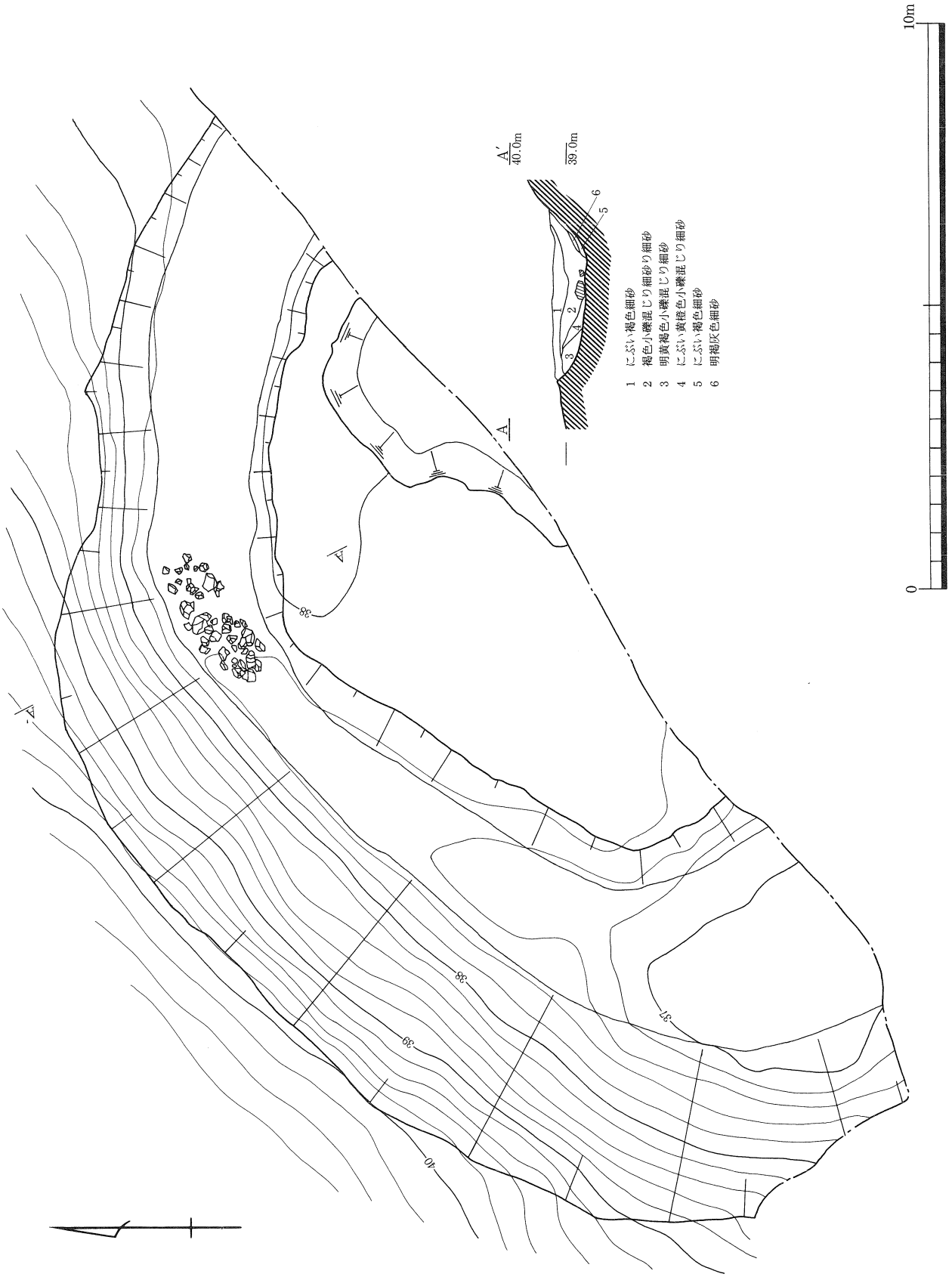

A
A'
40.0m
39.0m
1 にぶい褐色細砂
2 褐色小礫混じり細砂り細砂
3 明黄褐色小礫混じり細砂
4 にぶい黄橙色小礫混じり細砂
5 にぶい褐色細砂
6 明褐灰色細砂
38
39
40
37
0
10m

図31　C－1号墳の周溝

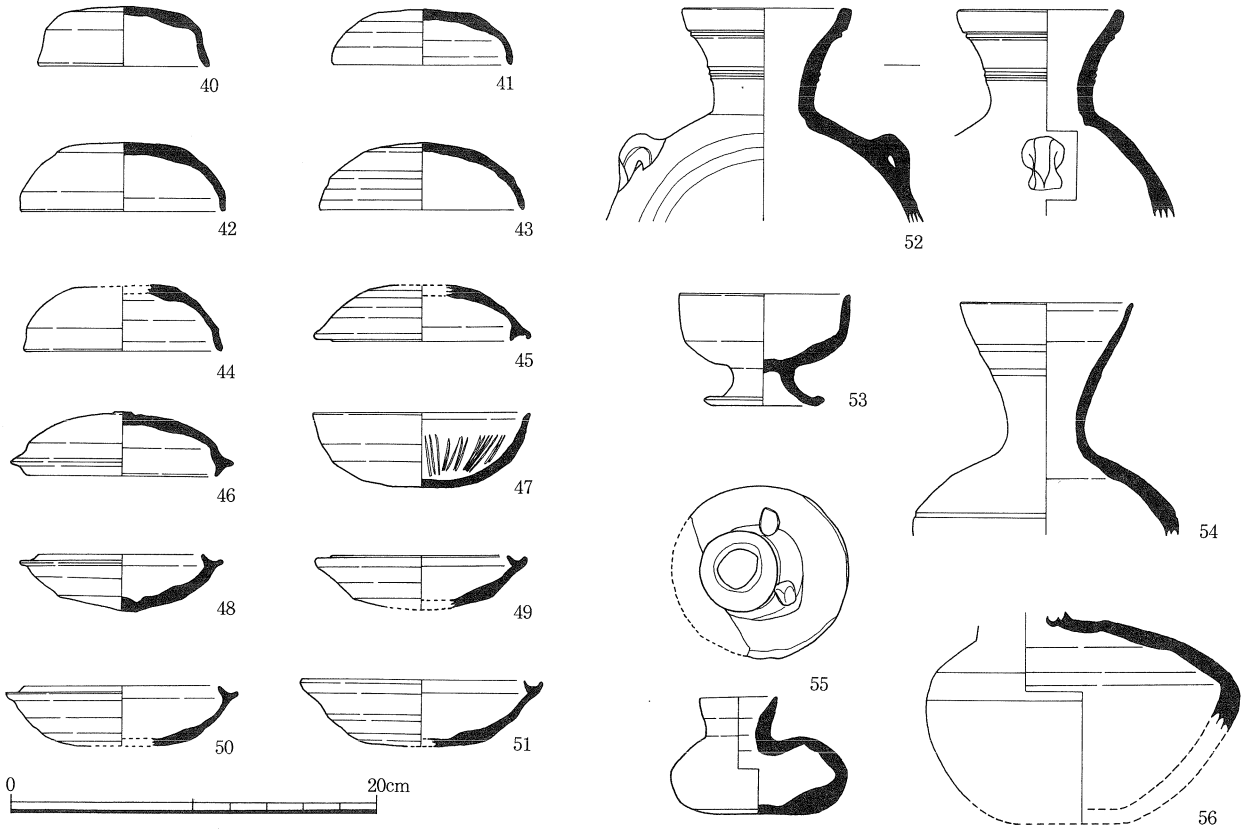


図32　C－1号墳出土の土器

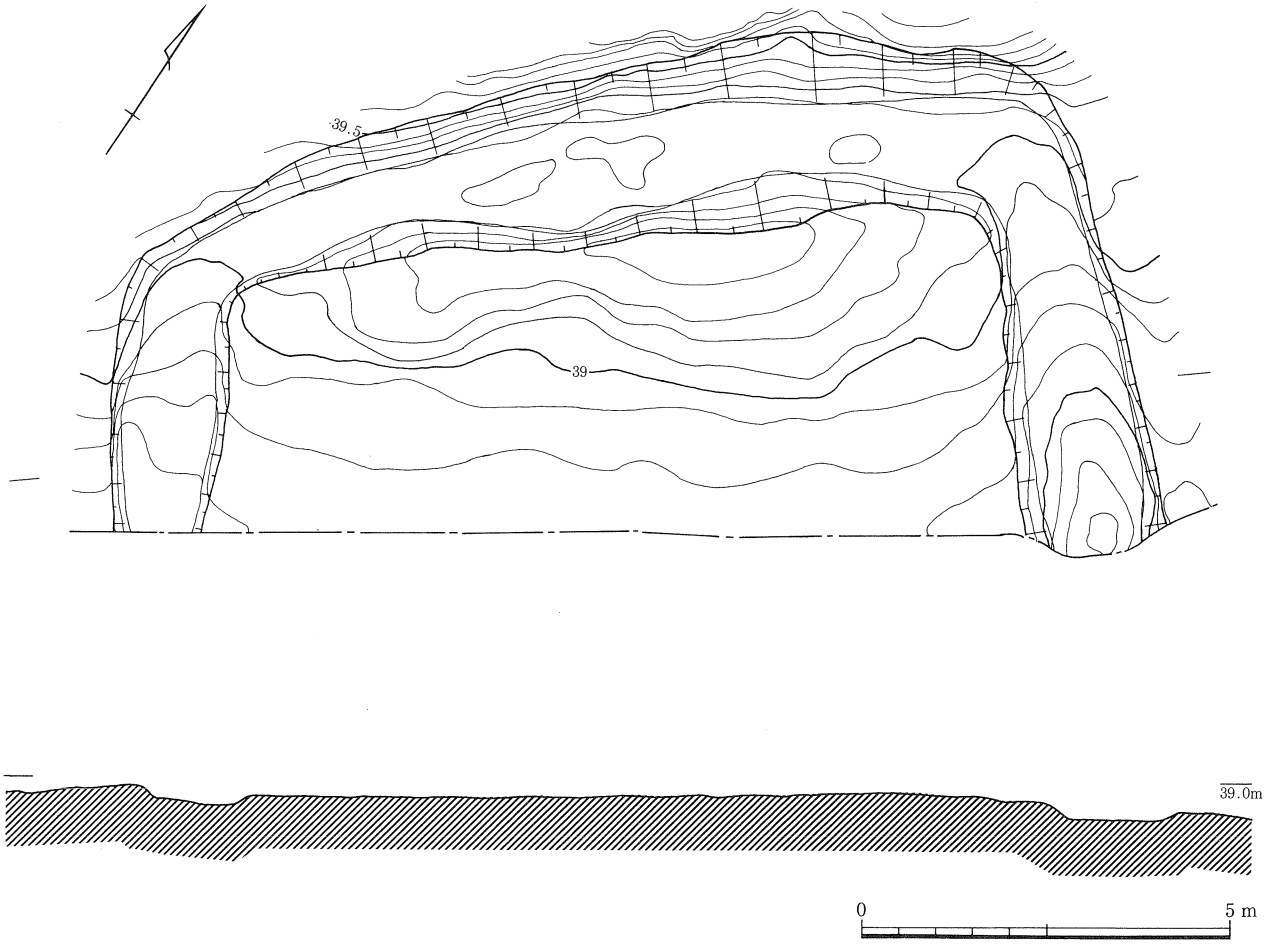


図33　C－2号墳の周溝

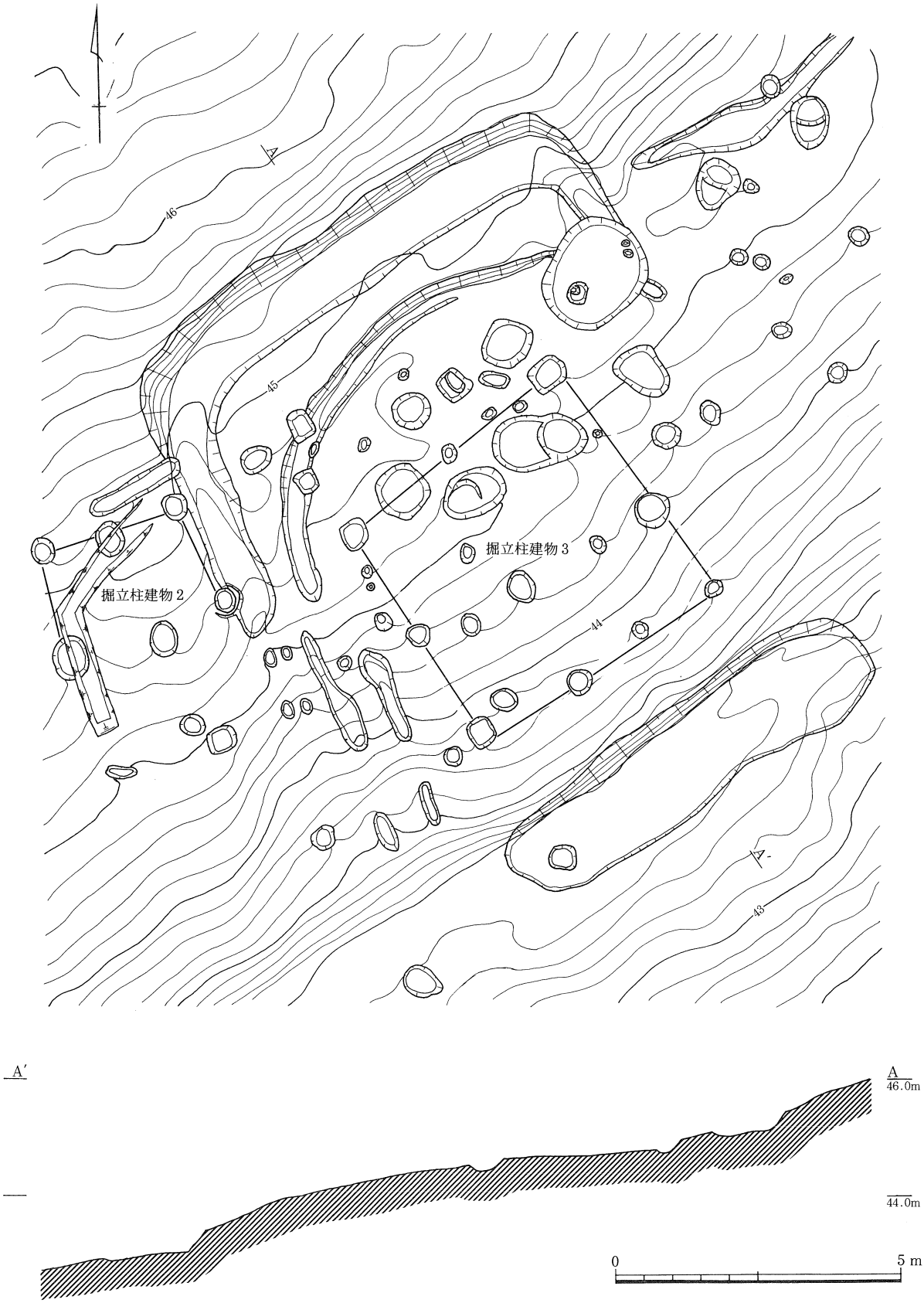


図34　C－3号墳の周溝

4）C－4号墳　（図29・35、図版25）

この古墳はC－2号墳の北西方約20mに位置する。検出床面の標高は45mを測る。

墳丘は削平を受け、主体部の一部分のみ遺存していた。当初は、集石を伴う土壙として扱ったが、南東方向に長軸をとる集石の設置状況などから、石室床面の敷石が残存したものと考えられる。敷石の南東部の2石は側壁の一部分が遺存したものと考えられる。

掘方は残存する長さが2.80m、幅は2.14m、深さは最深部で0.40mを測り、敷石の範囲は幅1.20m、長さ2.20mを測る。敷石の石材は直径0.10～0.30㎝の花崗岩の自然石で構成され、残存する範囲ではほぼ隙間なく敷かれている。遺物は出土していない。

5）C－5号墳　（図29・36、図版25）

この古墳はC－4号墳の主体部から西方約20mに位置する。検出床面の標高は48mを測る。

墳丘の盛土は完全に削平を受け、主体部も検出できなかった。地山整形面の形状をみるかぎり、一辺約12mの方墳であったと考えられる。

墳丘の南部分は、丘陵の西側縁辺部と接しており、相対する北側には墳丘の区画を目的としたと考えられる溝が検出された。溝は、墳丘の東付近では北方向にややひらきながら消滅し、西側でもひらきながら調査地区外へと延びていく。遺物は出土していない。

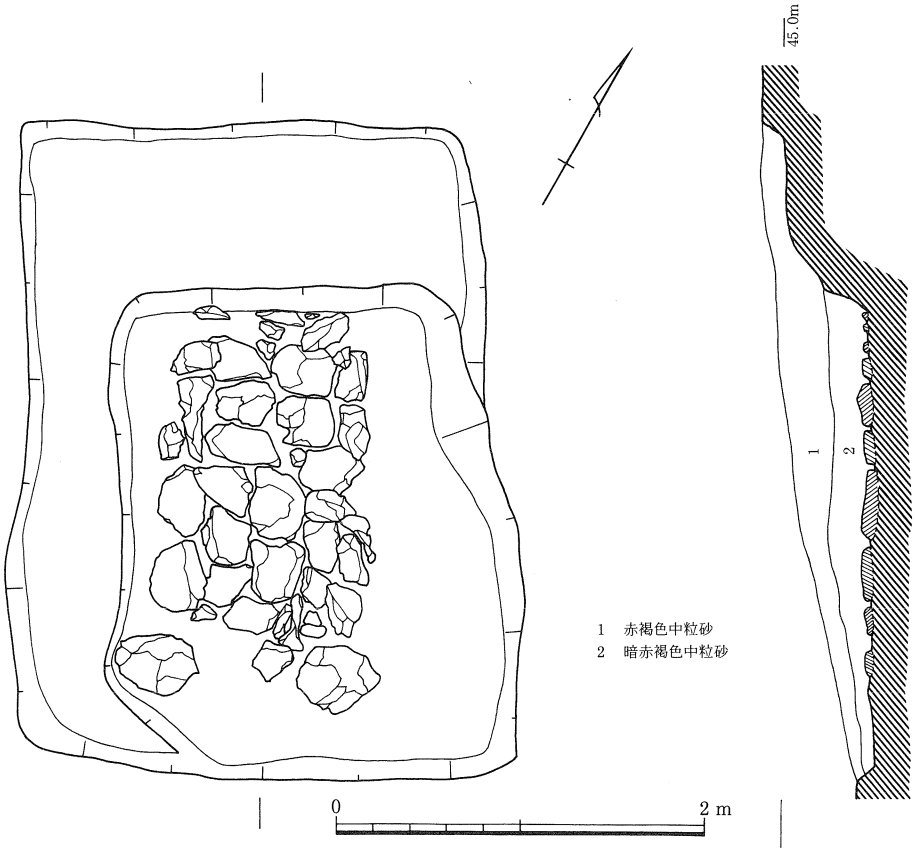


図35　C－4号墳の石室

図36　C－5号墳

第４節　Ｄ尾根の調査（Ｄ１調査地区）

Ｄ尾根では、２基の古墳を検出している。（図37・38・43、図版４）

１）Ｄ－１号墳

この古墳は南東に延びる尾根線上やや北東に偏して立地する円墳である。石室床面の高さは41.6mを測る。

１．墳丘（図38・42、図版27）

墳形は直径約25mの円形で、墳丘の高さは約3.50mを測る。墳丘の大半は盛土によって構築されており、盛土の厚さは墳丘中央で約２mを測る。

墳丘の北西側、すなわち尾根の基部側に、幅約５m、深さ約1.20mの掘り割りを設けている。

２．主体部（図39～41・43・44、図版28～31）

主体部は南東に開口する横穴式石室で、石室の長軸方向はＮ－32°－Ｅになる。奥壁から羨道方向をみると、右片袖の石室となる。石室上部は撹乱を受け、天井石は残存していなかった。

石室の掘方は黒褐色礫土の旧地表面より掘削されており、平面形は長方形となる。

底面は、基底石を設置するために、馬蹄形状に掘り下げられ、掘方は全長約9.50m、幅約３～４m、深さ約0.10mを測る。

石室は長方形の玄室に、長い羨道が付く。現存する長さは10.20mを測る。玄室は長さ４mで、玄室の幅、奥壁、玄門部ともに1.90mで、奥壁から2.60m付近において最大幅2.28mを測る。羨道は現存する長さが6.20m、幅は1.20mを測り、玄門床面に框石を配し、玄室床面より約0.30m高くなる。

石室を構成する石材は全て花崗岩とみられる自然石を使用している。奥壁は高さ１m、幅1.20m、奥行0.70mの大型石材を基底石として横積みし、左壁との間に高さ0.60m、幅0.60mの石材を用いている。

玄室の両側壁の基底石はそれぞれ４石で構成される。各石材は横積みを基本とするが、基底石の大きさが不均等で、高さを調整するにあたり、各石材の大きさも不揃いとなる。

袖石は２段目まで遺存し、基底石は高さ0.70m、幅0.90mを測る。立面形は三角形を呈するため、２段目の石との隙間には、不定形の石材を数個詰め、安定を図っている。

袖石に対応する羨道左側壁には高さ1.16m、幅1.10m、奥行0.80mの大型石材を据えている。

羨道の側壁は特に遺存状態が悪く、左壁側の羨門部と右壁中央部では基底石ごと抜き取られている。玄門より入口に向って、両側壁の石材が大きくなる傾向が見られる。羨道中程から奥壁にかけての床面には、直径３～20㎝程度の河原石がほぼ全面に敷かれている。奥壁から手前0.60mまでの床面と羨道床面の敷石は、直径約20㎝の扁平なもので構成されている。

排水溝は奥壁より手前側へ0.80mの地点から始まり、玄室、羨道を抜け墳丘外へ延びるが、

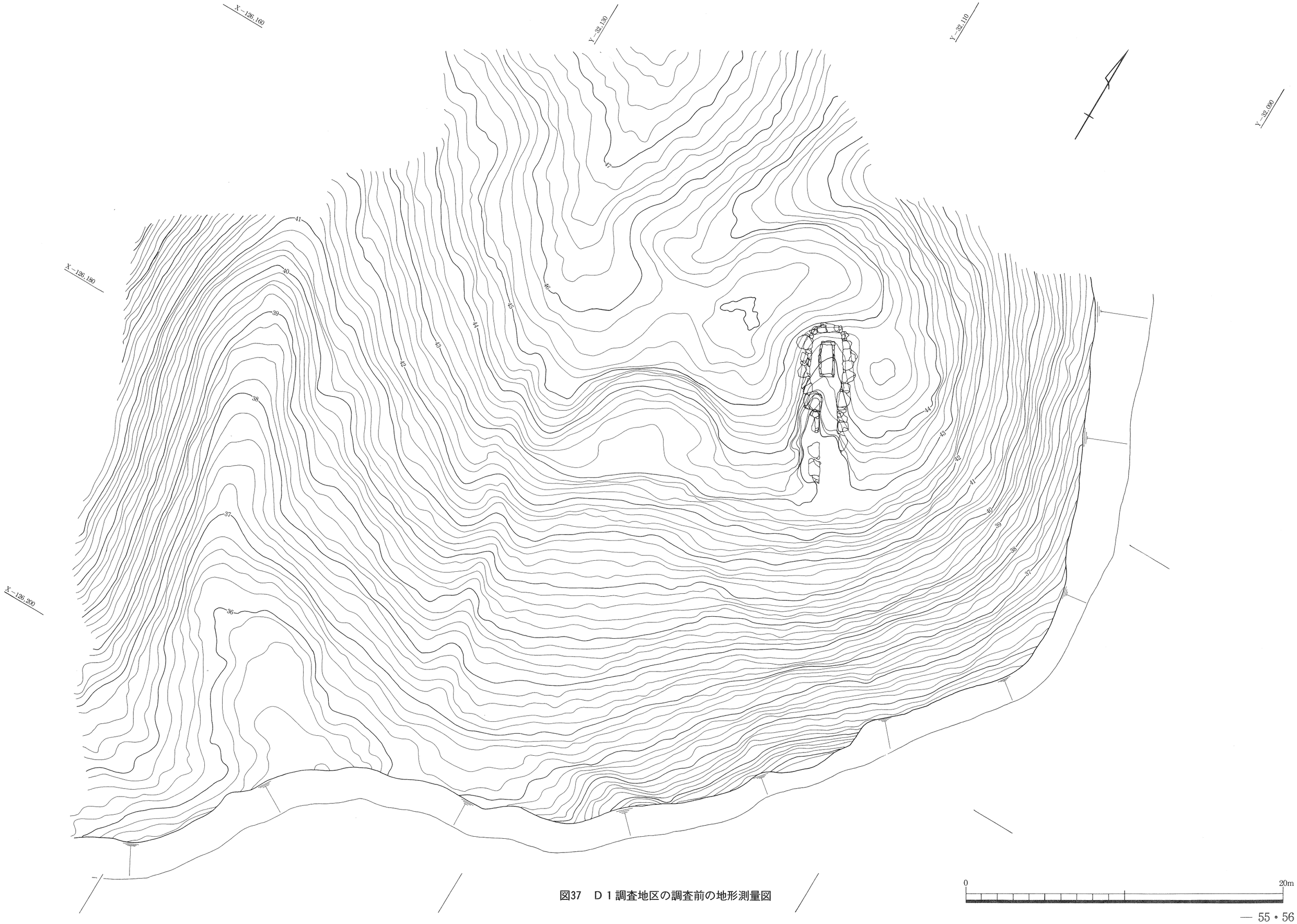


図37　Ｄ１調査地区の調査前の地形測量図

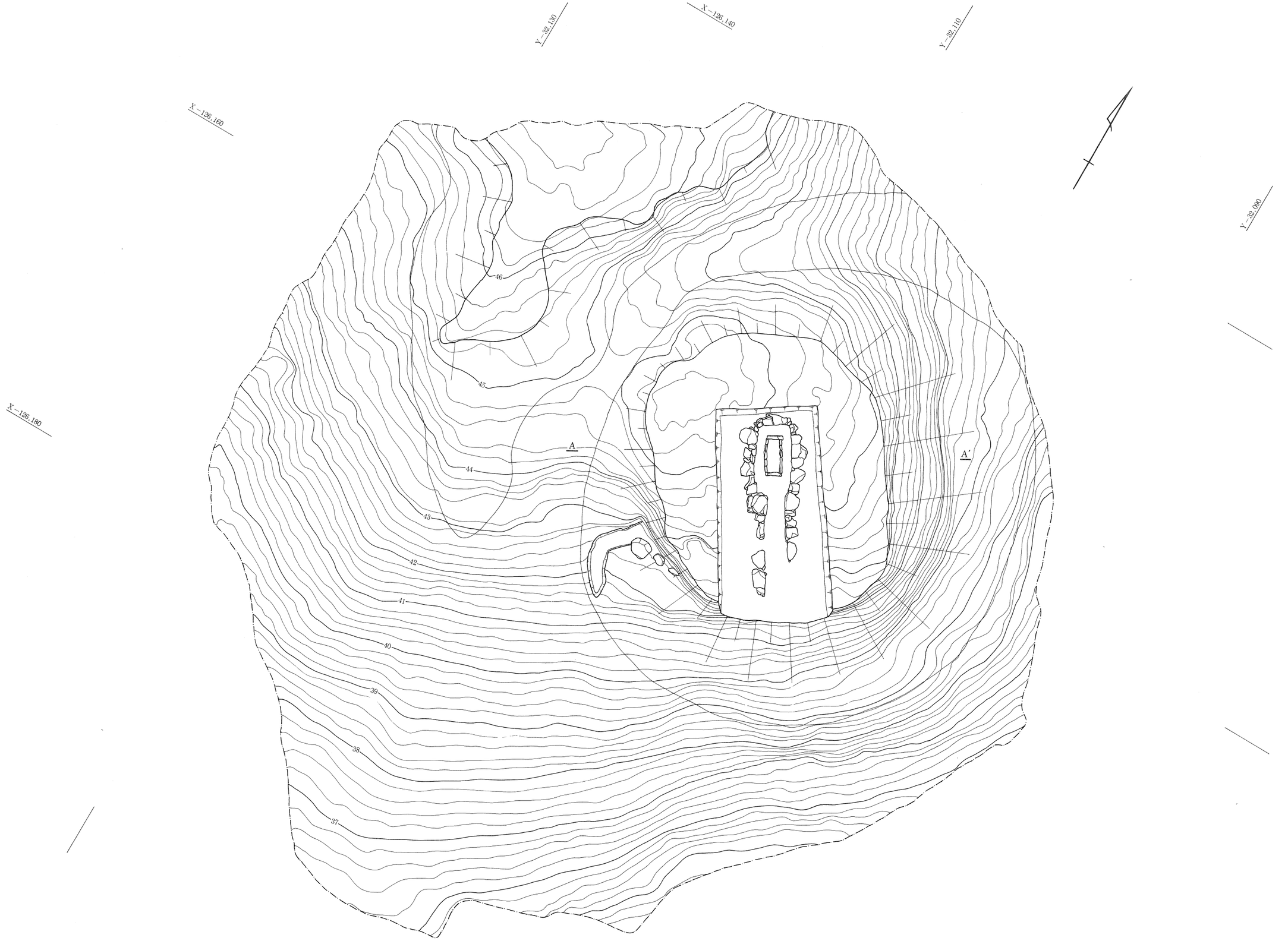


図38　Ｄ１調査地区の平面図

図39　D－1号墳の石室上面・遺物出土状況

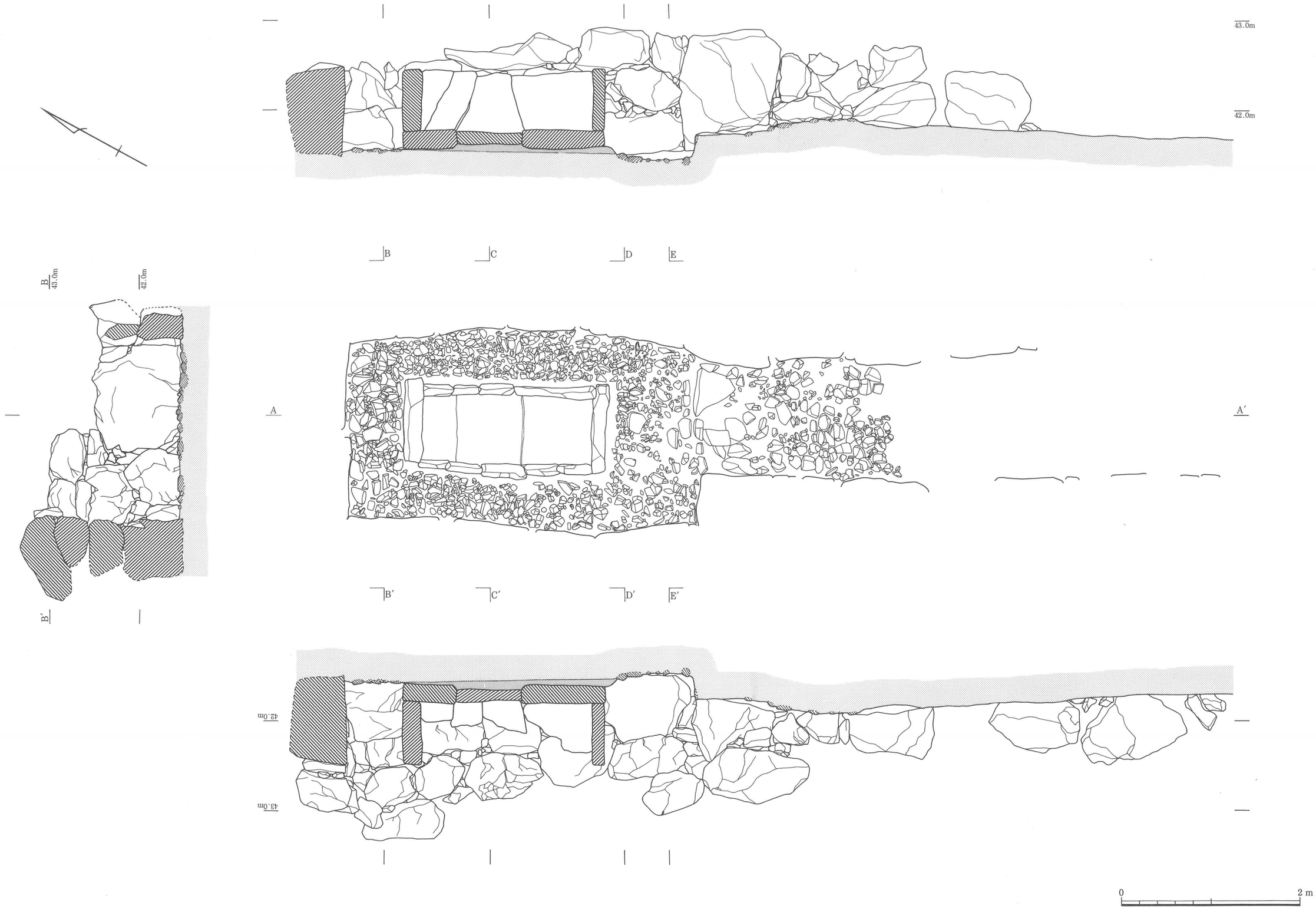


図40　D－1号墳の石室1

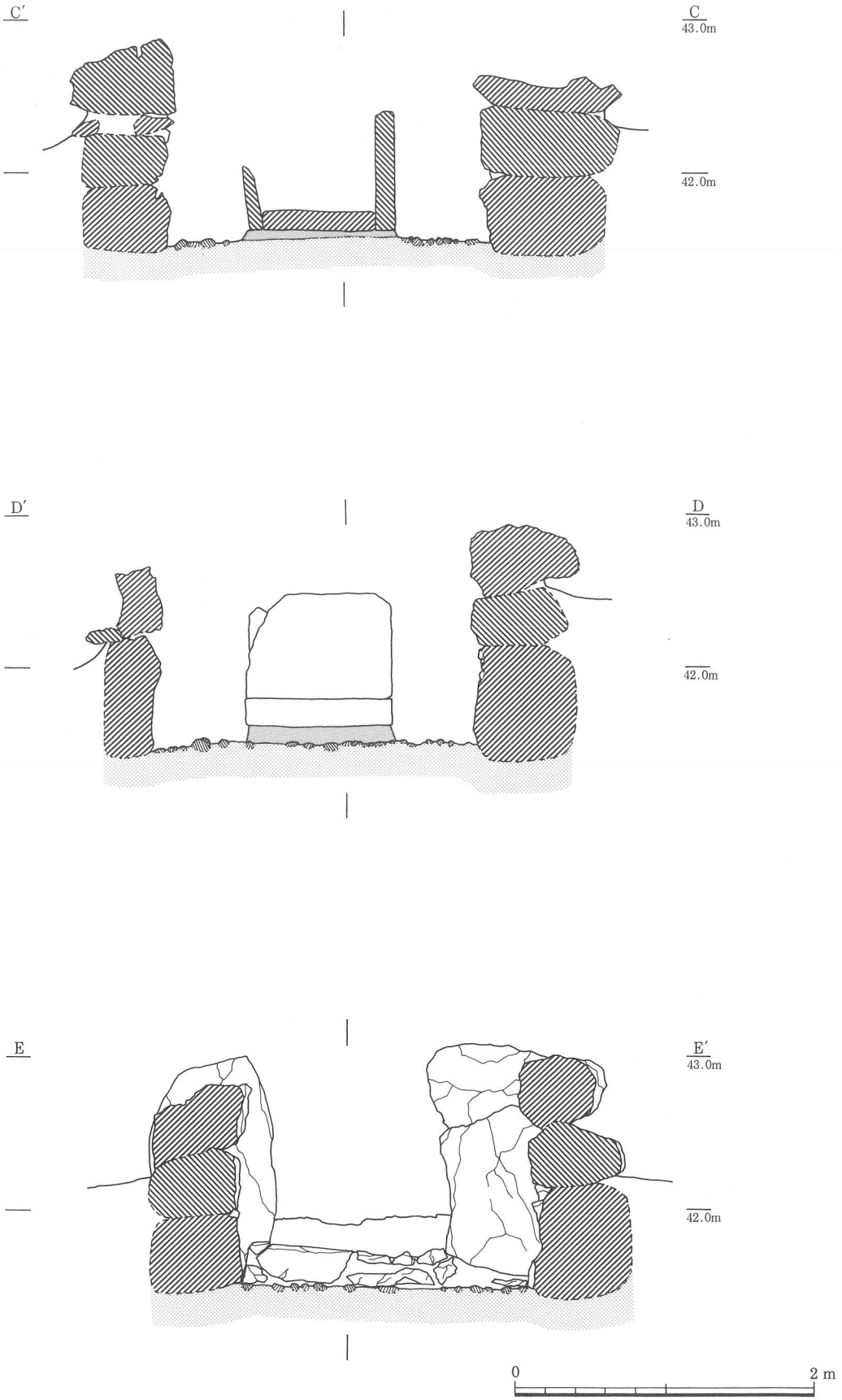


図41　D－1号墳の石室2

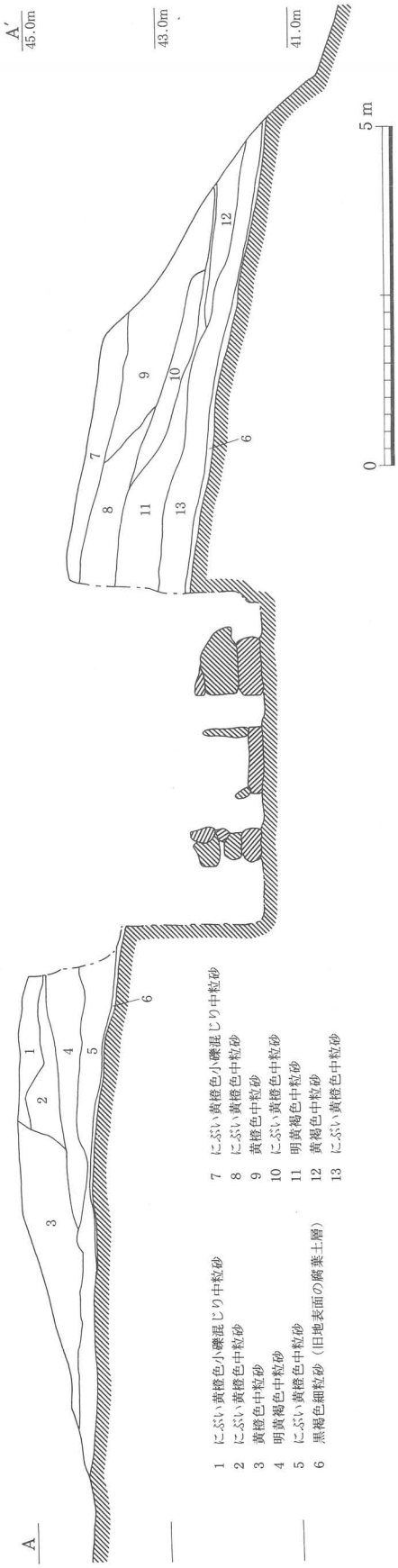


図42　D－1号墳の墳丘・石室断面

末端部は損なわれている。残存する長さは14.5m、幅は0.60m、深さは最深部で0.54mを測る。基本構造は平らな石を2列に並べ、その上に蓋石を置く暗渠状となるが、部分的に側石や蓋石のない所も見られる。石棺の下では掘方のみで、石は見られない。

3．家形石棺（図45・46、図版30）

玄室長軸に平行し、玄室の中心からわずかに奥壁寄りの位置に組合式の家形石棺が置かれている。盗掘や石室の石材が抜き取られた際にかなり石棺も破損しており、左側石は、その下半部しか遺存していない。蓋も、石棺と奥壁及び石棺と左側石の隙間に1枚ずつ落ち込んだ状況で検出している。

奥壁側の底石は僅かに敷石に接するが、玄室底面が玄門に向かって緩やかに傾斜しているため、底石の下には貼り床によって石棺の水平を保っている。石棺は蓋石2枚以上、側石2枚、小口石2枚、底石3枚で組合わされている。石材は二上山産出の凝灰岩である。各石材の組合方法は、底石の上に側石・小口石をのせ、小口石が側石を挾み込む形をとる。組合の結合部には、溝や段の加工痕跡は全くみられない。

棺身の内法は長さ1.86m、幅0.69m、高さは0.72mを測る。縄掛突起を含めた現存する外形の最大法量は長さ2.27m、幅1.15m、高さ1.13mを測る。

蓋は寄棟の屋根形を呈し、石棺長軸方向からみて左右側面の傾斜面に縄掛突起が付く。奥壁側で検出した蓋1は完形であるが、手前の蓋2は、破損が著しく長軸方向への規模の推定が困難であり、2枚継ぎなのか3枚継ぎなのかは不明である。いずれにしても縄掛突起の配置は、長辺に3個の合計6個付加されていたと考えられる。

法量は蓋1で、長辺側の長さ0.79m、短辺側の幅0.98m、最も厚いところで高さ0.25mを測る。

蓋2では長辺側の残存する長さは0.93m、短辺側の残存する長さは0.72m、残存する高さは0.28mを測る。

蓋の垂直面や傾斜面には幅3～5㎝の縦方向を主体とする

図43　Ｄ－１号墳の墳丘除去後の平面図

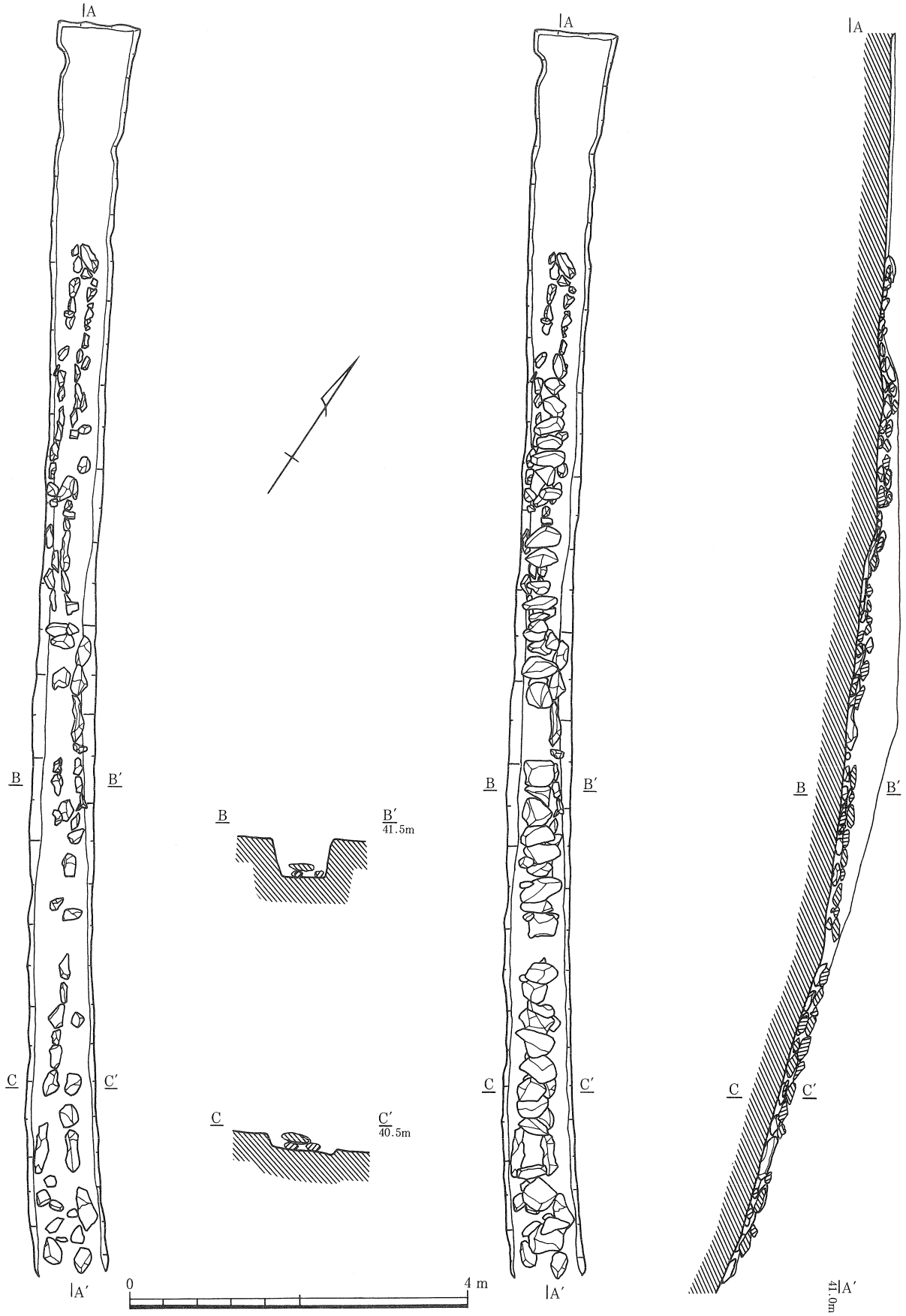


図44　D－1号墳の排水溝

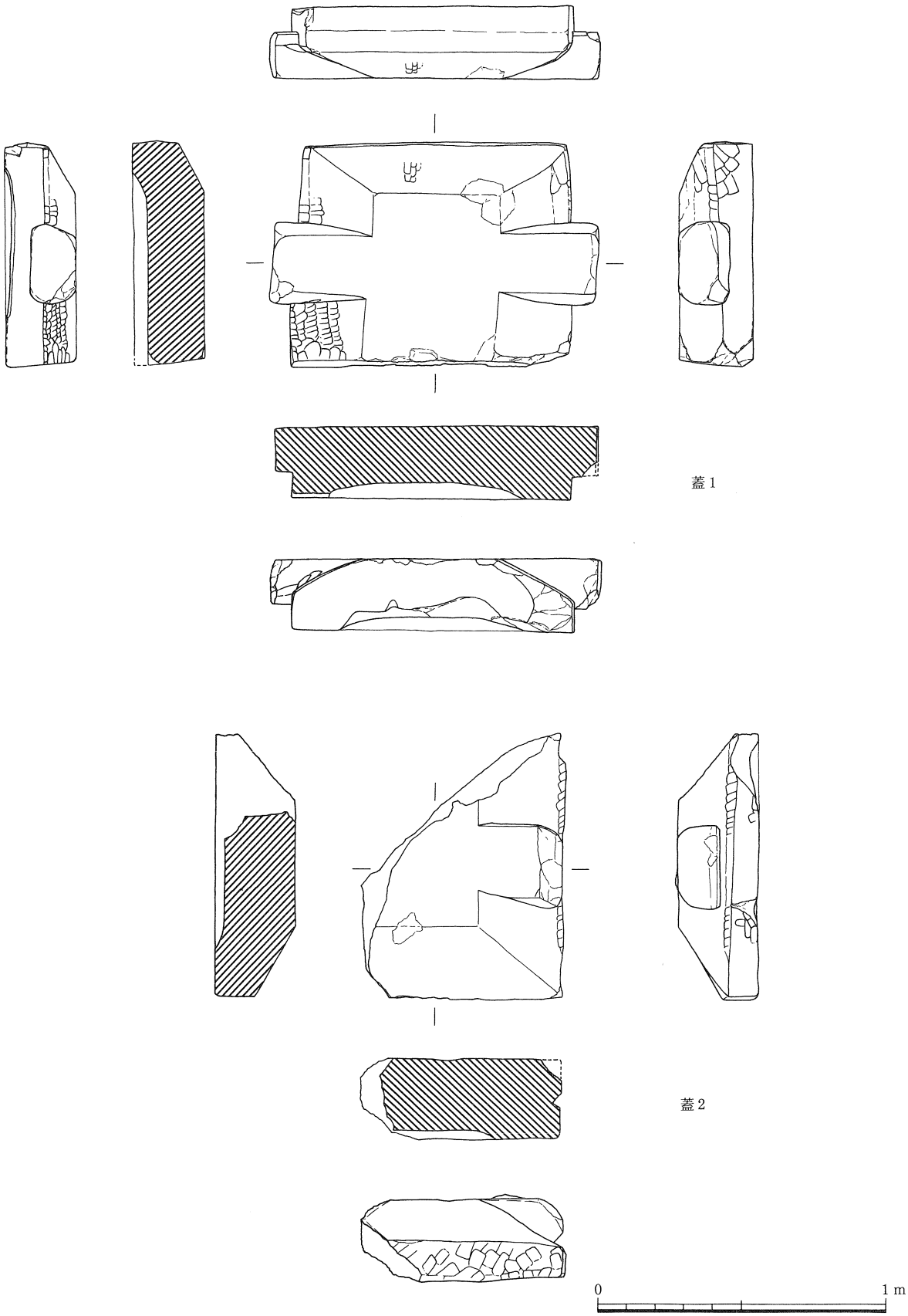


図45　D－1号墳の家形石棺（蓋）

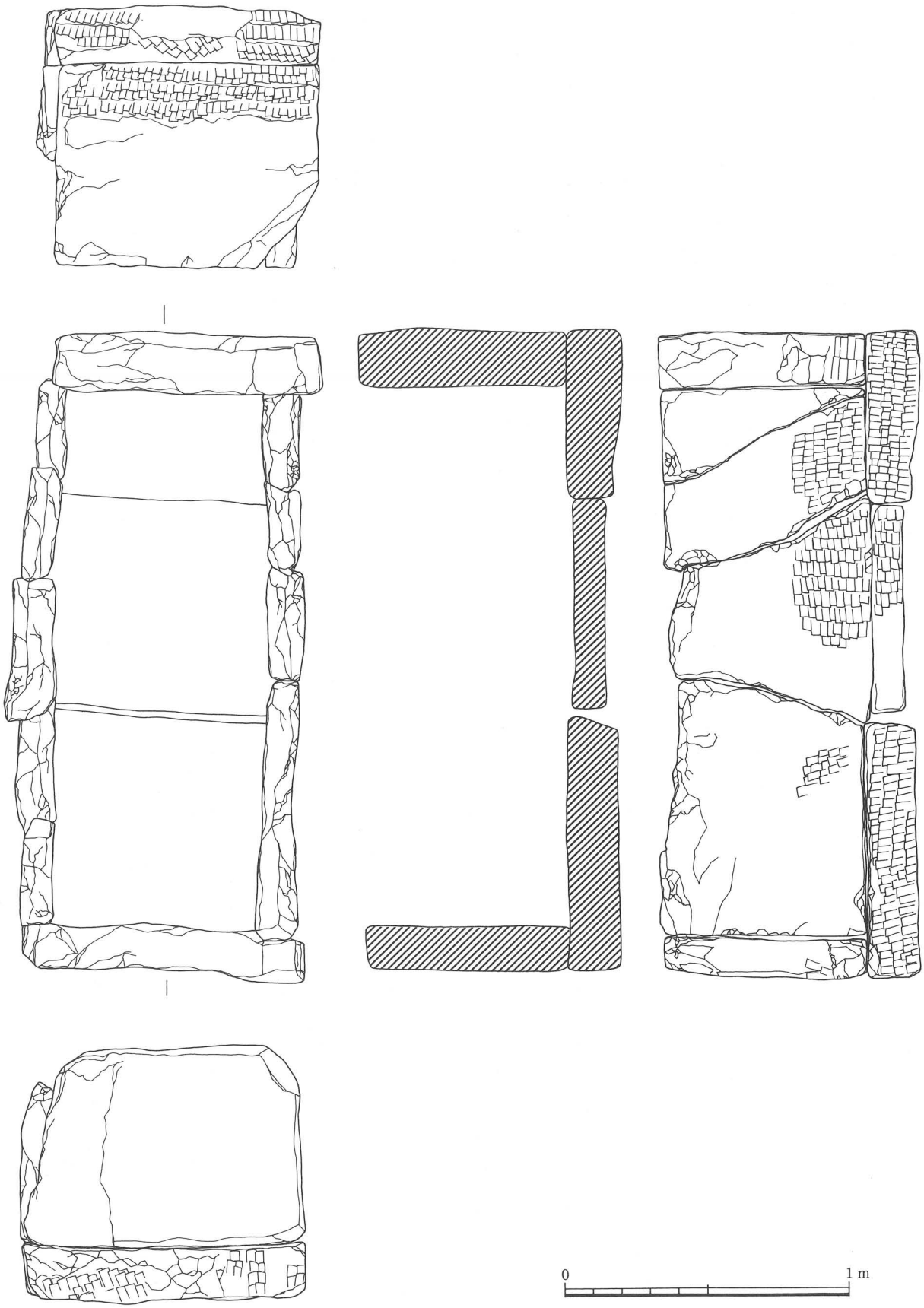


図46　D－1号墳の家形石棺（身）

鑿痕が残る。蓋１・蓋２とも長辺側の垂直面と傾斜面の境に、面取り風に鑿痕が遺存している。

底石は長辺2.27m、短辺0.99m、最大厚0.19mを測り、大きさの違う３枚の石材で構成されている。３枚とも厚さは不揃いであり、特に中央の底石は他の２枚に比較して約７㎝程度薄くなるが、貼り床によって床面は水平にされている。底石の左側面と両小口側の側面に鑿痕がみられる、鑿痕は中央の底石側面のみ横方向にみられ、他は縦方向である。各鑿痕は重なりあって遺存し、鑿の幅は約3.0㎝を測る。

側石は遺存状況の良い左側石でみると、長さ1.92m、高さ0.72m、厚さ0.15mを測る。側石外面の下方には、幅約3.0㎝の鑿痕が遺存する。中央の底石の上部付近では横方向に、その他は縦方向に施されている。

奥壁側の小口石は幅１m、高さ0.72m、厚さ0.20mを測り、外面下方には幅２～３㎝の鑿痕が縦方向に遺存する。手前の小口石は幅0.99m、高さ0.71m、厚さ0.15mを測る。

４．遺物の出土状況（図39）

この古墳に伴う遺物は石室内より出土している。遺物は玄室床面付近の堆積土（石敷面から約10～20㎝）より出土し、片付けられたような状況はなく、原位置を保っているものはほとんどないと考えられる。土器は玄室の中から広範囲にわたって出土し、金属製品はそのほとんどが、奥壁の向って左隅において、錆と土が一体となった板状の塊となって出土した。

５．遺物

土器（図47・48、図版54～57）

須恵器は杯蓋が６点、杯身が７点、高杯が５点、長頸壺の蓋が１点、短頸壺の蓋が１点、台付壺が３点、提瓶が１点、甕が１点出土している。土師器は長頸壺が１点出土している。

62・63・66・67・69・74・75・79・82は奥壁の向って右隅付近から、64・72・78は玄室右側壁と石棺の隙間から60・61・68・70・76・81は玄室左側壁と石棺の隙間から、57・58・59・65・71・80は玄門付近から、73は羨道敷石の下からそれぞれ出土している。

57は長頸壺の、58は短頸壺の蓋である。57は天井部中央に乳頭状のつまみを付す。59～64は杯蓋である。天井部と口縁部の境の稜はなく、なだらかである。

65～71は杯身である。65～70はたちあがりが内傾しつつ、やや高い。

71の体部はやや直線的に外傾し、口縁端部は丸くおさめている。底部は丸味をもち、外面に「罌」の墨書がみられる。

72～76は無蓋高杯である。単純な椀形の杯部に裾部が内彎するもの（72）と、長脚二段の３方向スカシを穿つもの（73～76）の２種があり、杯部下半に櫛描列点文が施されている。

78は台付壺である。口縁部は欠損しているが、長頸壺になろう。わずかに肩の張った体部をもち、肩部の２本の凹線の間に櫛描列点文を施す。裾広がりの脚部には３方向に長方形のスカ

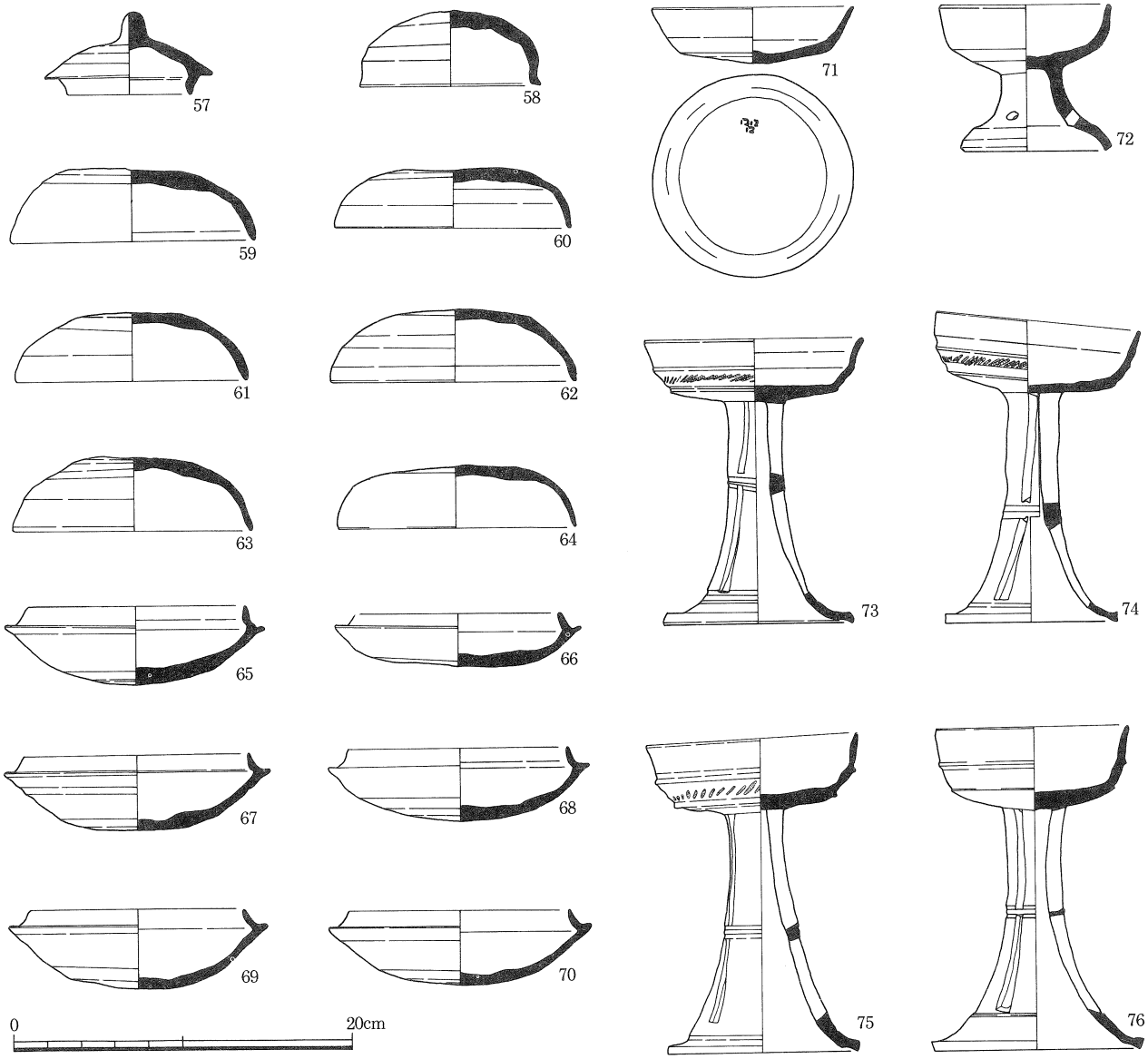


図47　D－1号墳出土の土器1

シを穿つ。81・82は台付長頸壺である。肩の張る体部をもち、肩部の2本の凹線の間に櫛描列点文を施す。脚部には3方向に長方形のスカシを穿つ。

79は提瓶である。体部は平らな円形を呈し、肩部に鉤状の把手を付す。

80は大型の甕である。丸い体部に短く開く口頸部がつく。体部最大径を器高の中位にもつ。

77は土師器の壺である、わずかに外反する口縁部に偏球形の体部がつく。

59～70、73～76はII期（TK43型式）、71・72がⅣ期（TK217型式）に該当する。

金属製品

金属製品は銅鏡・馬具・武器・装身具が出土している。

銅鏡は珠文鏡で、馬具には轡・鞍・杏葉・辻金具、武器には鉄鏃、装身具には金製環・金環・空玉・金銅製透彫金具がある。

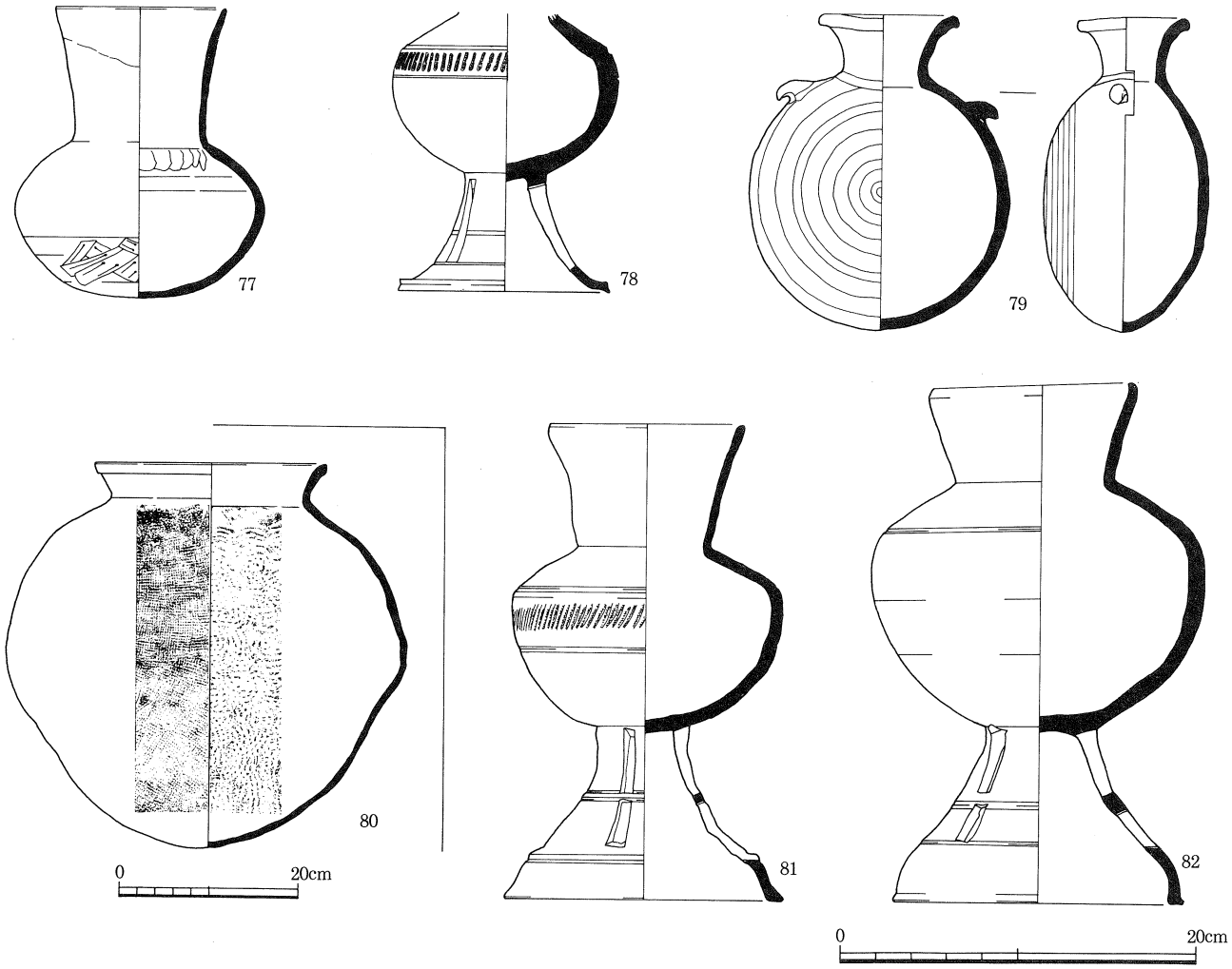


図48　D－1号墳出土の土器2

銅鏡（図49、図版62）

14は直径9.10㎝を測る珠文鏡である。内区には直径約1.5㎜の珠文を地文様とし、内区外周には櫛歯文と鋸歯文を配し、縁は素縁である。紐は平面形状は分銅様を呈し、紐座は無文の円座である。

馬具（図50～53、図版63～66）

15は十字文楕円形鏡板付轡である。引手は鏡板の内側で遊環を介さず直接銜と連結する。引手の先端には別造りの引手壺が取り付けてある。瓢箪形で上端に上下方向の環がつく。引手は長さ16.0㎝、引手壺は長さ6.0㎝を測る。

銜は両端に環がつく2本の鉄棒を連結した二連式となり、完存する方は長さ10.0㎝で、2つの環が直角にねじられている。

鏡板は板金の中心を長さ約1.0㎝、幅約0.4㎝の縦棒が残るように穴を穿ち、銜先と連結させている。板金と縁金、十字文の枠金は、金銅板で覆われていたと考えられる。鏡板の楕円部の長径は11.2㎝、短径8.2㎝、立聞は長さ3.0㎝、幅1.5㎝を測る。立聞には中央に長さ1.0㎝、

幅1.0㎝の方孔があく。縁金具の鋲間は約８～９㎜で、三葉文風に３方をふくらませた部分には３個の鋲が打たれている。丸頭の鋲頭は鉄地が露出しているが、鋲頭の欠損した箇所には部分的に銀の付着がみられ、鋲頭は銀張製であったと考えられる。

16は磯金具の前輪、17は後輪である。いずれも鉄地金銅張である。16は長さ16.5㎝、最大幅5.5㎝である。縁金具には丸頭の鋲が打たれ、鋲間は約７～８㎜である。鋲頭は鉄地が露出して錆びているが、銀張製であったと考えられる。17は残存する長さが18.0㎝、最大幅は6.2㎝

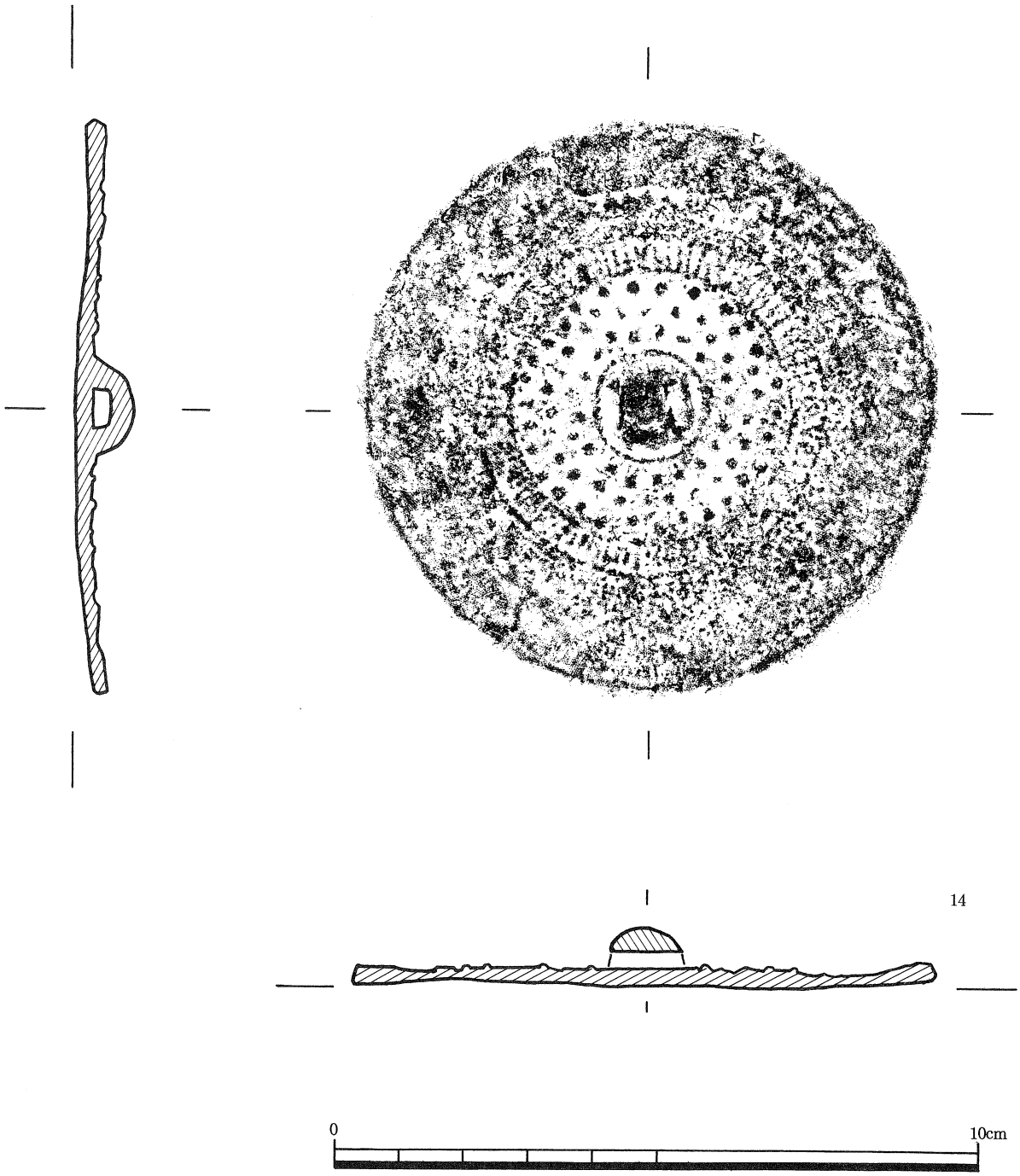


図49　Ｄ－１号墳出土の珠文鏡

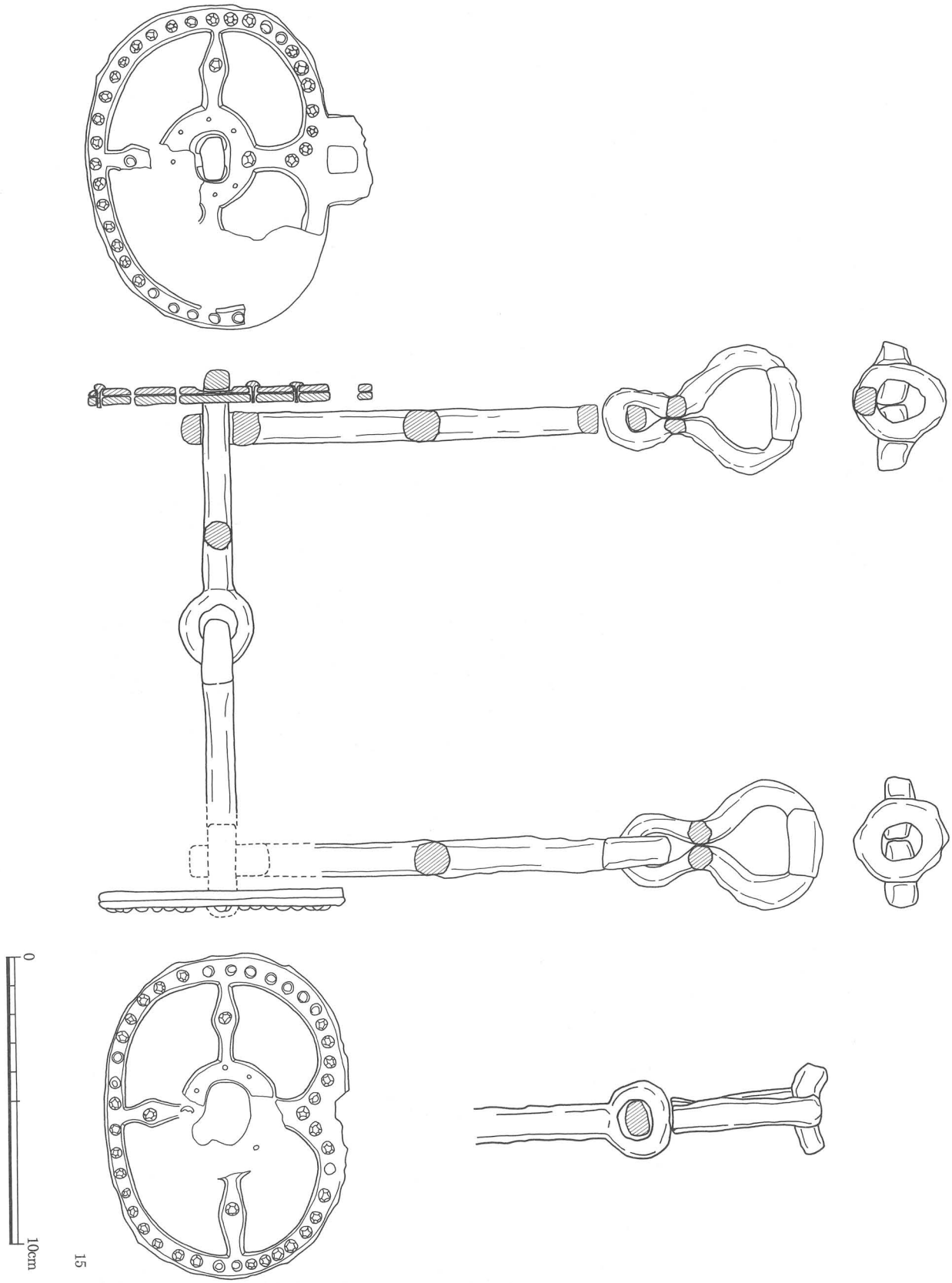


図50　D－1号墳出土の馬具1

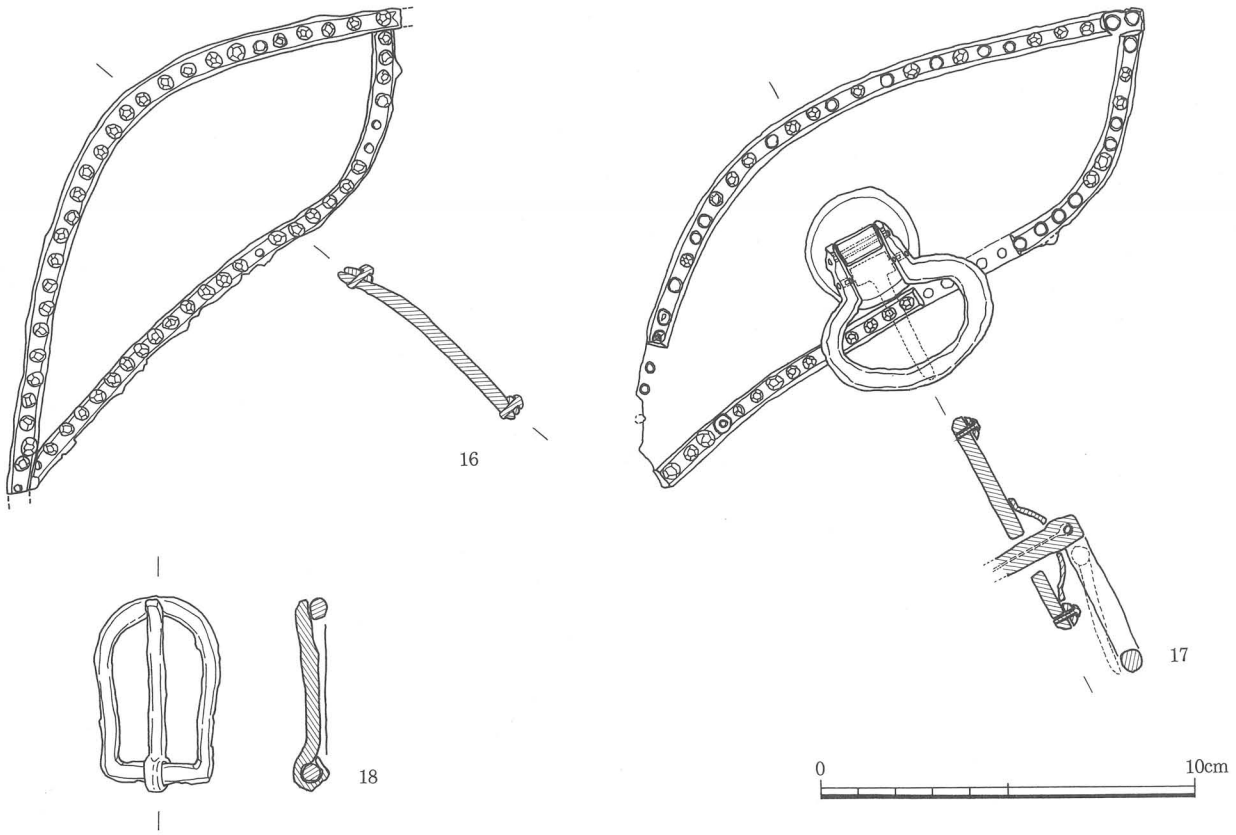


図51　D－1号墳出土の馬具2

を測り、爪先を欠く。直径3.0㎝の円形の座金具に輪金の長さ3.8㎝、幅4.7㎝を測る帆立貝形を呈する鉄製の鉸具が組み合わさる。鉸具の刺金は欠損している。18は縦長の輪金に刺金をかけた鉸具である。輪金の長さは4.9㎝、幅3.3㎝を測る。

19は鉄地金銅張製の双葉剣菱形杏葉である。剣菱形杏葉の楕円部の左右に外側にひらく双葉がとりつく。立聞を含めた全長は13.1㎝、幅は11.0㎝を測る。立聞の方孔には鉄地金銅張製の釣手金具が遺存しており、方形部の長さは2.7㎝、残存する幅は3.5㎝を測る。縁金具と枠金具には丸頭の鋲が7～8㎜の間隔で打たれ、立聞と釣手金具の方形部にはやや大きめの鋲が打たれている。

20～23は三葉文楕円形杏葉である。いずれも鉄地金銅張製で縁金具の上部が中央部へのび、三葉文をかたちづくる。縁金には丸頭の鉄鋲が7～8㎜の間隔で打たれ、三葉文の部分には3個の鋲が打たれる。19の楕円部の長径は10.2㎝、短径は8.0㎝で、長さ1.7㎝、幅3.0㎝の立聞がつく。立聞の方孔には釣手金具の鉤の一部分が遺存している。20の楕円部の長径は10.40㎝、短径は8.5㎝で、長さ1.6㎝、幅2.8㎝の立聞がつく。立聞の方孔には釣手金具が遺存しており、方形部の長さは2.5㎝、幅は2.1㎝を測る。21の楕円部の長径は10.5㎝、短径は8.4㎝で、長さ1.7㎝、幅2.8㎝の立聞がつく。立聞の方孔には釣手金具の鉤の一部分が遺存している。22の楕円部の長径は10.3㎝、短径は8.4㎝で、長さ1.9㎝、幅3.0㎝の立聞がつく。

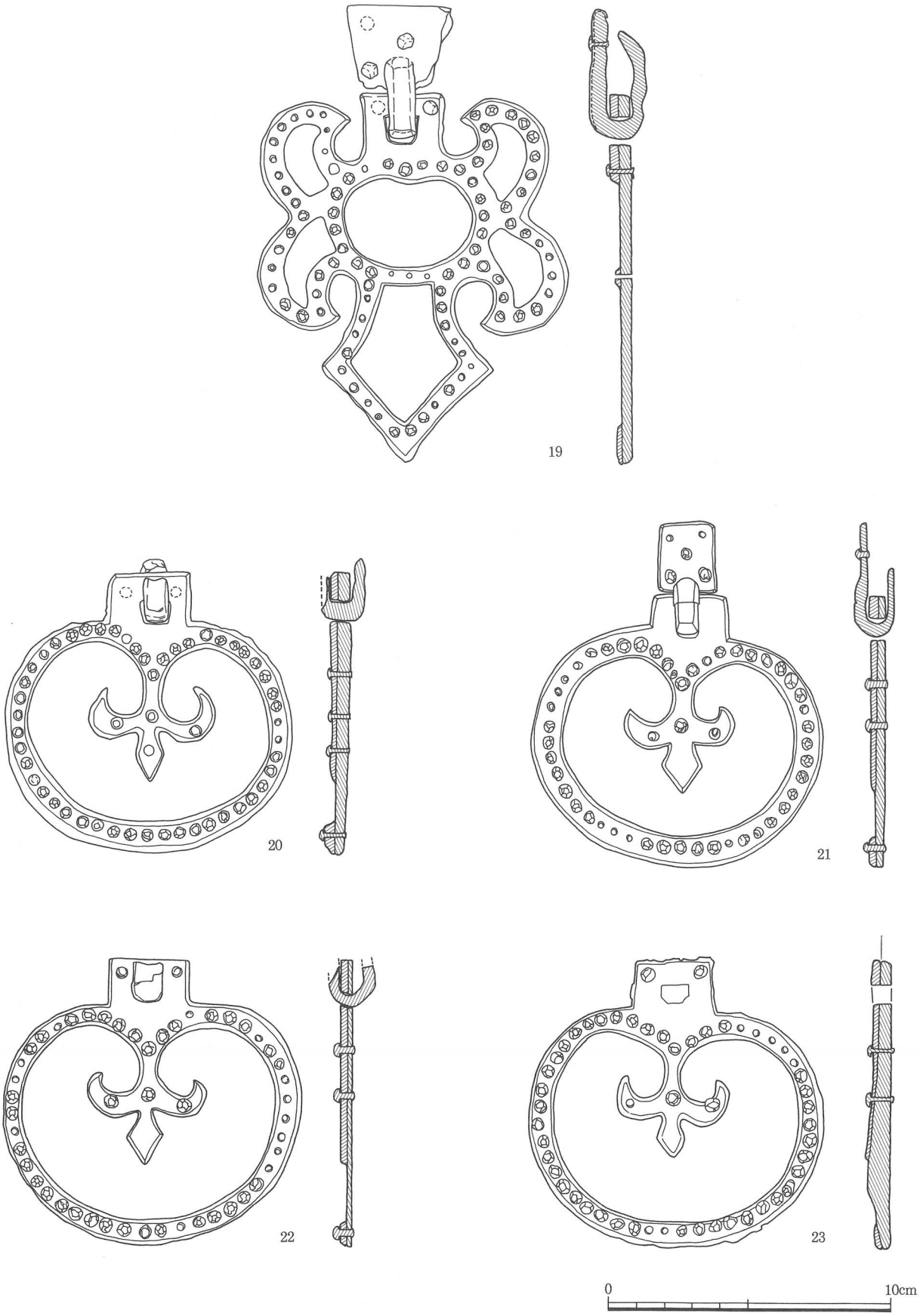


図52　D－1号墳出土の馬具3

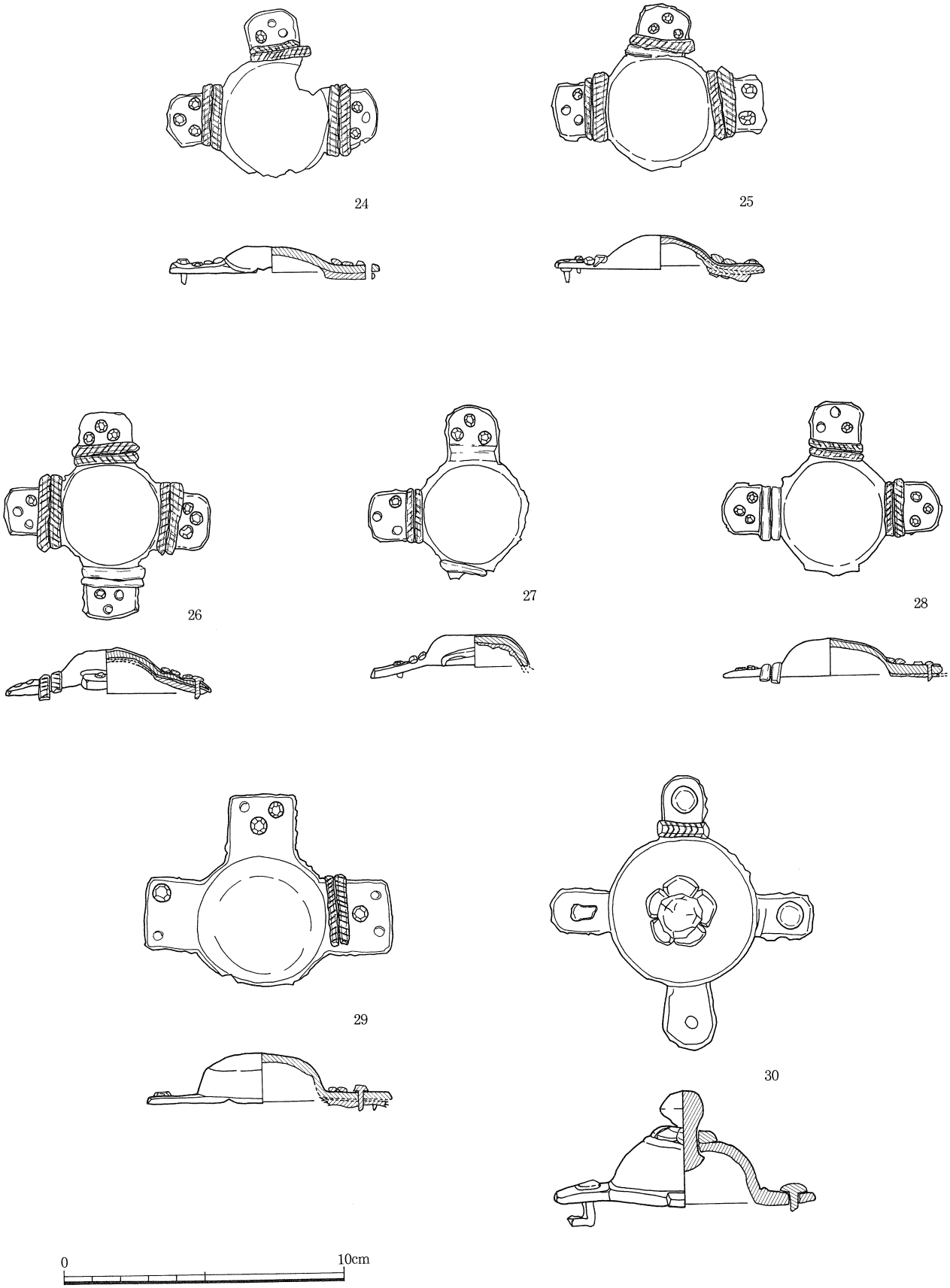


図53　D－1号墳出土の馬具4

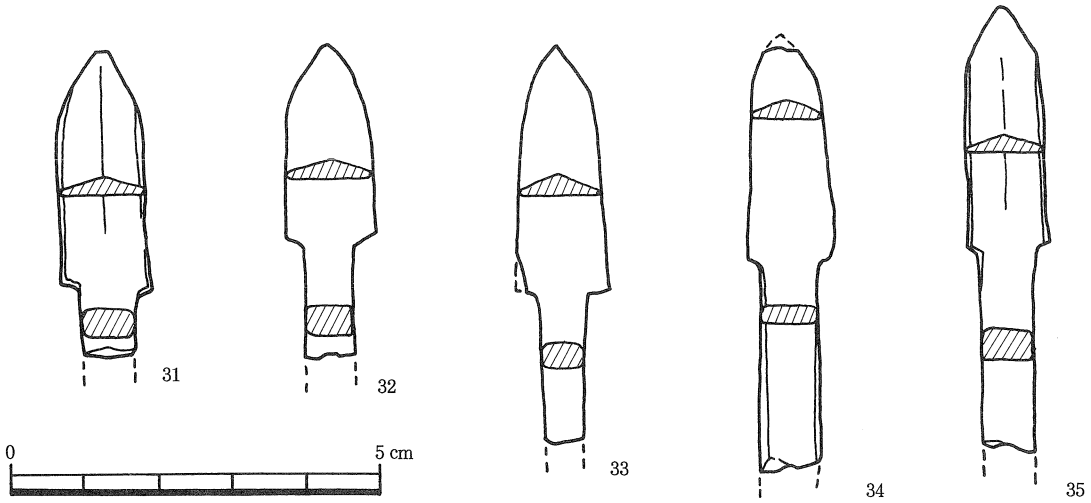


図54　D－1号墳出土の武器

24～30は辻金具である。24～28は爪形、29は方形の脚を4脚配する。各脚にはそれぞれ丸頭の鋲を3個打ち、鉄製の責金具を2本1組として巻く。24～28はほぼ同じ大きさで、脚部を含めた直径は7.4～7.9㎝を測るが、方形の脚をもつ29の直径は8.8㎝と他よりも大きく伏鉢も高い。

30は伏鉢が半球状を呈し、その上に五弁の花形座をのせ、宝珠飾りを戴く。脚は先端が半円形を呈し、4脚配置されている。それらに鋲頭径1.2㎝、高さ4㎜の鋲を1個ずつ打ち、鉄製の責金具を巻く。脚幅は1.6㎝で4脚のうち3脚が同じ大きさとなるが、残りの1脚は、幅が1.9㎝を測り、くびれが顕著で、やや大きめの脚となる。脚部を含めた直径は9.5㎝、伏鉢径5.2㎝、高さ4.0㎝を測る。

武器（図54、図版67）

31～35は柳葉式鉄鏃である。石室内の埋土より出土している。全て篦被の一部が欠損しており全長は不明であるが、刃部長は2.8～3.2㎝を測る。

装身具（図55、図版67）

装身具のすべてが石室内埋土より出土している。36は金製環である。出土時から楕円形を呈するが、本来は円形であった可能性がある。環の外周には幅約0.5㎜の間隔で刻目を施す。37～39は中実の金環である。37は銀製、38・39は銅芯銀張製である。37は長径2.3㎝、短径2.2㎝、断面径0.35㎝、38は長径2.6㎝、短径2.8㎝、断面径0.5㎝、39は長径2.7㎝、短径2.9㎝、断面径0.5㎝をそれぞれ測る。40は金銅製透彫金具である。パルメット風の文様の一部であると思われるが、どのような製品に施されていたかは不明である。41～44は銀製の空玉である。半球形の銀板を2つ合わせて作られている。両面とも中央部が土圧で窪んでいるが、ほぼ完全な形を保っている。4個とも同サイズで、直径1.5㎝を測る。

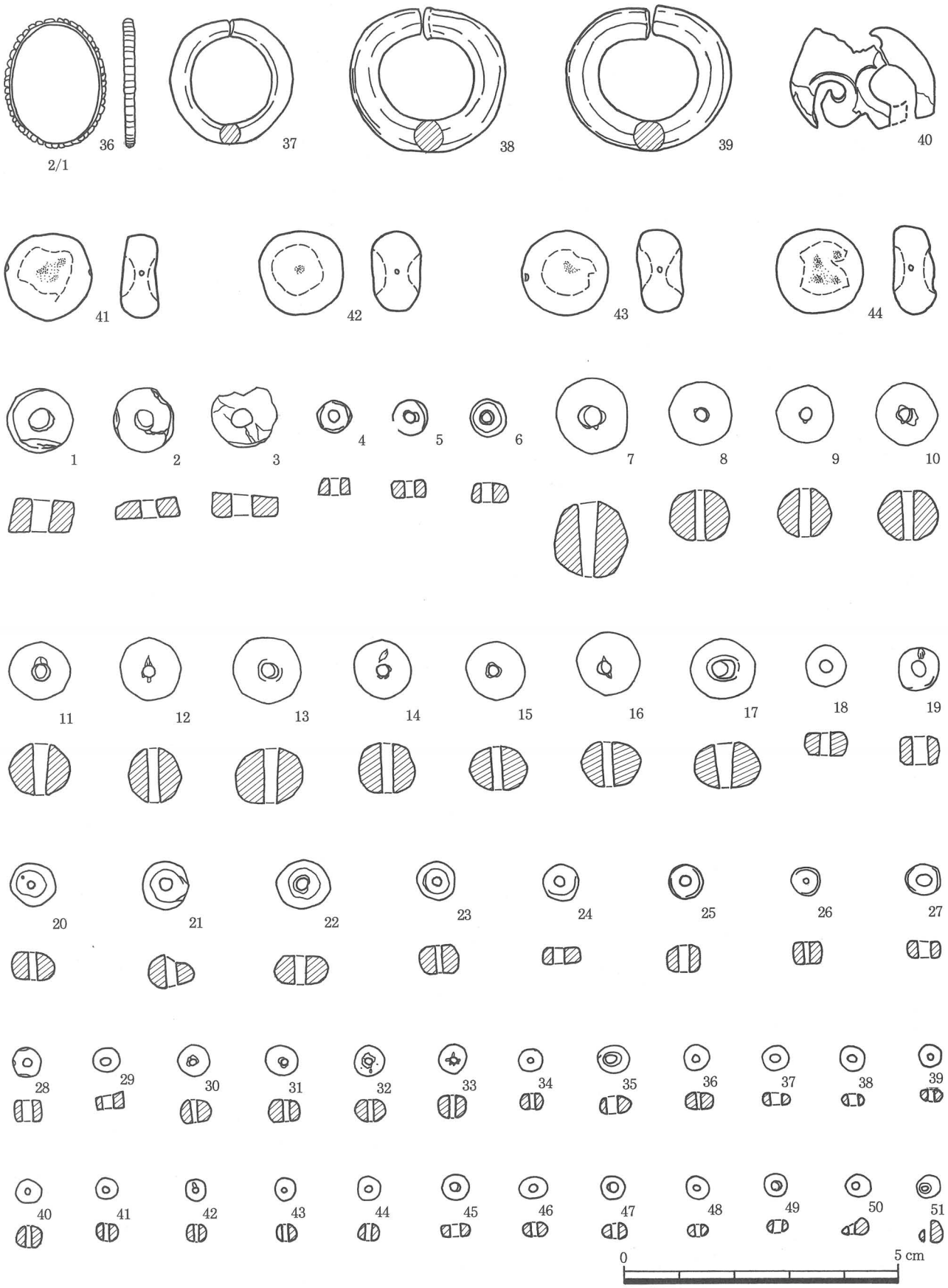


図55　D－1号墳出土の装身具

ガラス製品（図55、図版67）

ガラス製品の全てが装身具で、石室内埋土より丸玉・小玉が出土している。

７～17は丸玉である。１は濃紺色、その他はやや透明感のある緑色である。18～51は小玉である。18～29はやや透明感のある紺色を呈する。30～39はやや透明感のある淡青緑色、40～51は黄色を呈する。

石製品（図55、図版67）

石製品は滑石製臼玉が６個あり（１～６）、石室内埋土より出土している。直径は６～11㎜、厚さは３～６㎜を測る。

２）Ｄ－２号墳

この古墳はＤ－１号墳南東の墳丘裾の南東域付近において、Ｄ－１号墳の墳丘盛土を除去後に発見した古墳である。石室床面の標高は40.3ｍを測る。

１．墳丘（図56、図版32）

墳丘はＤ－１号墳構築の際に完全に削平を受け消滅しており、墳形やその規模も不明である。石室を囲むように巡る浅い落ち込みを検出しているが、石室に関連する遺構であるのかは、判断しがたい。

２．主体部（図56、図版32）

石室は両小口を塞いでおり、竪穴式石室の一種であると考えることができる。

石室は長軸方向をＮ－30°－Ｅにとり、規模は、石室の長さ1.13ｍ、最大幅0.75ｍ、高さは0.35ｍを測る。削平を受けており、上段部の構造は不明である。

石室の規模よりやや小さい掘方をもち、両小口に１石づつ配し、側壁は２段目まで遺存し、２段目の石材は掘方の上縁部にのせている。底面中央部には長径28㎝、短径15㎝を最大とする扁平な、ほぼ同じ大きさの石材を使用して石敷がおこなわれている。石材はＤ－１号墳同様、花崗岩とみられる自然石を使用している。

遺物は石室内から出土しておらず、周辺でも見られなかった。

第５節　Ｆ尾根の調査（Ｆ調査地区）

Ｆ尾根では、２基の古墳を検出している。（図58、図版５・33）

１）Ｆ－１号墳

この古墳は南東に延びる尾根線上やや東に偏して立地する。石室床面の標高は32ｍを測る。

墳丘の盛土は完全に削平を受けており、主体部もその大半が高速道路の盛土の下へ埋没している。

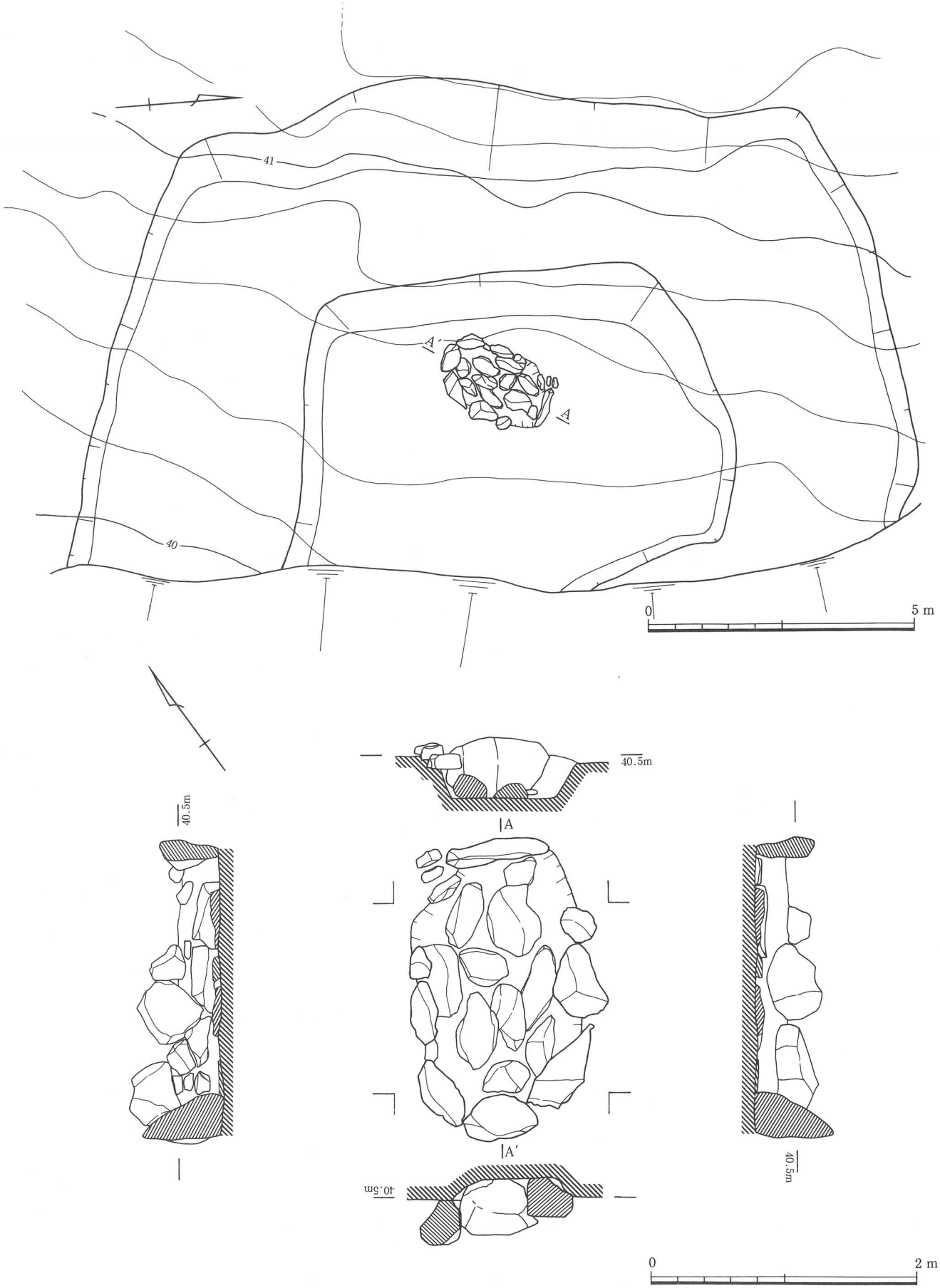


図56　D－2号墳

1．主体部（図60、図版34）

主体部は南西に開口する横穴式石室である。奥壁側から羨道方向をみると右片袖の石室となる。石室の長軸方向はN－37°－Wとなる。

石室の上部は削平を受けているだけでなく、玄室の右側壁の大半と奥壁及び左側壁の一部は高速道路の下にあたり、石室の規模や構造については不明な点が多い。

石室の掘方は残存部で幅2.75mを測り、石室の残存する規模は、玄室で幅1.50m、長さ3.50mを、羨道部で幅0.92m、長さ1.45mを測る。

石室を構成する石材は花崗岩とみられる自然石を使用している。石室の右側壁側では、幅1.25m、高さ1.18m、奥行1.20mを測る袖石が遺存している。玄室の左側壁では基底石を4石検出しており、高さ0.50m、幅1.40mの横長のものを最大とする石材で構成されている。

玄門に框石を2石配し、羨道床面は玄室床面より約0.25m高くなる。

玄室床面には、直径3～20㎝程度の小礫が部分的に敷かれている。羨道部の床面では敷石はみられなかった。

2．遺物の出土状況（図版35）

この古墳に伴う遺物は石室内より出土している。石室の上部は大きく削平を受け、石室内には撹乱された埋土が厚く堆積する。遺物はおもに玄室床面付近の堆積土より出土し、敷石の残存状況から判断すると、原位置を保っているものはないと考えられる。

3．遺物

土器（図59、図版57～59）

須恵器は杯蓋が2点、杯身が2点、高杯蓋が1点、高杯が5点、長頸壺蓋が1点、広口壺が1点、台付壺が1点、提瓶が1点出土している。83は長頸壺の蓋である。やや高いかえりをもち、天井部中央に上面のくぼむつまみが付く。

84は高杯の蓋である。天井部と口縁部境には形骸化した稜がわずかにみられる。口縁端部内面には、わずかに沈線を巡らし、天井部中央に上面のくぼむつまみが付く。

85・86は杯蓋である。天井部と口縁部との境の稜はなくなり、なだらかにおちる。

87・88は杯身である。87の体部はやや直線的に外傾し、口縁端部は丸くおさめる。88はたちあがりが内傾し、やや高い。底体部はやや深く丸味をもつ。

89～93は高杯である。89・90は口縁部が外傾気味に真っすぐにのびる杯部をもつ。杯部下半に凹線を加えて段を2段作り出し、その段に櫛描列点文を巡らせている。91・92は脚部のみである。それぞれ長方形の3方向スカシを2段穿っていたと思われる。93はたちあがりが内傾し、やや高い杯部をもち、基部には3方向スカシを千鳥に穿つ。84の蓋と組み合せることができる。

94は瓶である。やや肩の張る球形の体部と大きく開く漏斗状の口頸部をもつ。体部は2条の

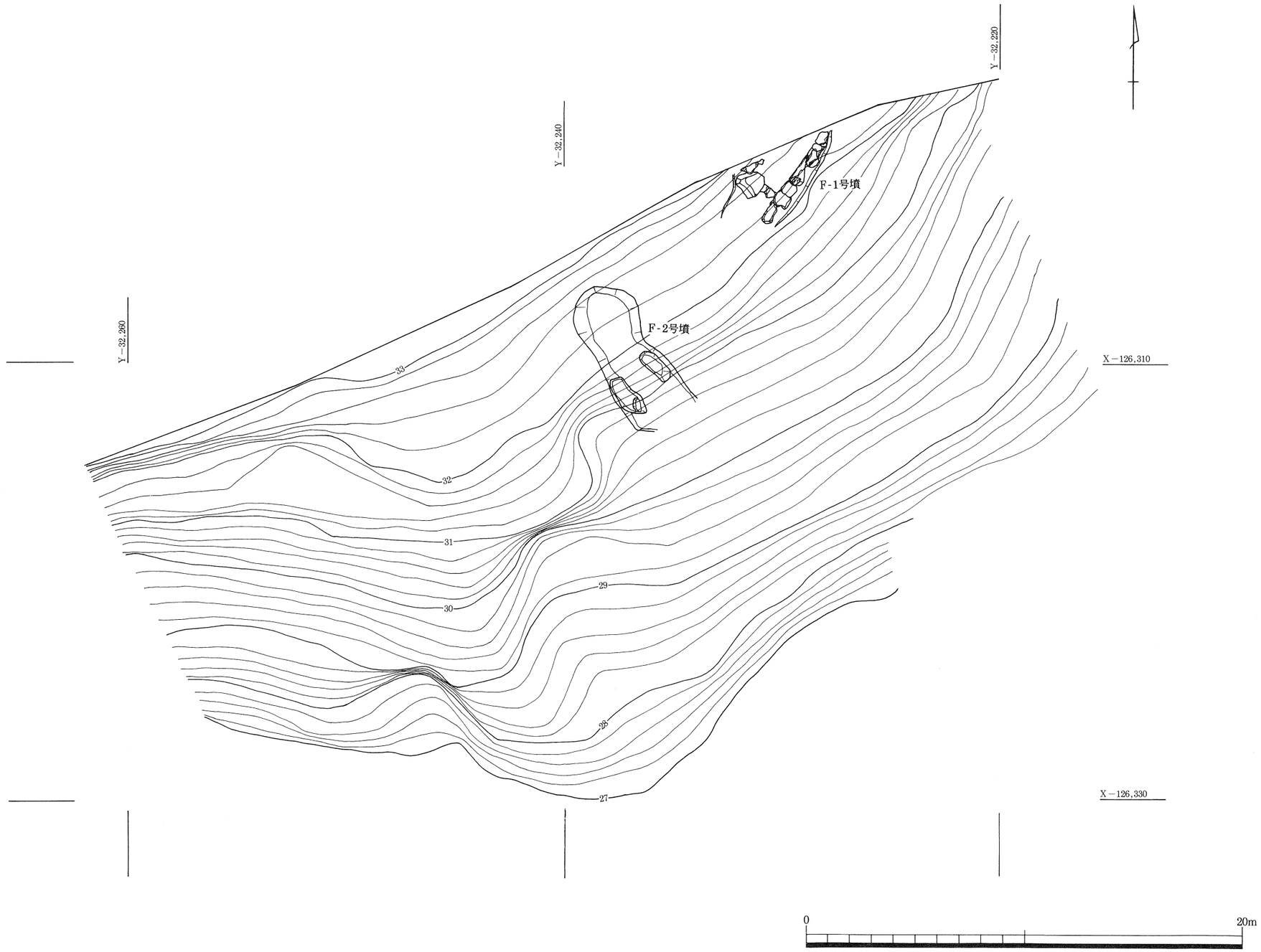


図57　F調査地区の調査前の地形測量図

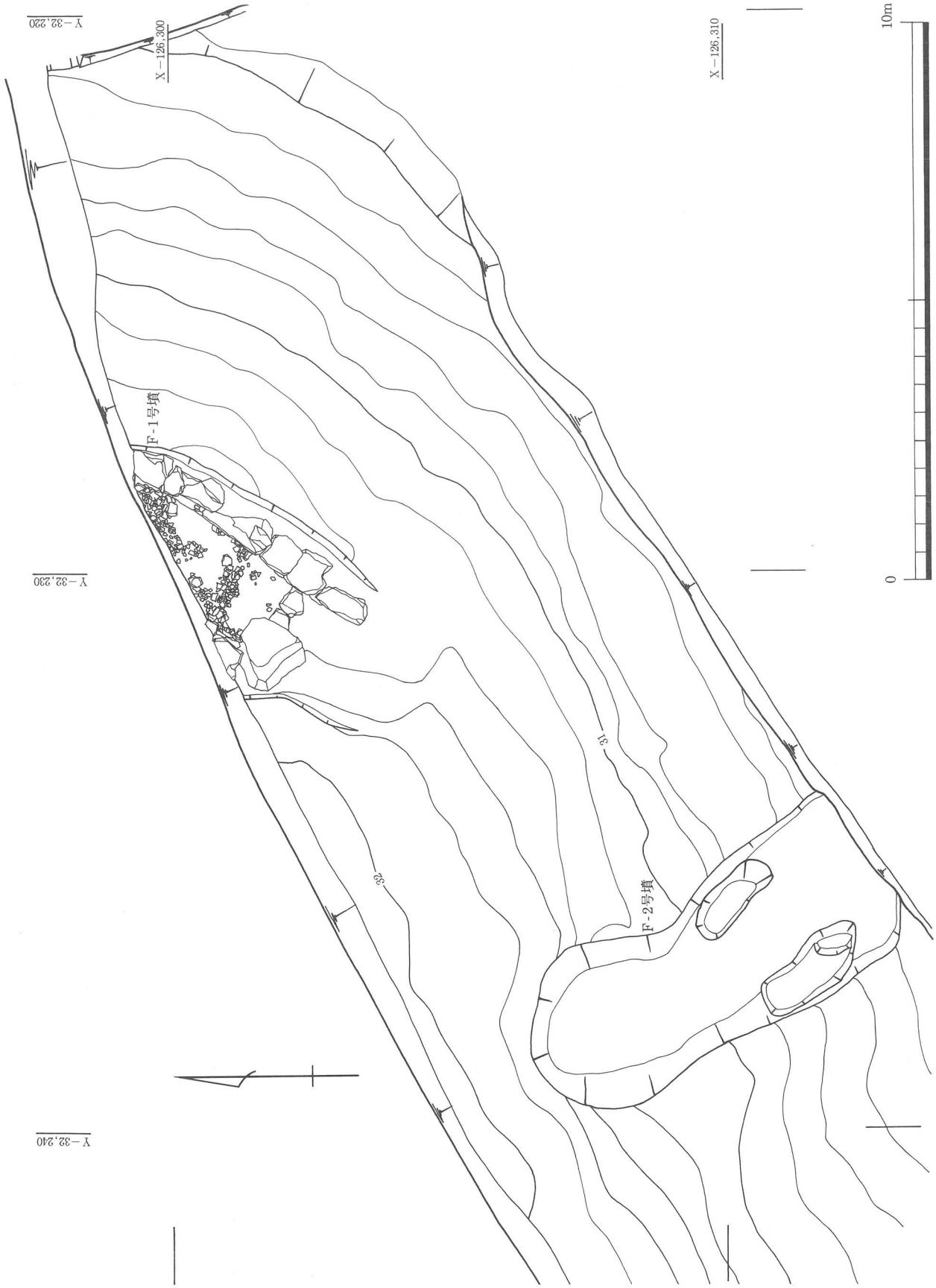


図58　F調査地区の平面図

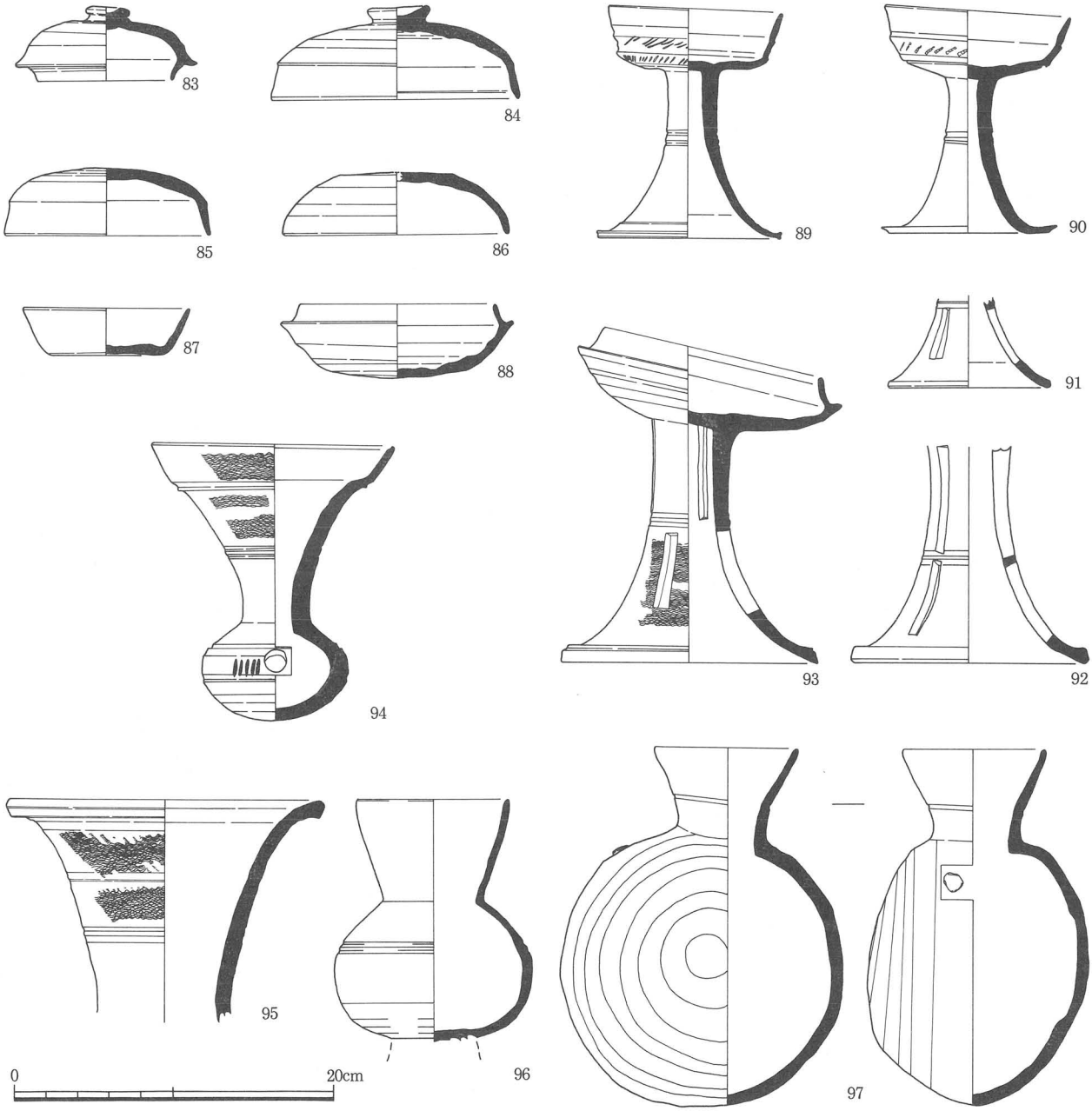


図59　F－1号墳出土の土器

沈線と櫛描列点文を施し、中央にやや上向きの円孔が穿たれている。

95は広口壺の口頸部である。口頸部は稜線と沈線で加飾され、口縁部外端面は凸面をなす。

96は台付壺で、脚部は全損している。やや肩の張る球形の体部にやや長めの口頸部をもつ。肩部と体部の境に2条の凹線を巡らす。

97は提瓶である。体部は丸味をもつ円形で、肩部には退化した把手である粘土塊を張り付ける。

84・85・93はⅠ期（ＴＫ10・ＭＴ85型式）、86・88はⅡ期（ＴＫ43型式）、87・89・90はⅣ期

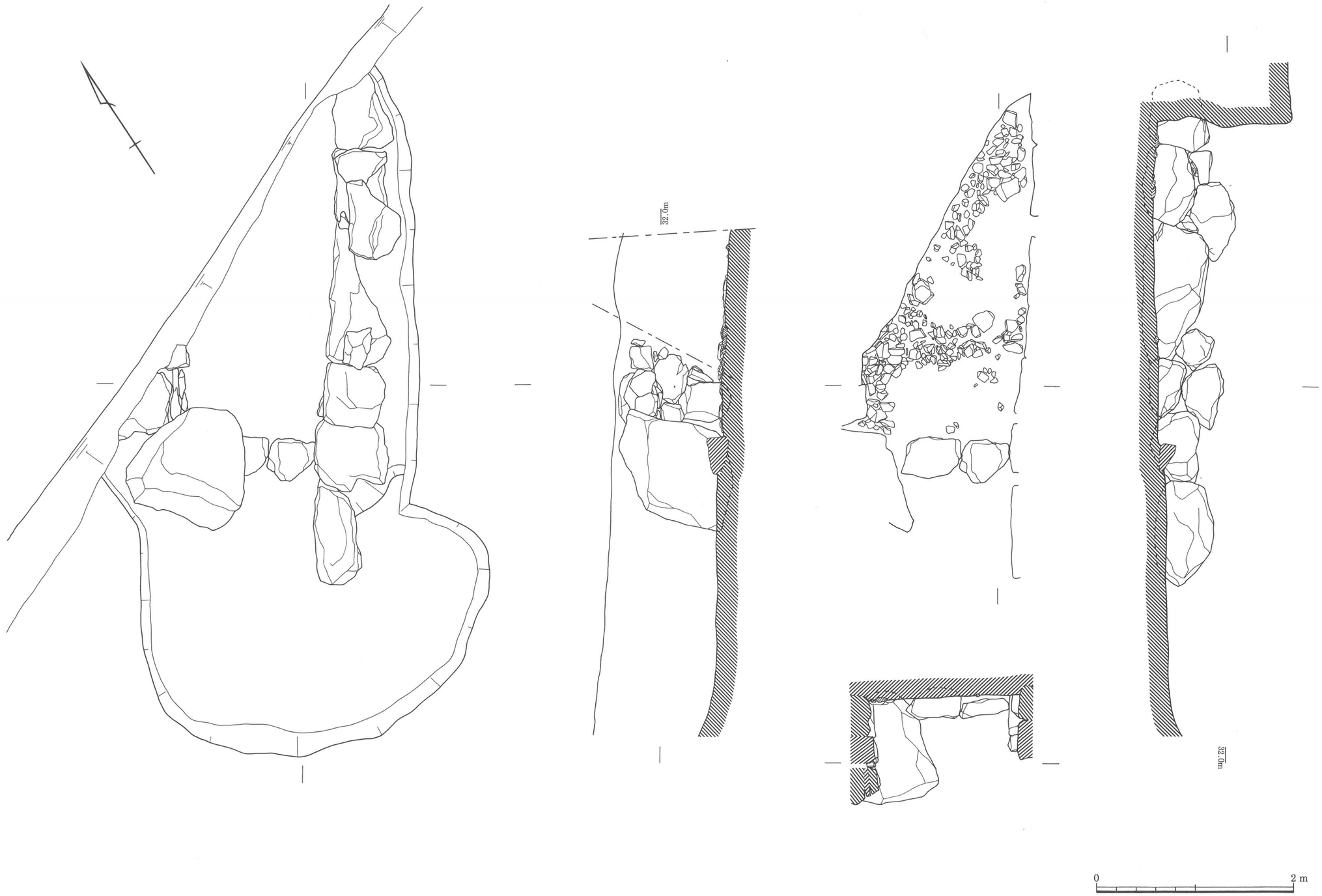


図60　Ｆ－１号墳の石室

（ＴＫ217型式）に該当する。

金属製品（図61、図版68）

金属製品は金環が３点出土している。45は長径2.3㎝、短径2.1㎝、断面径0.4㎝を測る銅芯金張で中実のものである。金薄板の遺存状態は良好で、ほぼ完全な状態である。46・47も中実で銅芯のみ遺存し、表面の加工は不明である。46は長径2.8㎝、短径2.3㎝、断面径0.4㎝、47は長径2.7㎝、短径2.3㎝、断面径0.4㎝を測る。

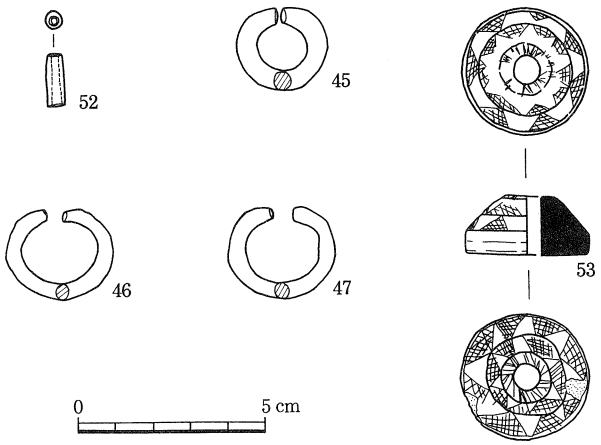


図61　Ｆ－１号墳出土の装身具と石製品

石製品（図61、図版68）

管玉と紡錘車が出土している。52は碧玉製の管玉である。灰緑色を呈し、表面は平滑に仕上げられている。長さは1.3㎝、直径５㎜、孔径２㎜を測る。

53は滑石製の紡錘車である。上端径1.2㎝、下端径3.3㎝、孔径６㎜を測る。外面には２段にわたって鋸歯文が線刻されており、裏面にも同様の鋸歯文が線刻されている。

２）Ｆ－２号墳（図58、図版36）

この古墳はＦ－１号墳の南西方約11.5ｍに位置し、検出された地山面の標高は32ｍを測る。

長さ約７ｍ、幅約３ｍの墓壙の残欠を検出している。掘方の形状も、南東部分では削平を受け不明瞭であるが、周辺では、Ｆ－１号墳以外の遺構の分布も見られず、立地条件等も考慮すれば、Ｆ－１号墳と同規模程度の石室の墓壙であった可能性が高いと考えられる。

第６節　Ｇ尾根の調査（Ｇ調査地区）

Ｇ尾根では、２基の古墳を検出している。（図64、図版５・38）

１）Ｇ－１号墳

この古墳は南に延びる尾根線上の端部に立地する。推定される石室床面の標高は38.7ｍを測る。墳丘の盛土は完全に削平を受け、主体部もその大半が失われている。

１．主体部（図65、図版39）

主体部は南東に開口する横穴式石室で、石室の長軸方向はＮ－16°－Ｗになる。

石室はそのほとんどが削平を受け、奥壁の２段目までと、両側壁の一部のみ遺存しており、正確な規模や構造は不明である。石室の掘方は、残存する長さが約5.40ｍ、残存する幅は約3.20ｍを測る。

石室の残存する規模は、奥壁付近で幅約1.50ｍを測る。

石室を構成する石材は花崗岩とみられる自然石を使用している。奥壁は高さ0.90m、幅1.60m、奥行0.50mの石材１石を基底石とする。上段には高さ0.40m、幅0.60m、奥行0.60mの石材が遺存し、奥壁の残存する高さは1.30mを測る。両側壁の遺存状態は特に悪く、石室の中央部付近の石材は抜き取られ、奥壁周辺と入口側において部分的にしか検出できなかった。

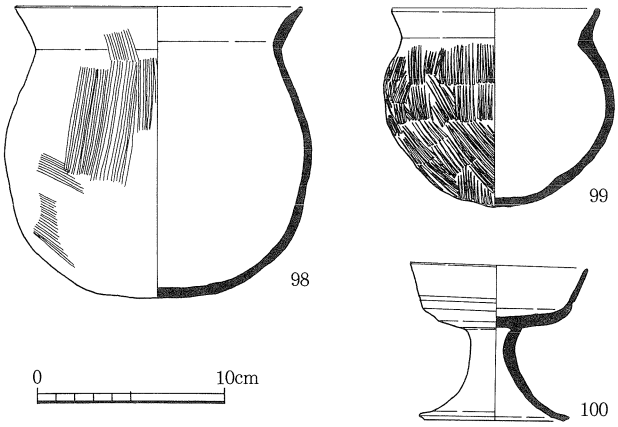


図62　Ｇ－１号墳出土の土器

奥壁から羨道方向をみて右側壁では基底石を３石検出している。奥壁付近では２段目まで遺存し、残存高は0.96mを測る。左側壁では基底石を２石検出している。奥壁と接する石材は、高さ0.80m、幅1.20m、奥行0.50mの安定した石材を使用している。

石室床面の敷石の有無については、削平が著しく不明である。床面付近の精査段階では直径３～20㎝程度の小礫が部分的にみられたが、それらが敷石の一部であるのか、両側壁を構成していた各石材間の隙間に充塡されていた石材が崩落したものであるかの識別は困難であった。

２．遺物の出土状況

この古墳に伴う遺物はおもに石室内より出土している。奥壁近くの床面付近の堆積土から集中して遺物が出土している。

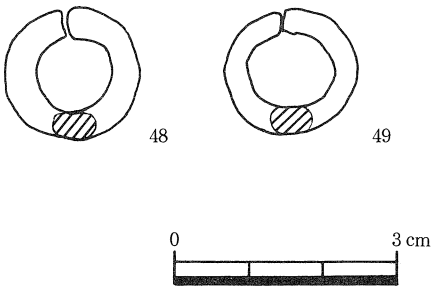


図63　Ｇ－２号墳出土の装身具

３．遺物

土器（図62、図版59）

須恵器の高杯が１点、土師器の甕が２点出土している。98・99は土師器の甕で、球形に近い体部に短く外反する口頸部をもつ。

100は須恵器の無蓋短脚高杯である。単純な椀形の杯部に漏斗状に開く脚部をもつ。外端面は内傾する凹面をなす。100はⅣ期（ＴＫ217型式）に該当する。

２）Ｇ－２号墳　（図63・66、図版40・68）

この古墳はＧ－１号墳の北東方約11mに位置する。石室床面の標高は40.30mを測る。

墳丘その他は削平を受け、遺存状態は悪いが、側壁の一部と敷石を検出している。奥壁及び両側壁の基底石の痕跡は判然としないが、側壁の遺存状況や石材の用い方、地形から考えると、ほぼ南に開口する横穴式石室の可能性が強い。掘方の形状は隅丸の長方形で、残存する長さは

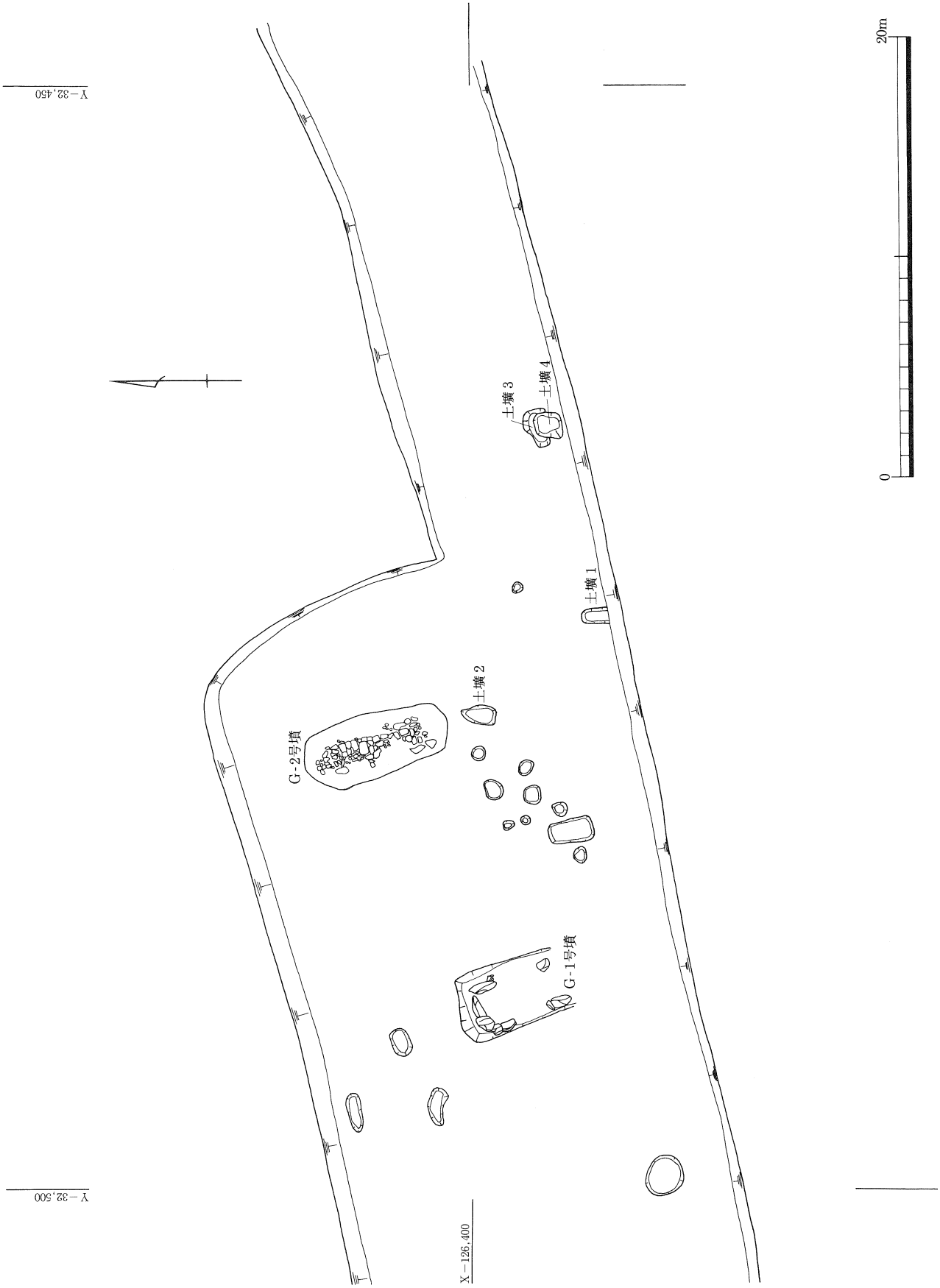


図64　G調査地区の平面図

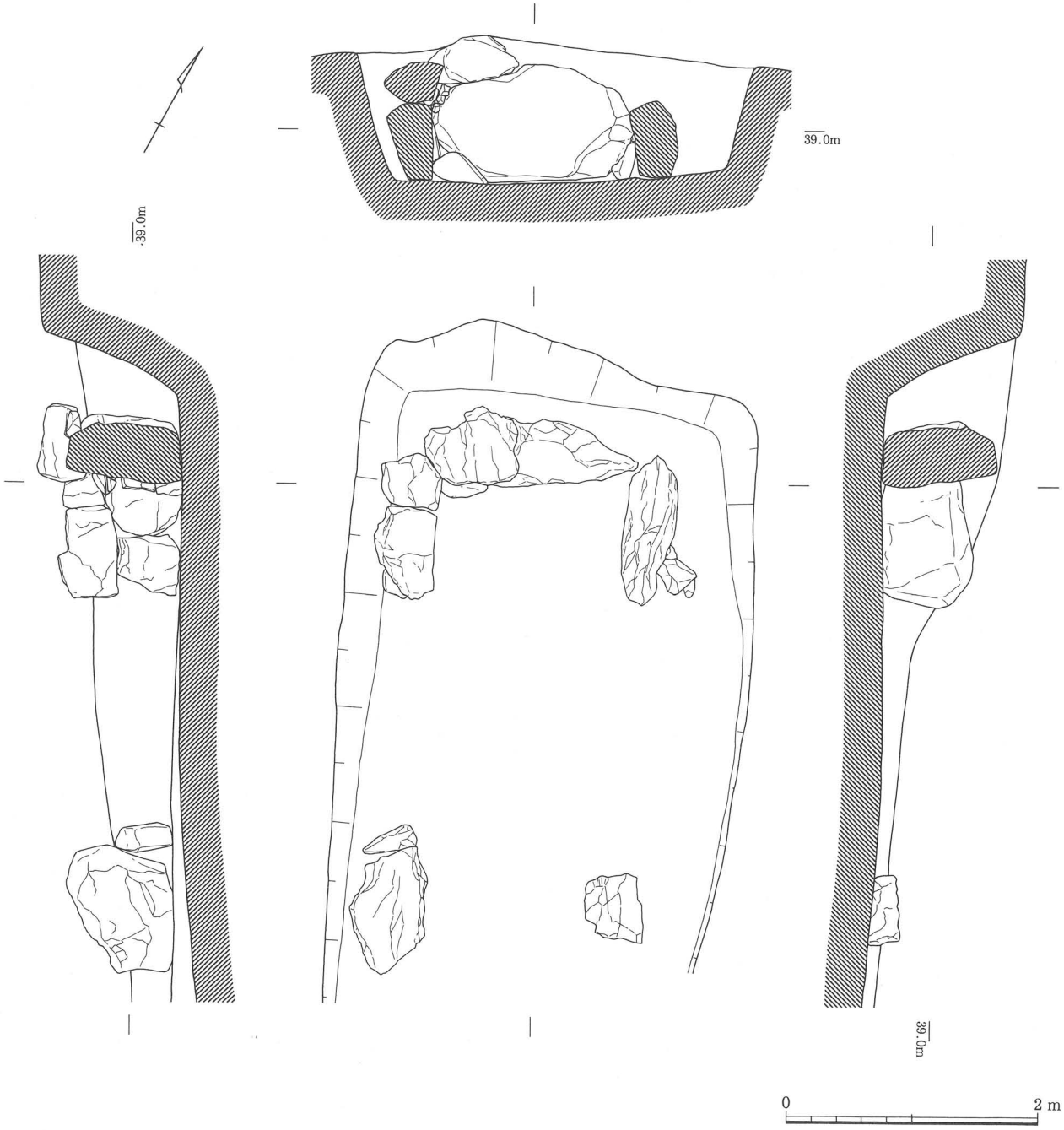


図65　G－1号墳の石室

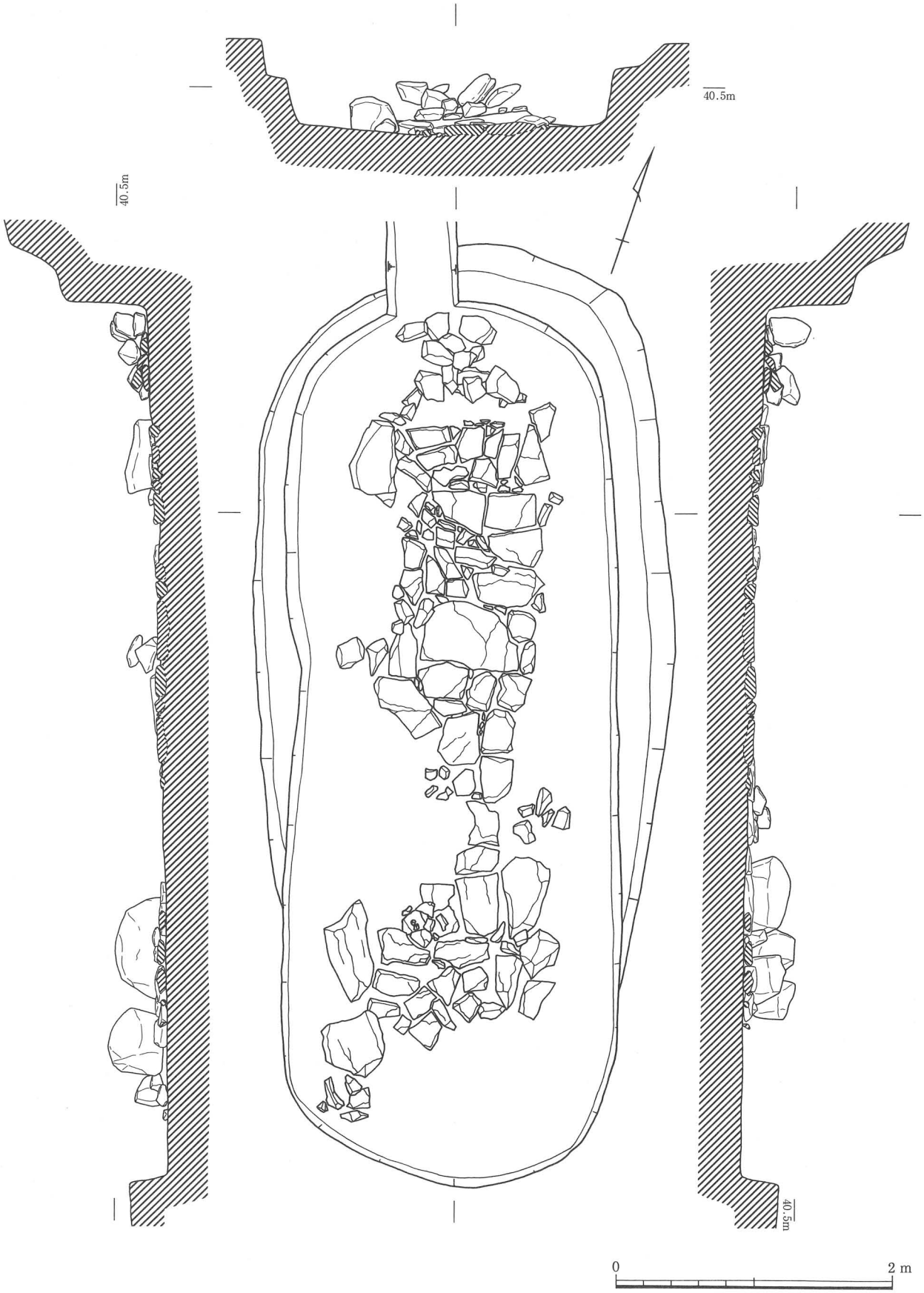


図66　G－2号墳の石室

6.80m、残存する最大幅は３ｍ、深さは最深部で１ｍを測る。

側壁は石室の中央部付近の石材が完全に抜き取られ、掘方の北西隅付近と入口側において部分的に基底石が遺存している。石室の入口付近での幅は１ｍを測る。

敷石は直径約20㎝程度のやや扁平な石材を中心に構成されているが、石敷の範囲のほぼ中央部付近では直径約60㎝を最大とするやや大きめの石材を配置している。

石敷の南東部では、側壁の一部が残存しており、幅１ｍを測る。

掘方内の北側には直径約20㎝程度の礫で構成される集石がみられる。礫の検出状況から判断して、石室が破壊を受けた際に、奥壁を構成していた石材の一部が崩落したものと考えられる。

石敷の中央部付近では敷石の直上に厚さ約６㎝の炭層が堆積するが、敷石には受熱の痕跡がみられない。石室の石材は全て花崗岩とみられる自然石を使用している。

遺物は炭層から金環が２点出土している。48・49はともに中実の銅芯金張のものである。47は長径1.8㎝、短径1.7㎝、断面径0.3㎝、48は長径1.8㎝、短径1.6㎝、断面径0.3㎝を測る。金薄板の遺存状態は良好である。

第７節　その他の遺構・遺物

その他の遺構として、土壙５基、土器棺墓１基、火葬墓１基、竪穴住居４基、掘立柱建物７棟がある。土壙４・５、土器棺墓、火葬墓、掘立柱建物１～５、竪穴住居１～４がＣ調査地区より（図30）、掘立柱建物建物６・７がＤ２調査地区より（図82）、土壙１～４がＧ調査地区より（図64）それぞれ検出している。

１）土壙１（図67・68、図版41・59・60）

平面形は楕円形で、長径約1.30m以上、短径約0.54m、深さは約0.30mを測る。埋土は単層で、暗赤褐色砂礫土である。底面に直径約10～25㎝の礫が４個張り付いている。

遺物は埋土中より、土師器の甕が２個と、土壙底面において須恵器の杯身が２個伏せた状態で出土しており、そのうち１つは礫の上に伏せている。

101・102は須恵器の杯身である。口径は９㎝程度の小型のものである。

103・104は土師器の甕である。103は肩の張らない長胴形を呈する体部に短く外反する口頸部がつく。口縁端部は上方にわずかに肥厚し丸くおさめる。104はやや縦長の球形を呈する体部にくの字型に屈曲する口頸部がつく。体部の中位に２個１対の把手を付ける。この土壙の時期は出土した土器から推定すれば７世紀中頃と考えられる。

２）土壙２（図67、図版41）

平面形は不整な楕円形で、長径約1.30m、短径約0.80m、深さは約0.40mを測る。埋土は単

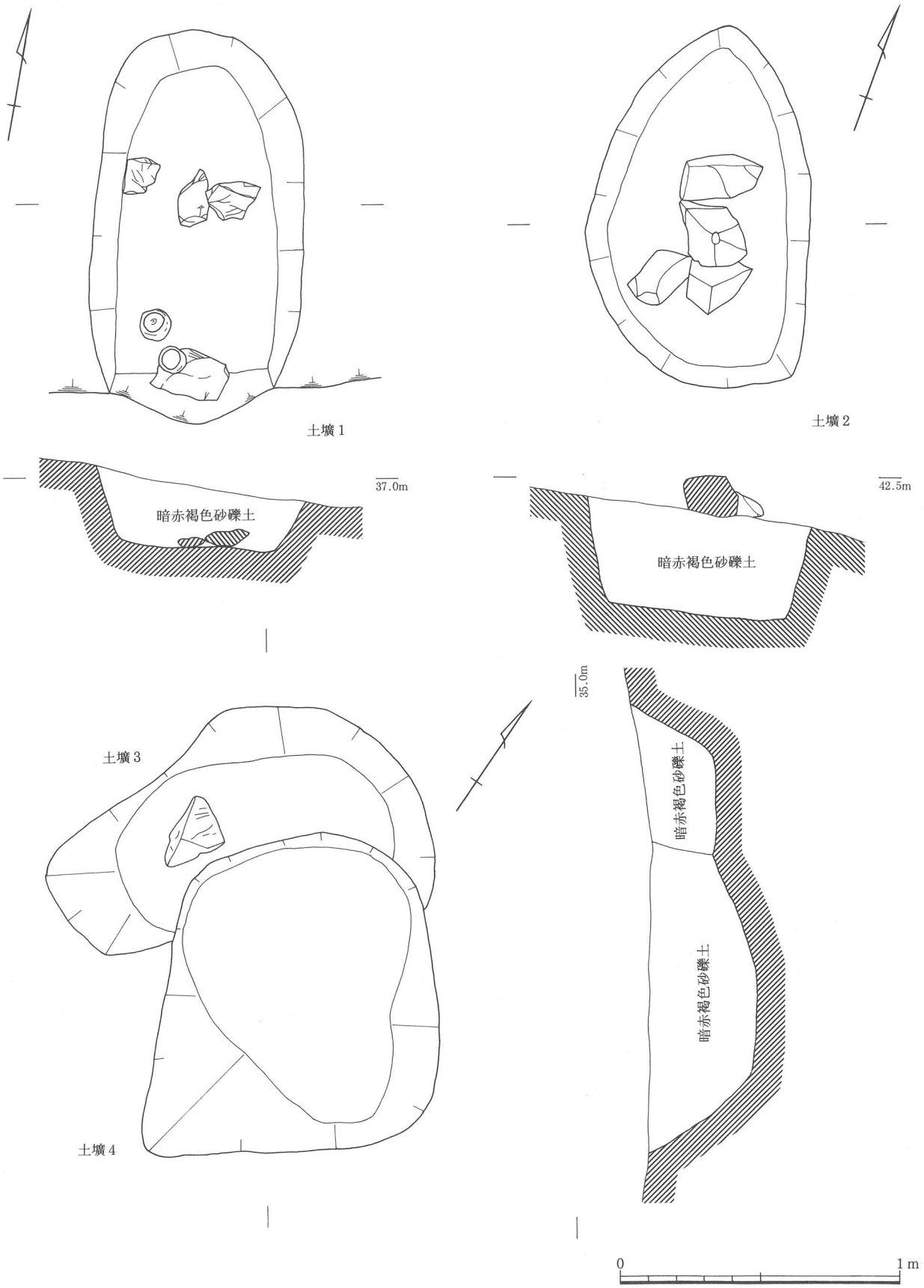

土壙1
37.0m
暗赤褐色砂礫土
土壙2
42.5m
暗赤褐色砂礫土
35.0m
暗赤褐色砂礫土
暗赤褐色砂礫土
土壙3
土壙4
0
1m

図67　土壙1・2・3・4

図68　土壙１出土の土器

層で、暗赤褐色砂礫土である。埋土上面の中央部には直径約20～30㎝の礫が４個配されている。埋土や礫を伴う特徴から判断して、土壙１とほぼ同時期のものである可能性が高い。

３）土壙３（図67、図版41）

平面形は不整な楕円形で、長径約1.30mを測り、東側の掘方を隣接する土壙４によって削られている。埋土は単層で、暗赤褐色砂礫土である。底面に直径約26㎝の礫が１個遺存している。埋土や礫を伴う特徴からみて、土壙１・２とほぼ同時期のものと推定される。

４）土壙４（図67、図版41）

平面形は方形で、長径約1.20m、短径約１m、深さは約0.40mを測る。埋土は単層の暗赤褐色砂礫土である。遺物は出土していない。

５）土壙５（図69、図版42）

平面形は不整な楕円形で、長径約２m、短径約1.40m、深さは約0.14mを測る。

埋土は下位に灰黄褐色砂質土、上位ににぶい黄橙色砂質土がみられる。上層の検出面には直径約４～30㎝の礫が多数見られる。埋土中からは遺物が出土しなかった為、この土壙には明確な時期を与えられない。

６）土器棺墓（図70・71、図版42・60）

平面形は不整な楕円形で、長径約1.60m、短径約0.90m、深さは約0.40mを測る。２個体の土師器の甕の口縁を合わせて寝かせている。105・106は肩の張らない長胴形の体部に屈曲する口頸部がつく。出土した土師器から判断して、この遺構の時期は７世前半頃と考えられる。

７）火葬墓（図71、図版42・60）

平面形は円形で、直径約0.6mを測る。土壙中央部に、口縁部を打ち欠いた須恵器の双耳壺を埋納する。壺の内部には火葬後、細片化した骨片がおさめられていた。

双耳壺の107は、やや肩の張る肩部に断面形が半円に近い穿孔されたつまみを２個付ける。出土した双耳壺から判断して、この遺構の時期は９世紀中頃と考えられる。

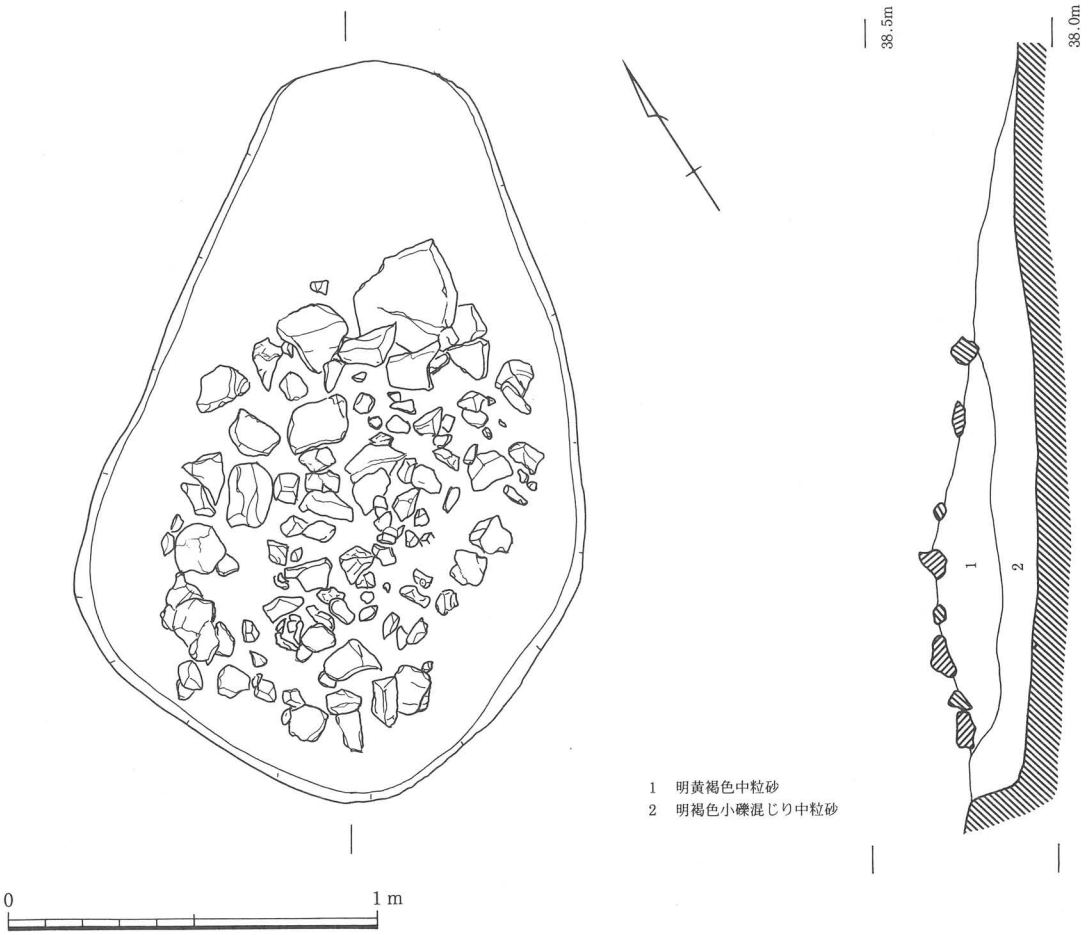


図69　土壙５

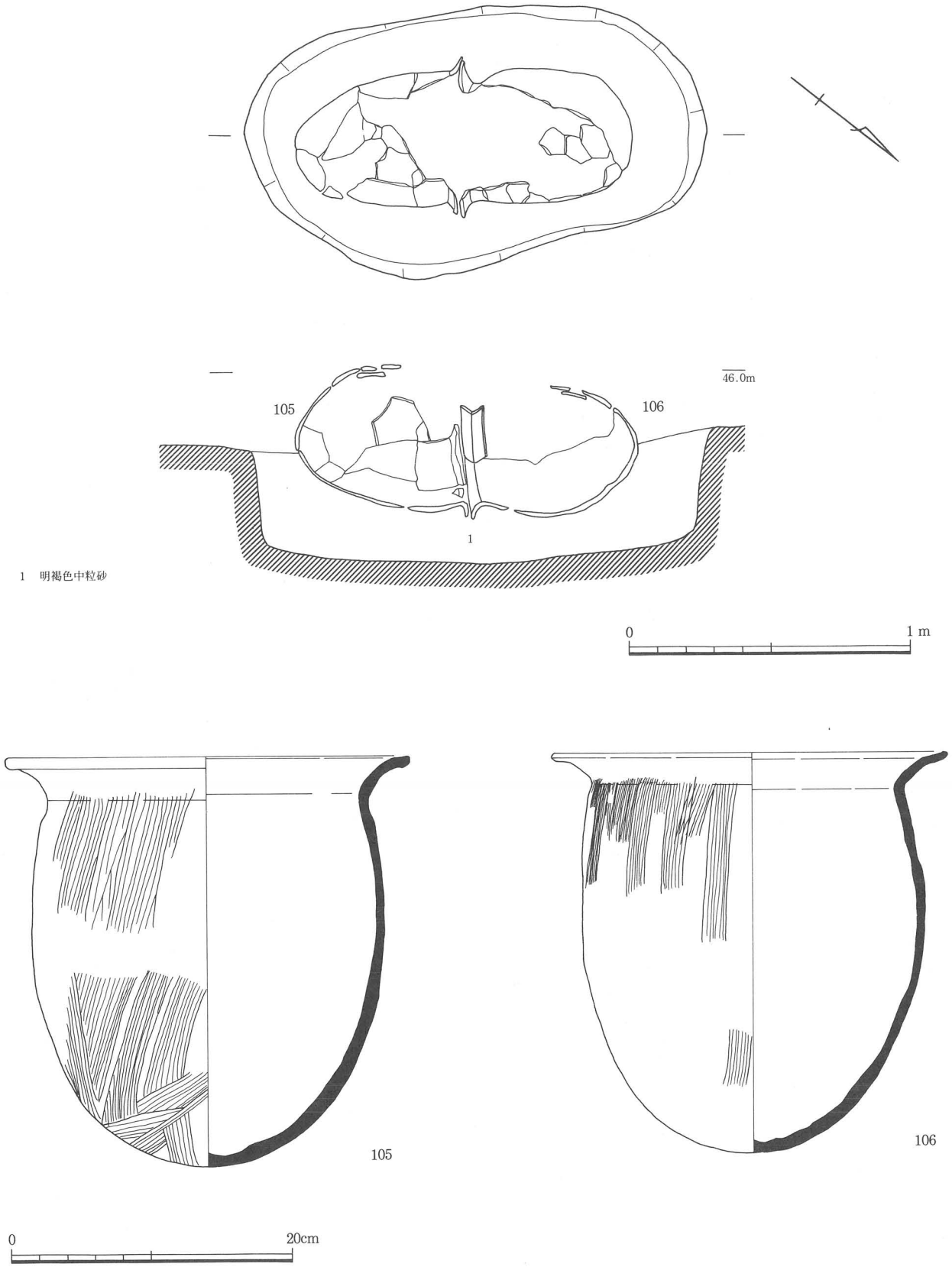


図70　土器棺墓

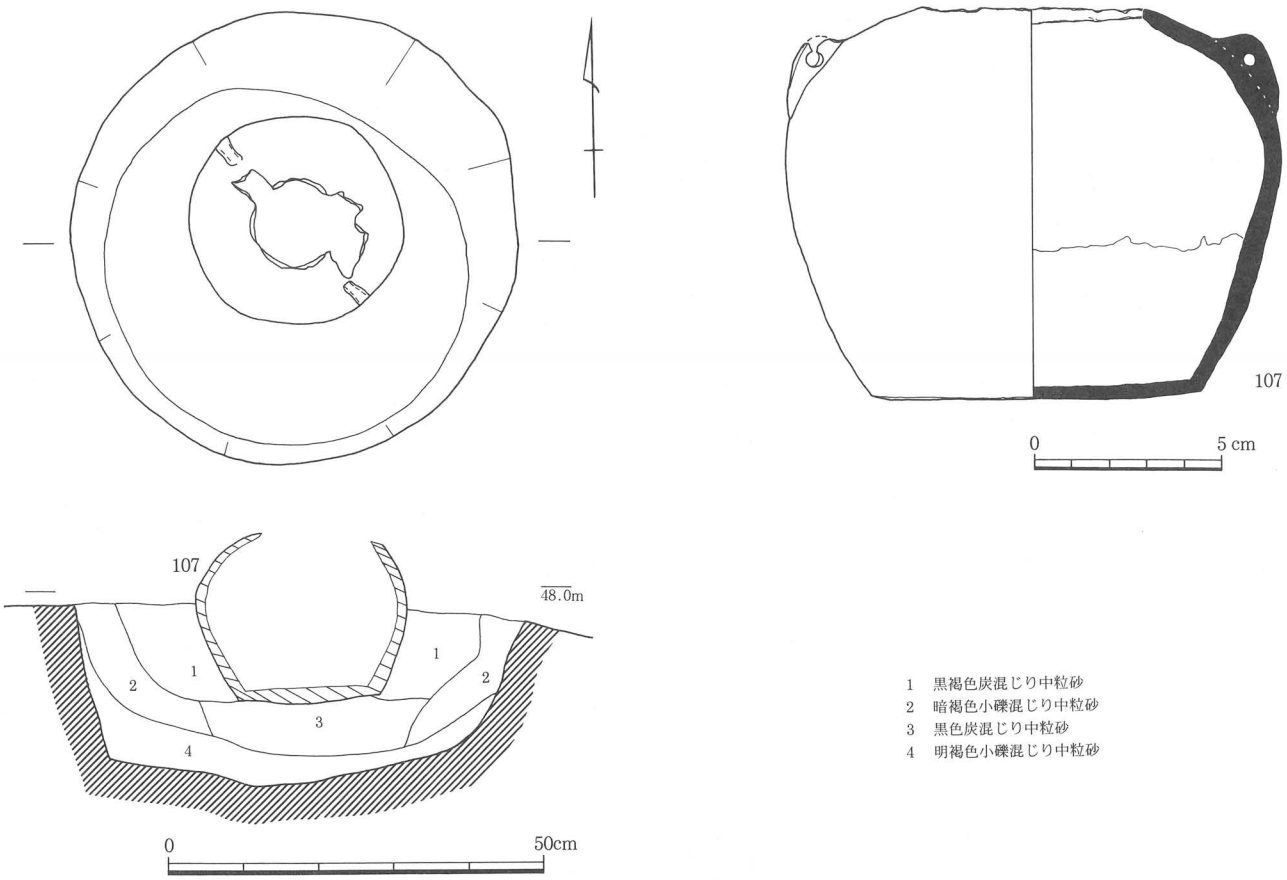


図71　火葬墓

8）竪穴住居１（図72・73、図版43・60・68）

平面形は方形で、長径約２ｍ、短径約1.90ｍを測る。床面周縁部の西隅において壁溝の痕跡らしきものがみられるが、全周していたのかは不明である。床面直上で炭化材が検出され火災にあっている。竈は袖部と焚口の一部が遺存しており、焚口内では、支脚用と考えられる礫が出土した。炭化材を除去後に床面中央付近で主柱穴を４ヶ所検出している。遺物は須恵器と土師器、砥石が出土した。108は須恵器の杯身である。竈の右袖付近から出土している。たちあがりは短く内傾し、端部は丸くおさめている。

109は土師器の甕である。竈の左袖付近から出土している。肩の張らない球形の体部に緩やかに屈曲してのびるやや長めの口頸部がつく。

54は砂岩系の砥石である。床面の北西部で出土している。本来は直方体であったと考えられるが、上端面と下端面は欠損している。残存する長さは14.4㎝、幅は8.8㎝を測る。平滑で中央部が凹んでいる。４面全てに使用痕がみられ、特に左側面と裏面には１～２㎜の筋状の削り込みが顕著で、鋭利なものを研ぐのに使用していたと考えられる。

出土した土器から判断して、この住居の時期は７世紀初頭頃であると考えられる。

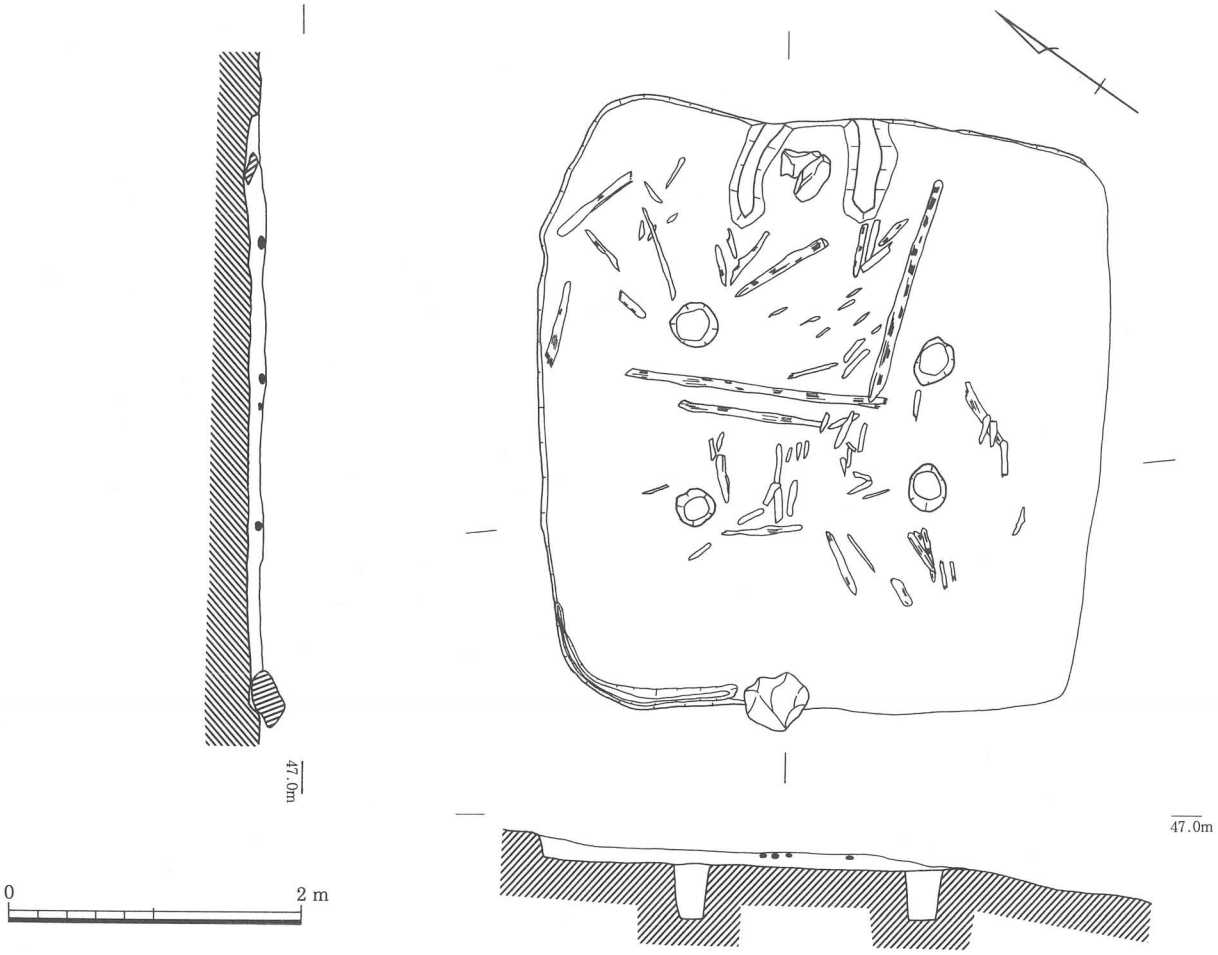


図72　竪穴住居１

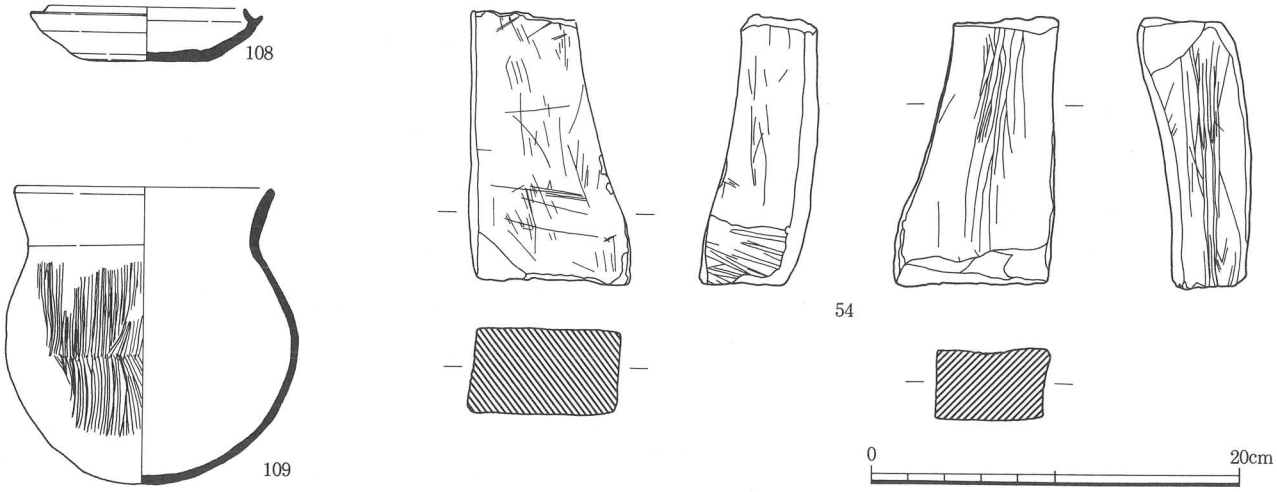


図73　竪穴住居１出土の遺物

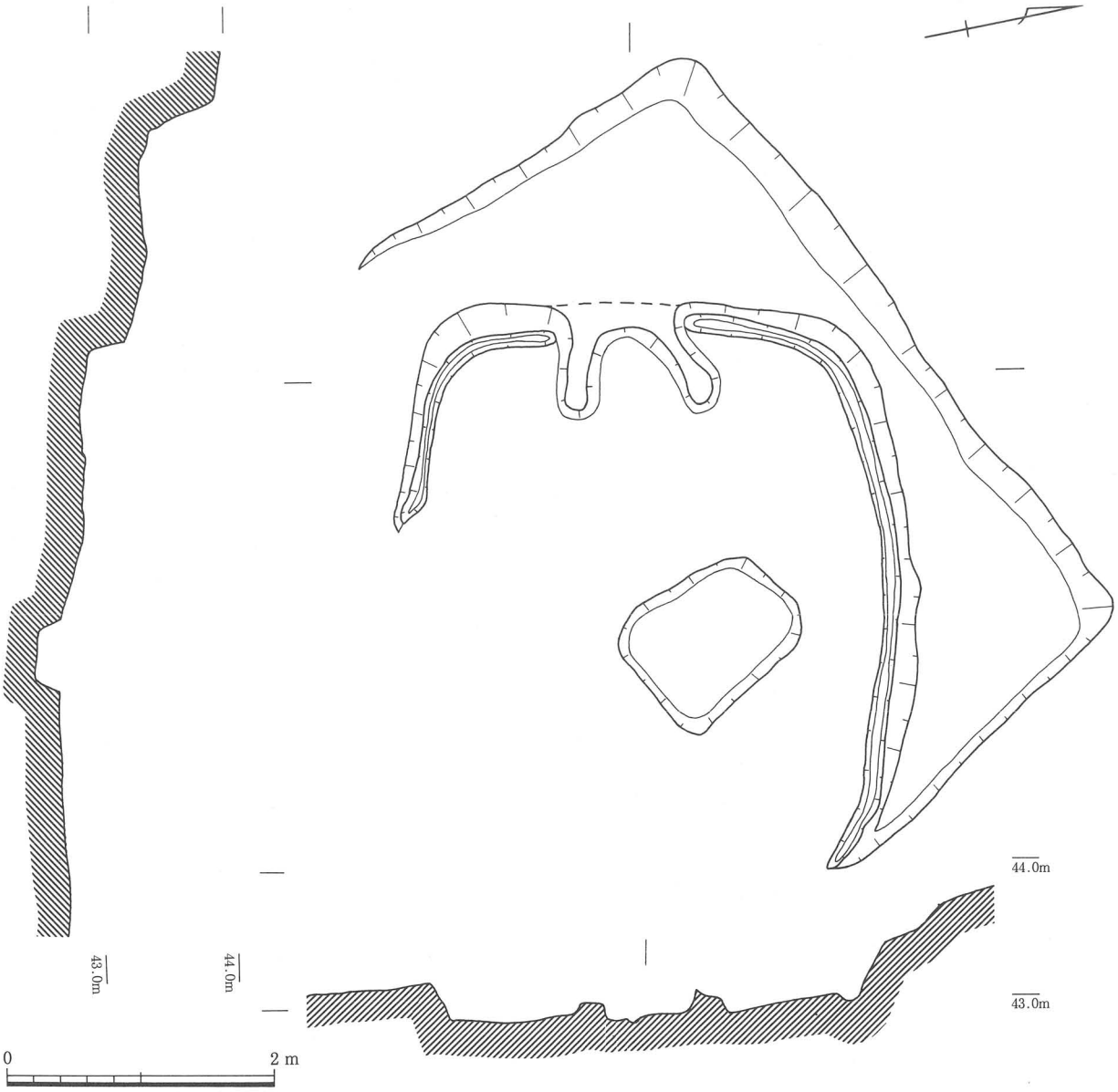


図74　竪穴住居 2

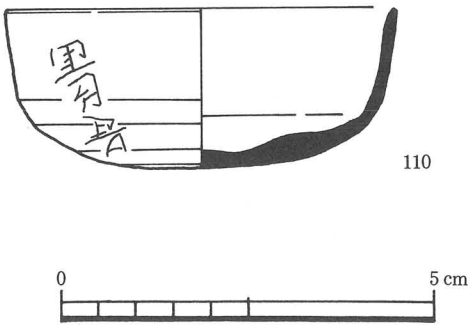


図75　竪穴住居 2 出土の土器

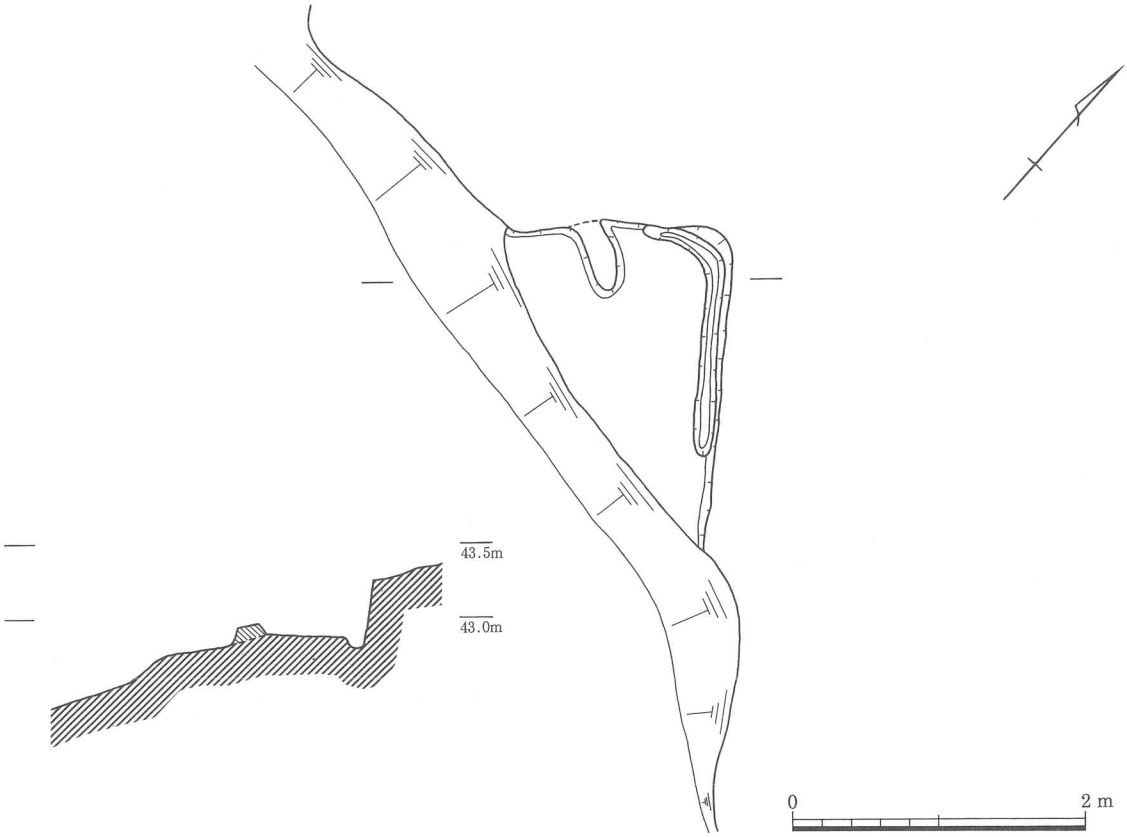


図76　竪穴住居３

９）竪穴住居２（図74・75、図版44・60）

竪穴住居１の南方約16mに位置する。平面形は方形であったと考えられるが、住居の東半部は完全に削平を受けている。残存する長さは約２ｍ、幅は1.95mを測る。床面周縁部には壁溝と考えられる幅0.10mの溝を検出している。

住居の北東隅付近において、竈の袖と焚口の一部分が遺存していた。

床面は、削平をうけ、柱穴は検出できなかったが、床面中央部やや北よりで、長径0.62m、短径0.50m、深さ0.20mを測る方形の土坑１基を検出している。

住居の北側には長さ1.60m、幅２ｍの、深さ0.37mの掘方がある。斜面地に住居を設定するために、先行してテラス状に掘削を行なった痕跡と考えられる。遺物は残存する床面の中央付近で須恵器が１点出土している。

110は須恵器の杯身である。体部外面には縦書きの線刻文字が３文字みられ。最初の文字以外は不明瞭であるが、「里司君」と読める可能性がある。須恵器から判断すれば、この住居の時期は７世紀中頃であると推定される。

10）竪穴住居３（図76、図版44）

竪穴住居２の西方約12mに位置する。平面形は方形であったと考えられる。

住居の大半が削平を受けており、竈の右袖部と壁溝の一部分のみ検出している。残存する長さは1.10m、幅は0.75mを測る。遺物は出土していないので、この住居の時期を明確にできないが、竈や壁溝などが見られる特徴から判断して、竪穴住居２とほぼ同時期であると考えられる。

11）竪穴住居４（図77、図版44）

平面形は方形であったと考えられるが、住居の大半が削平を受け、不明な点が多い。

床面の北西辺で、主柱と思われる柱穴を両隅端付近で２基検出しているが、住居の残存する範囲では竈は検出していない。遺物も出土しておらず、この住居の時期は不明である。

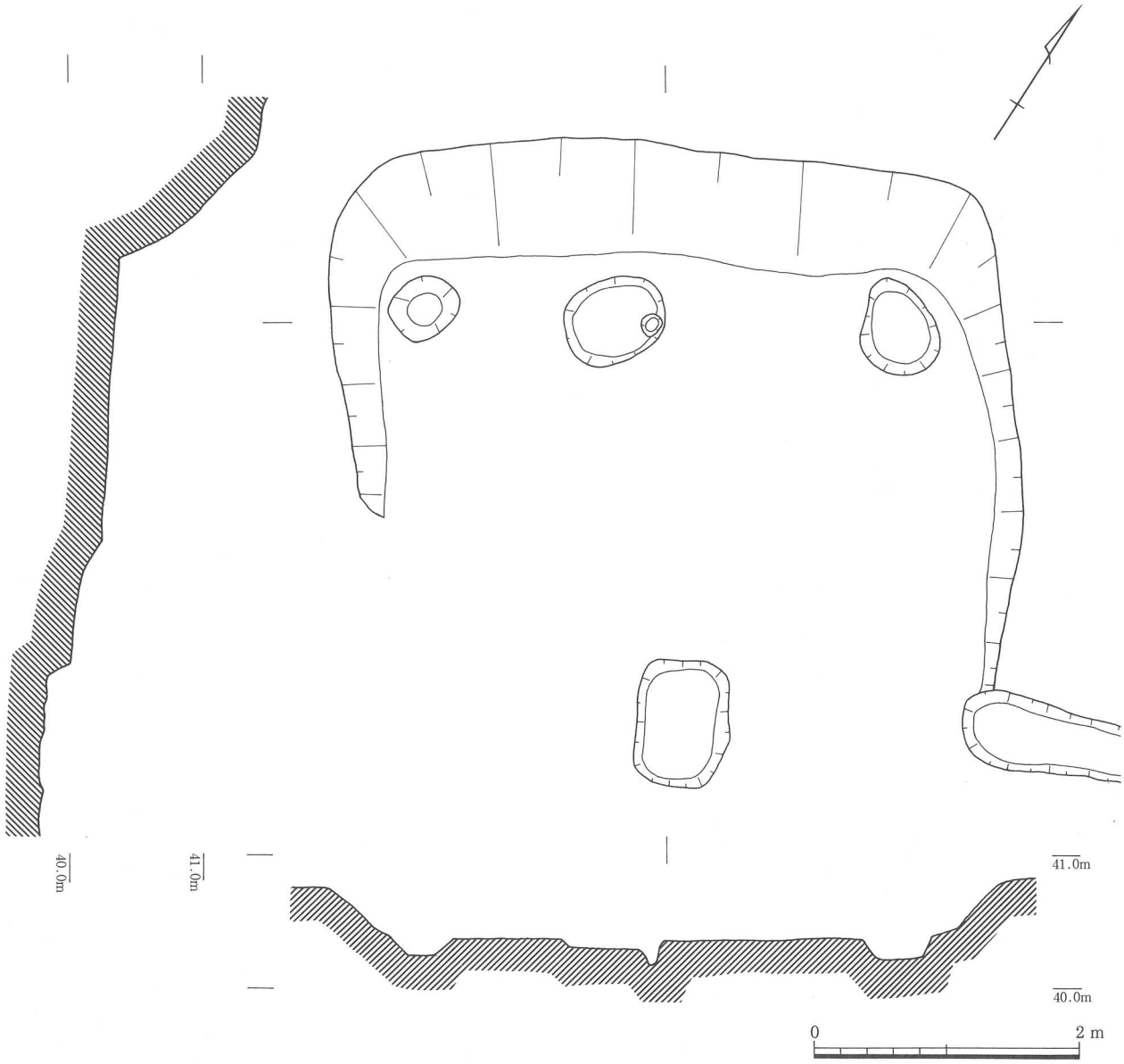


図77　竪穴住居４

12）掘立柱建物１（図78、図版45）

南北２間、東西３間の総柱建物で、方位はＮ－38°－Ｗをとる。

柱の掘方の平面形は不定形で直径は0.30～0.40ｍであるが、方形を呈していたものと思われる。柱痕は不明瞭であった。

掘方の中心で計測すると、南北方向の柱間寸法は約1.80～２ｍ、東西方向は約1.20～1.80ｍである。

各柱の掘方より遺物が出土していないため、明確な時期を与えることはできない。

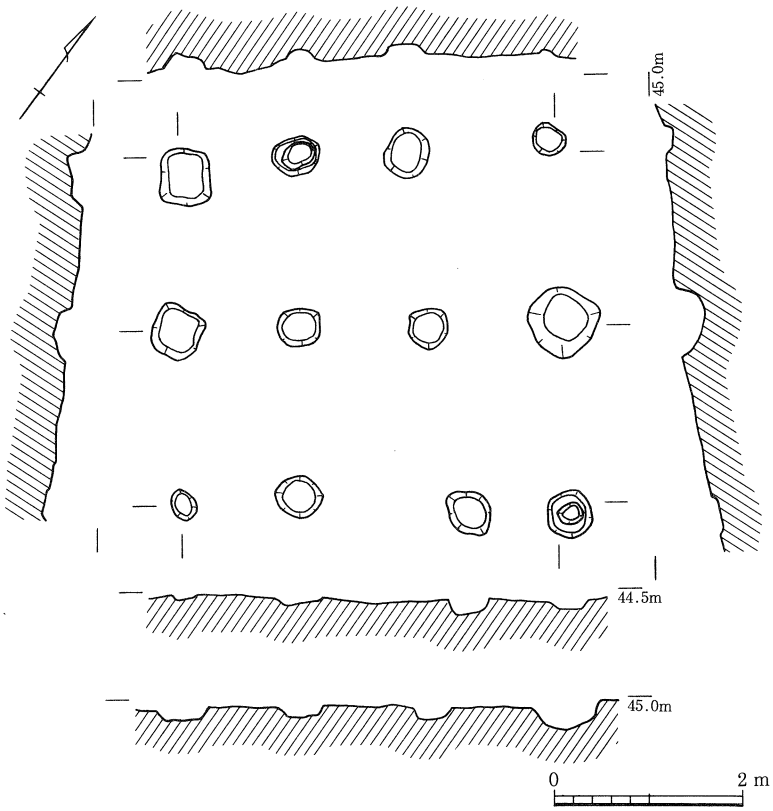


図78　掘立柱建物１

13）掘立柱建物２（図79、図版45）

掘立柱建物１の北東約11ｍに位置する。南北１間以上、東西２間以上の建物で、方位はＮ－19°－Ｗをとる。柱の掘方の平面形は円形で直径は約0.30～0.40ｍである。

柱間寸法は不規則で、1.20～２ｍを測る。柱痕跡は不明瞭であった。各柱穴より遺物が出土していないため、時期は不明である。

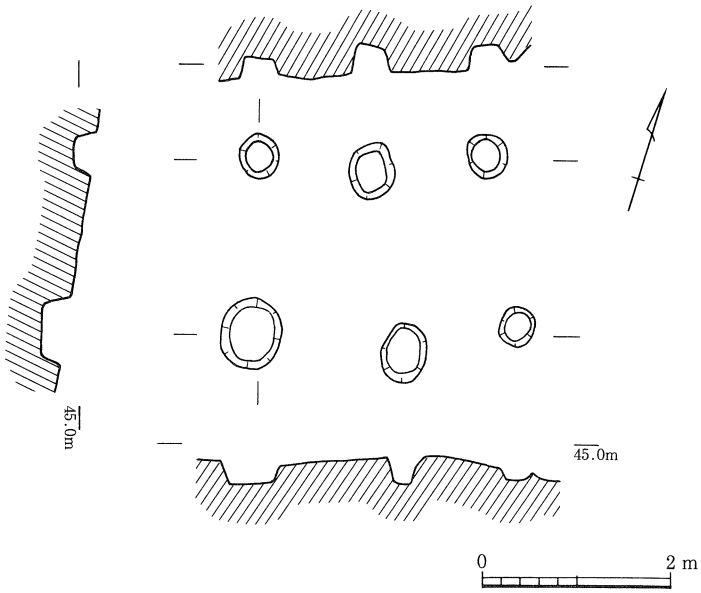


図79　掘立柱建物２

14）掘立柱建物３（図80、図版45）

掘立柱建物２の西約６ｍに位置する。南北２間、東西２間の総柱建物で、方位はＮ－32°－Ｗをとる。柱の掘方の平面形は隅丸の方形で直径は0.20～0.30ｍである。

南北方向の柱間寸法は約２～2.80ｍ、東西方向も約２～2.80ｍである。各柱穴より遺物が出土していないため、明確な時期を与えることはできない。

15）掘立柱建物４（図81、図版45）

掘立柱建物２の南約９mに位置する。南北２間、東西２間の建物で、方位はN－30°－Wをとる。

柱の掘方の平面形は円形で直径は約0.20～0.30mである。

南北方向の柱間寸法は約1.0～1.80m、東西方向は約1.40～1.80mである。遺物は出土していないため時期は不明である。

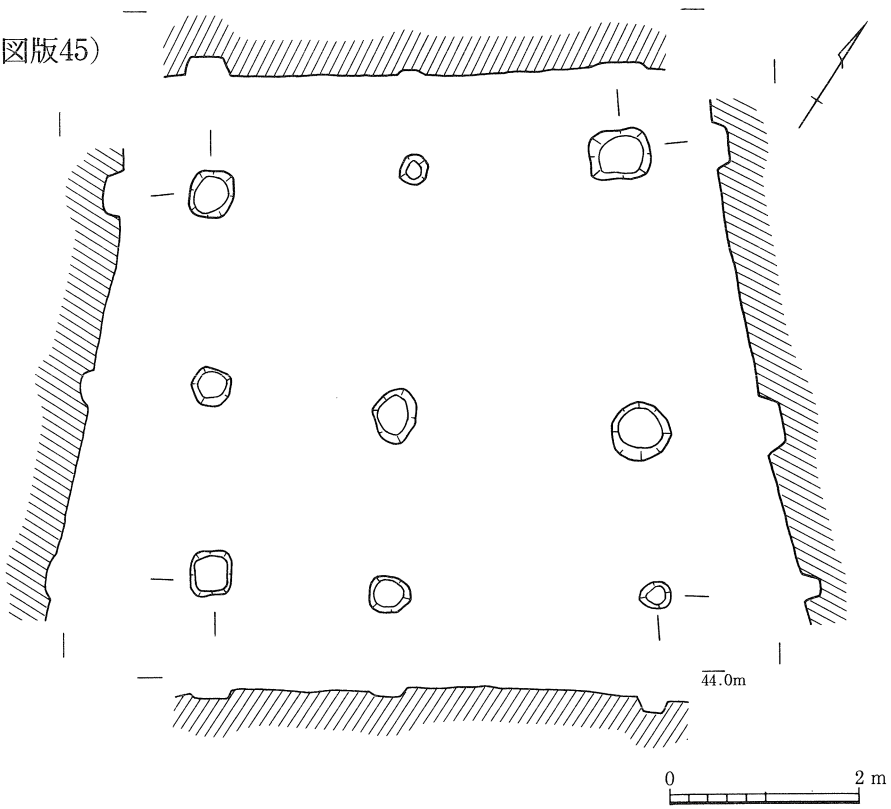


図80　掘立柱建物３

16）掘立柱建物５（図83、図版45）

掘立柱建物３の東約６mに位置する。南北２間、東西２間の建物で、方位はN－30°－Wをとる。柱の掘方の平面形は円形で直径は0.20～0.30mである。南北方向の柱間寸法は約1.20～1.80m、東西方向は約1.40～1.80mである。掘立柱建物４とほぼ同規模の建物である。遺物は出土していないため時期は不明である。

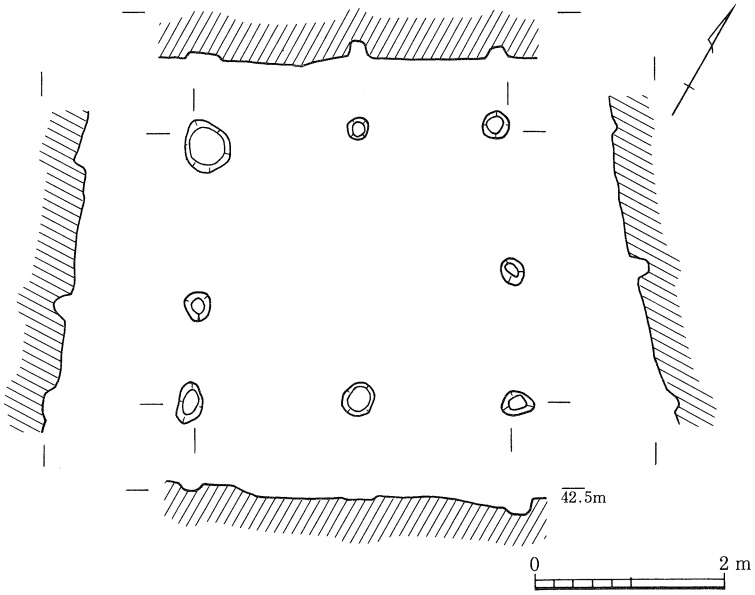


図81　掘立柱建物４

17）掘立柱建物６（図84、図版46）

南北１間以上、東西２間以上の建物で、方位はN－25°－Eをとる。

柱の掘方の平面形は隅丸方形で直径は約0.40～0.60mである。北西隅の掘方の平面形は楕円形である。

検出時には柱痕跡は不明瞭であったが、掘削後には底面にその痕跡が明瞭にみとめられた。

南北方向の柱間寸法は2.10m、東西方向は約1.40mである。遺物は出土していない。

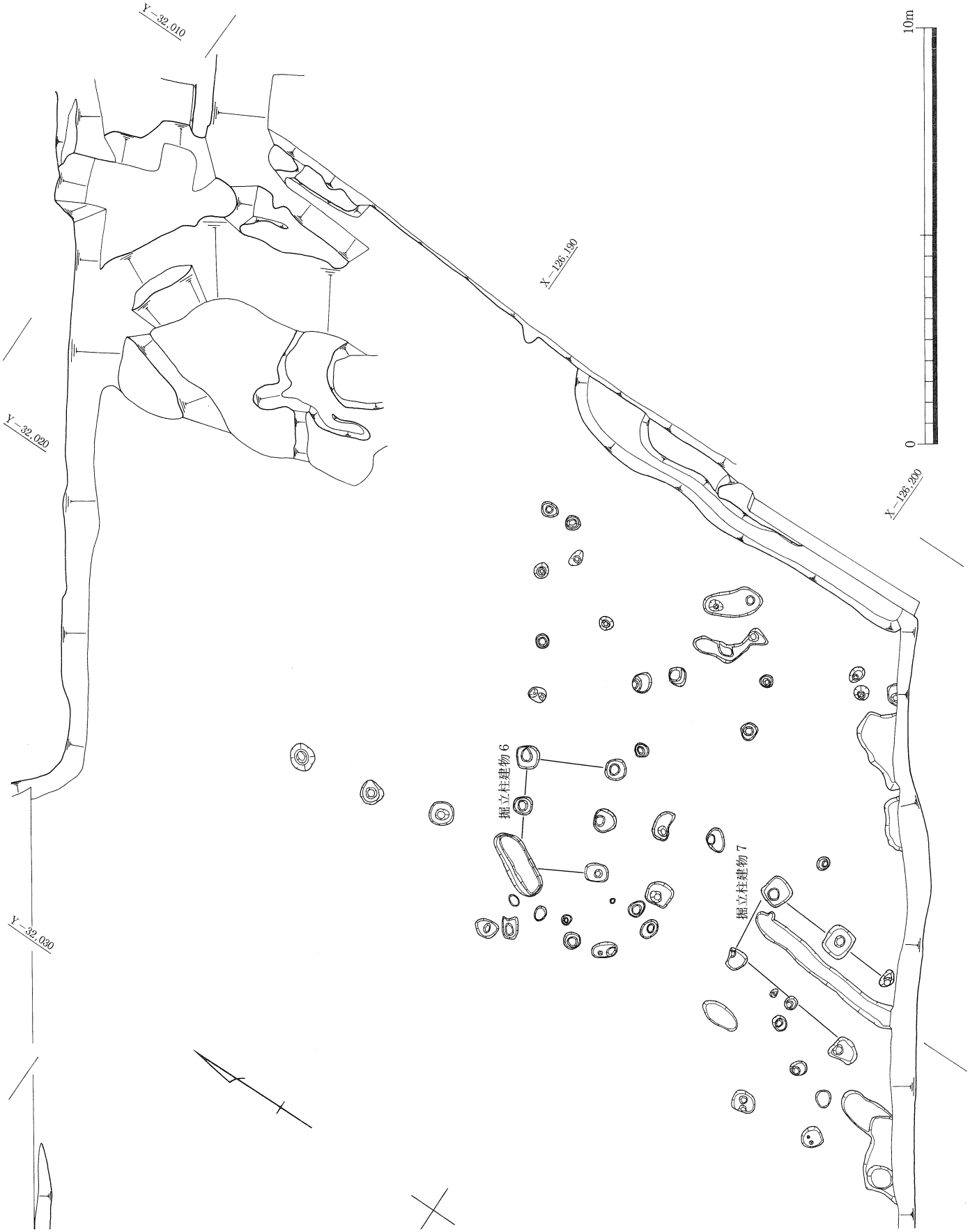


図82　D 2 調査地区の平面図

18）掘立柱建物７（図85、図版46）

掘立柱建物６の南約７ｍに位置する。南北２間以上、東西１間以上の建物で、方位はほぼ南北方向にとる。建物の南への広がりは、調査区外となるため確認できなかった。

掘方の平面形は隅丸の方形で直径は約0.40～0.60ｍである。南北方向の柱間寸法は約1.80ｍ、東西方向は約２ｍである。

南北方向の柱列の間には、それらと平行するように、残存する長さが約４ｍ、幅は約0.50ｍ、深さが約0.30ｍの溝状遺構が検出されているが、建物との関連は不明である。遺物は出土していないので時期は不明である。

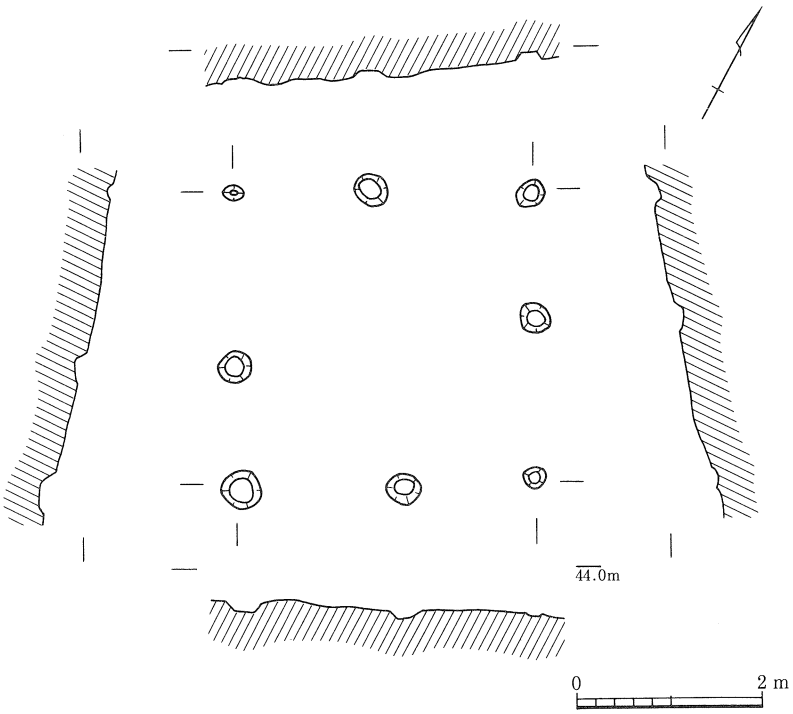


図83　掘立柱建物５

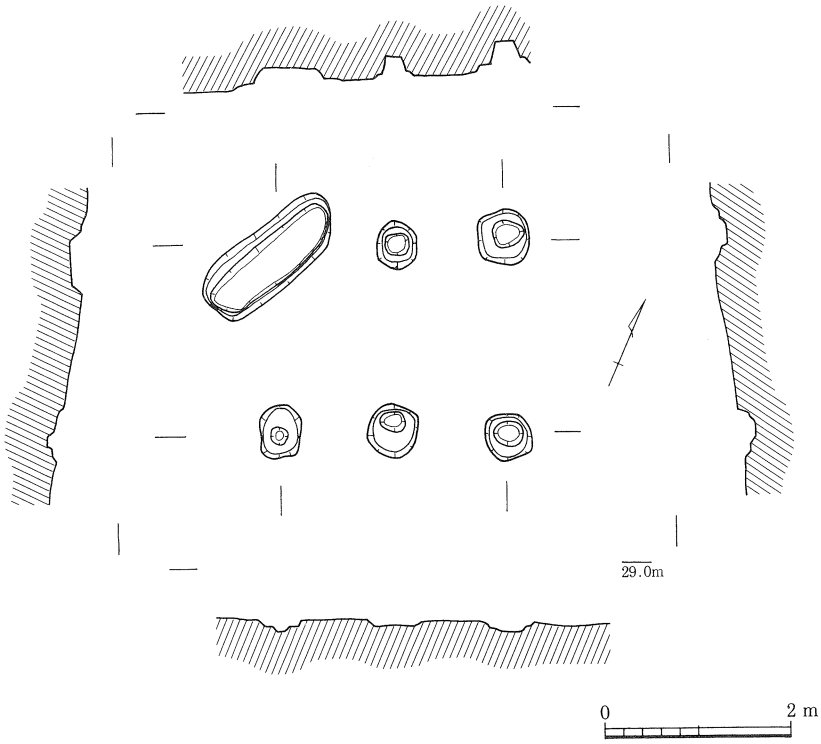


図84　掘立柱建物６

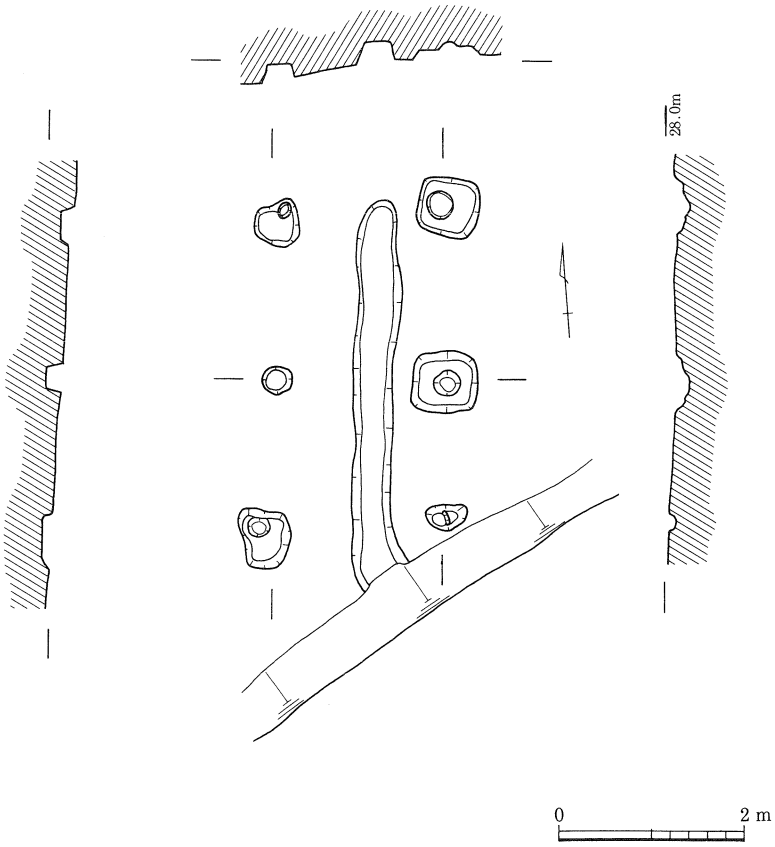


図85　掘立柱建物 7

第Ⅳ章　総　括

梶原古墳群では、今回が初めての本格的な調査であるが、高速道路拡幅工事の及ぶ限定された地区での調査であり、既存の高速道路建設に際し破壊された古墳や、調査対象地外にも古墳の存在が予想され、古墳群全体の復元には及ばない状況である。しかし、今回の調査では、総数18基の古墳を検出し、出土遺物のなかには特筆すべきものも含まれる。そこで、各古墳より得ることのできた資料をもとに、当古墳群の様相を概述したい。

第１節　梶原古墳群の造営期間とその様相

各古墳の築造年代を考えるにあたっては、出土した須恵器をもってその目安としたい。

出土した須恵器は非陶邑窯のものと考えられるが、形態的には陶邑窯の製品とは大きな差がみとめられず、陶邑の編年[1)]に対応させた本古墳群出土の須恵器の編年を以下に簡単に示す。

１）梶原古墳群出土須恵器の編年

Ⅰ期（ＴＫ10・ＭＴ85型式）

杯蓋：天井部と口縁部の境の稜は退化し、凹線が巡るもの。口径は約13～15㎝程度。

杯身：口縁部の立ち上がりはやや高く、内傾するもの。口径13㎝程度。

Ⅰ期に該当する資料は、Ｂ－１号墳出土の杯蓋11・12、杯身16・17（図15、図版48・49）、Ｂ－２号墳出土の杯蓋27（図21、図版49）、Ｆ－１号墳出土の杯蓋85、高杯蓋84、高杯93（図59、図版57・58）等を掲げることができる。

Ⅱ期（ＴＫ43型式）

杯蓋：天井部と口縁部の境の稜が完全に消失するもの。口径14㎝程度。

杯身：口縁部の立ち上がりは低く、内傾する。口径は約12～14㎝程度。

高杯：長脚２段方形スカシのもの。

Ⅱ期に該当する資料は、Ｂ－２号墳出土の高杯蓋28（図21、図版50）、Ｄ－１号墳出土の杯蓋59～64（図47、図版54）、杯身65～70、高杯73～76（図47、図版54～56）、Ｆ－１号墳出土の杯蓋86、杯身88（図59、図版57）等を掲げることができる。

Ⅲ期（ＴＫ209型式）

杯蓋：Ⅱ期とほぼ同様の特徴をもつが、口径がやや小型化する。口径は約12～14㎝程度。

杯身：口縁部の立ち上がりはさらに低く、内傾する。口径は約11～12㎝程度。

高杯：長脚２段に切り込み状のスカシを穿つもの。

Ⅲ期に該当する資料は、Ｂ－１号墳出土の杯蓋８・９、杯身13～15、高杯22（図15、図版47

～49)、B－2号墳出土の杯蓋25・26、高杯32・33（図21、図版50～51）、B－3号墳出土の高杯38、B－4号墳出土の高杯39（図25、図版51）等を掲げることができる。

Ⅳ期　（TK217型式）

杯蓋：口径が小型化し、10㎝前後になる。蓋と身が逆転し、口縁部にかえりを有する杯蓋もみられる。

杯身：底部は平らで、口縁部の立ち上がりはきわめて低くなる。体部と口縁部が外上方に直線的にのびるものも見られる。

高杯：脚部からはスカシが消失し、杯部の口径が小さくなる。口径は約9～11㎝程度。

Ⅳ期に該当する資料は、A－1号墳出土の杯蓋3～6、杯身7（図8、図版47)、B－2号墳出土の壺蓋29・30（図21、図版50)、B－3号墳出土の杯蓋34・35、杯身36・37（図25、図版51)、C－1号墳出土の杯蓋40～46、杯身48～51（図32、図版52)、D－1号墳出土の短頸壺蓋58、長頸壺57、杯身71、高杯72（図47、図版54・55)、F－1号墳出土の長頸壺蓋83、杯身87、高杯89・90（図59、図版57・58)、G－1号墳出土の高杯100（図62、図版59）等を掲げることができる。

2）各古墳の築造年代

次に、以上の須恵器の編年観をもとに、各古墳の築造年代と追葬時期について考える。

各古墳の築造時期の決定にあたっては、出土した須恵器のなかで、型式的に最も古い様相を示すもので判断することとしたが、追葬の有無や時期の決定についてはその判断が困難である。今回の調査では明確に追葬の痕跡が認められた石室はなく、先に試みた須恵器の型式差をもって判断せねばならない状況であり、伝世品の存在を考慮すれば、あくまでも推定の域を出ない。

以上のことをふまえて、追葬の時期については明確にせず、表3において各古墳の造営期間と追葬期間をまとめた。

第2節　梶原古墳群出土の金属製品について

梶原古墳群出土の金属製品の中でも類例の少ない製品について記述を行なう。

B－1号墳出土の三累環式柄頭（図18、図版62）

三累環式柄頭の出土は大阪府下では初例であり、畿内では4例目である。そこで、B－1号墳出土の三累環式柄頭の形態的特徴や時期について既存の研究成果をもとに概述する。

三累環式柄頭の年代観を含めた型式分類を最初に試みたのは神林淳雄氏である[2)]。神林氏は環状が厚肉造りのもの（三繋環第一類式)、環が薄手で、柄縁が鋳出されているもの（三繋環第二類式）の2型式に分類を試みている。年代については、第一類式は5・6世紀頃、第二類式は第一類式より多少降るものとして位置づけている。

表３　梶原古墳群一覧表

古墳名	墳丘（規模）（単位ｍ）	玄室規模（単位ｍ、㎡）長さ×幅（面積）	出土須恵器				備考
			Ⅰ期（ＴＫ10 ＭＴ85）	Ⅱ期（ＴＫ43）	Ⅲ期（ＴＫ209）	Ⅳ期（ＴＫ217）	
Ａ－１号	不明	2.0×1.0（2.30）				○	小型石室
Ａ－２号	不明	1.2					小型石室
Ｂ－１号	円墳？	1.9	○		○		轡　鉄刀　三累環式柄頭鉄鏃　金環
Ｂ－２号	円墳（17.0）	3.9×2.0（7.80）	○	○	○	○	
Ｂ－３号	不明	0.9			○	○	小型石室
Ｂ－４号	不明	2.1×0.9（1.89）			○		小型石室　Ｂ－２号墳に隣接する
Ｂ－５号	不明	1.5					
Ｃ－１号	円墳			○		○	土器は周溝より出土
Ｃ－２号	方墳（10.5）						周溝から土師器片
Ｃ－３号	方墳（ 7.5）						
Ｃ－４号	不明	1.2					小型石室
Ｃ－５号	方墳？(11.5)						
Ｄ－１号	円墳（25.0）	4.0×2.1（8.40）		○		○	家形石棺　鏡　馬具　金環玉
Ｄ－２号	不明	1.1×0.8（0.88）					小型石室　Ｄ－１号墳に隣接する
Ｆ－１号	不明	3.5×1.6（5.60）	○	○		○	金環　玉類　石製品
Ｆ－２号	不明						
Ｇ－１号	不明	1.5				○	
Ｇ－２号	不明	1.1					無袖石室？　金環

（注）Ｆ－１号墳の玄室長は復元値
出土須恵器の時期分類は埋葬回数を示すものではない

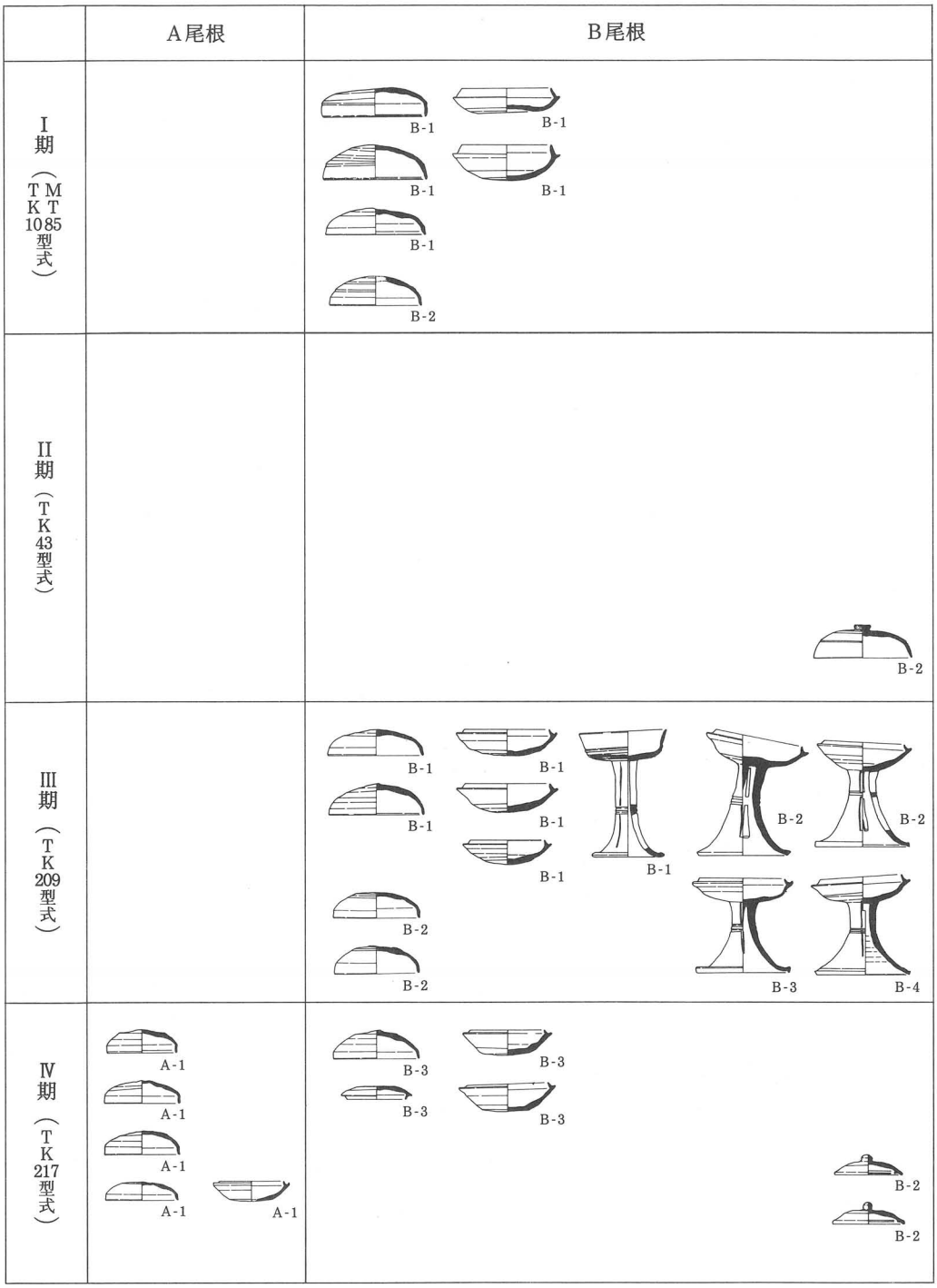
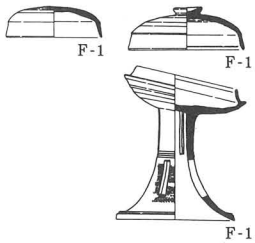
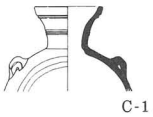
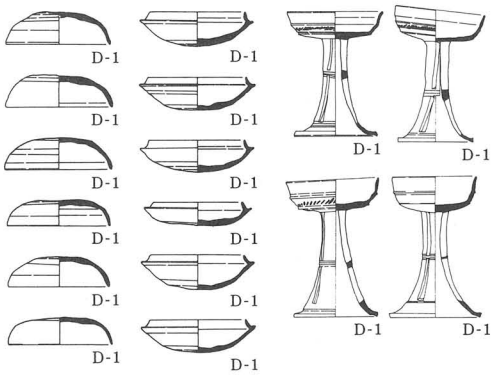
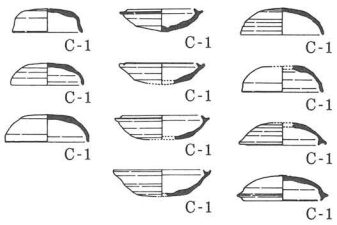
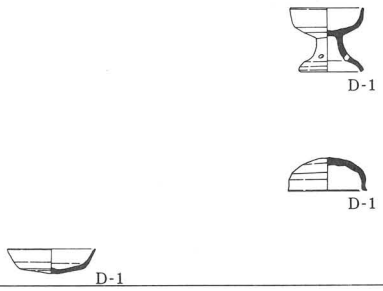
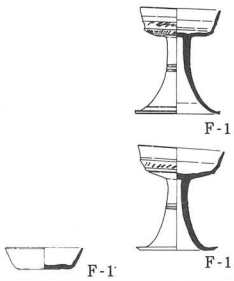


図86　古墳出土の須恵器変遷図

C尾根	D尾根	F尾根	G尾根
			
			
			

新谷武夫氏も基本的には神林氏と同様の観点から分類を行い、①環の断面が厚肉造りで、隅丸三角形状を呈する。②環の断面が薄板造りの扁平で、柄縁が鋳造され茎をもたない。の2型式を提示し、①は6世紀前半、②を6世紀後半に位置づけている[3)]。

その後、穴沢咏光、馬目順一両氏らが、精力的に日本国内における三累環式柄頭の集成を行い、31例に及ぶ出土例を挙げ、三累環の高さと横巾の関係に着目した分類を試みている[4)]。その中で両氏は、環の厚みについては装着される環頭の大小に左右されるため、型式分類の決め手にはならないことを前提として以下の4型式を提示している。

A式（5世紀前半）　三累環の高さが横巾に比して大きく三つの環の中心を結ぶと底辺のせまい二等辺三角形になり、環の切れ目の隙間が狭い。

B式（6世紀後半期）　三累環の高さに対して横巾が拡がり、三つの環の中心が正三角形の各頂点の関係にあり、下方の二環の間隔が拡がる。

C式（6世紀後半以降）　三累環の横巾が高さに比して大きく各環の中心が広辺の広い二等辺三角形の各頂点にある。

D式（6世紀代）　三累環の各環が離れて中央に広い六角形の空所ができる。

B－1号墳出土の本例は上記のC式に該当するものと考えられ、B－1号墳の年代観とは大きな格差はみられない。

31例の国内における三累環式柄頭の出土例は、前掲論文[5)]が詳しいので、本書では省略するが、畿内とその周辺部での出土例をみると、京都府福知山市大内出土例、伝奈良県出土例の2例が紹介されている。その後、山陽自動車道建設に伴い、昭和58年に兵庫県龍野市龍野町中井の中井1号墳からの出土がみられ[6)]、畿内及びその周辺部では本例をもって4例目となる。

中井1号墳出土の三累環式柄頭は律令制下の山陽道に接する地点に築造された古墳の出土例として注目されている。梶原古墳群も西国街道（旧山陽道）に接する立地条件をもち、本例は三累環式柄頭が副葬される古墳の立地条件等を考えるうえでも重要な資料と言える。また、三累環式柄頭の出土例は国内よりも朝鮮半島南部に多くみられるのも特徴であり、興味深い。

D－1号墳出土の双葉剣菱形杏葉（図52、図版65）

現在判明している双葉剣菱形杏葉の類例は、福井県遠敷郡上中町天徳寺小字丸山に所在する丸山塚古墳出土の1点[7)]と、出土地は不詳であるが、国学院大学考古学資料館所蔵の4点[8)]がある。

丸山塚古墳は昭和32年に北川堤防工事の土取場として破壊されているが、作業の合間をぬって調査が実施されている。直径約50m、高さ約10mを測る2段築成の円墳で内部主体は左片袖の横穴式石室である。共伴する遺物として、画文帯同向式神獣鏡、双竜式環頭・三葉式環頭鉄地金銅張剣菱形杏葉・鉄地金銅張鐘形杏葉・鉄地金銅張楕円形杏葉・鉄地金銅張辻金具がある。

双葉剣菱形杏葉の剣菱部は欠損しており、全長は不明であるが、本例と比較すると基本的に意匠は同じであるが、立聞、双葉部、楕円部の大きさをみるかぎり、本例よりも、やや小さい製品である。[9)]

国学院大学所蔵のものについては実見していないので詳細は述べられないが、資料の写真[10)]を見るかぎり、丸山塚古墳および本例のものと造作に大きな違いは見受けられない。

D－1号墳出土の十字文楕円形鏡板（図50、図版63）

本例の特徴は、十字文の枠金の3方（左右と下方）を膨らませ、三葉文風に意匠を凝らしていることである。十字文の枠金を膨らませた例としては、大阪府茨木市福井所在の海北塚古墳[11)]と、宮崎県児湯郡高鍋町大字持田所在の持田古墳群第56号墳[12)]にみられる。両者の心葉形鏡板と心葉形杏葉については、形態的には違いがみとめられるが、飾鋲の使用方法などに共通性が見られる。

本例は先の両者間にみられるような類似性は希薄ではあるが、十字文の枠金の意匠についてみるならば、海北塚古墳出土のものを模倣[13)]して作成されたのであろう。

表4　畿内及び周辺部における三累環式柄頭の出土地名表

遺　跡　名	所　在　地	概　要	内部主体	共伴遺物	文献
伝・奈良県		不明	不明		註4
大内	京都府福知山市	不明	不明	轡・座金具	註4
中井1号墳	兵庫県龍野市龍野町	円墳	横穴式石室	鉸具・鐙・飾金具 刀子・直刀	註6
梶原B－1号墳	大阪府高槻市梶原	円墳	横穴式石室	素環鏡板付轡・直刀・刀子・責金具・鉄鏃・刀子・耳環	

第３節　梶原古墳群の造墓活動の様相

当古墳群の時期は６世紀中頃から７世紀前半の横穴式石室を内部主体とするものと、後述するこれに先行する、方墳と推定される一群に分かれることが判明した。前者は、Ａ～Ｄ・Ｆ・Ｇ尾根の６単位群、後者はＣ・Ｄ尾根の２単位群の系列に分かつことができる。しかも、個々の石室にはその構造と規模に違いが認められる。そこで、当節では、これらの諸条件をもとに各古墳を分類し、現段階での各尾根の特質を概観し、当古墳群の造墓活動の様相に迫りたい。

今回検出された石室の多くは、必ずしも遺存状態が良好ではなく、その形態や、玄室・羨道部の規模等を復元することが困難であるものが少なくない。そこで、構造については横穴式石室をＩ類、竪穴式石室をII類とし、規模は石室の幅でａ類（２ｍ前後の大型のもの）、ｂ類（幅1.5ｍ前後の中型のもの）、ｃ類（幅１ｍ前後の小型のもの）に分類を試みた。

Ａ尾根

Ａ尾根では２基の古墳を検出している。Ａ－１号墳は南東方向に、Ａ－２号墳は南方向にそれぞれ開口するＩｃ類の石室をもつ。

Ａ－１号墳からはⅣ期の須恵器が出土している。Ａ－２号墳については詳細は不明であるがＡ－１号墳と前後する時期の所産であると考えられる。

Ｂ尾根

Ｂ尾根では５基の古墳を検出している。標高約26～27ｍを測る尾根の裾部に４基の古墳（Ｂ－１～Ｂ－４号墳）が検出され、残る１基（Ｂ－５号墳）は標高約40ｍを測る中腹部で検出している。全て南東方向に開口する横穴式石室である。Ｂ－１・－２号墳がＩａ類、Ｂ－５号墳がＩｂ類、Ｂ－３・－４号墳がＩｃ類となる。

各古墳の築造順位であるが、大型の石室をもちＩ期の須恵器が出土するＢ－１号墳が最初に築造されたと考えられる。続いて築造されたのはＢ－１号墳同様、大型の石室をもち、II期の須恵器が出土するＢ－２号墳であろう。Ｂ－３・－４号墳は退化した小型の石室をもち、III～Ⅳ期の須恵器が出土している。両者ともＢ－２号墳の墳裾に位置し、Ｂ－２号墳と密接な関係が考えられ、その築造は、Ｂ－２号墳より後発的であることは疑いないであろう。その結果Ｂ－１からＢ－４号墳へと、東から西への古墳築造の変遷がみられる。また、Ｂ－２号墳のグループが追葬終了後に、Ｂ－３・－４号墳へと埋葬を引き継がせているのに対して、Ｂ－１号墳には後続する古墳が周辺には見られず、Ｂ－１号墳のグループはIII期の段階で断絶した可能性がある。つまり、Ｂ尾根裾部の一群は、２グループで構成されていた可能性がある。

Ｂ－５号墳については、遺物が出土せず詳細は不明であるが、中型の石室をもち、やや奥まった場所に占地することから、Ｂ－１・－２号墳のグループとは別グループの古墳であると考えるのが妥当であろう。

C尾根

C尾根では5基の古墳を検出している。石室の一部が遺存し、南東方向に開口するC－4号墳以外は埋葬施設が検出されていない。

C－1号墳は周溝内よりII期とⅣ期の須恵器が出土しているが、周辺からの流れ込みの可能性が高く、明確な時期を与えるのは困難である。

C－4号墳の残存状況は良くないが、遺存する敷石や掘方の規模からみて、Ⅰc類の石室であった可能性があり、周辺の状況から鑑みても、III期以降の所産であろう。

C－2・－3・－5号墳の詳細は不明であるが、残存部の形状をみると、比較的小規模な方墳であった可能性があり、後述する、方墳の可能性があるD－2号墳がもつ、小型の竪穴式石室と同様の埋葬施設を備えていた可能性がある。

D尾根

D尾根では2基の古墳を検出している。D－1号墳は南東方向に開口する横穴式石室で、II期とⅣ期に該当する須恵器とともに、家形石棺や豊富な馬具が出土している。石室はⅠa類に属する。D－2号墳はIIc類の石室をもち、D－1号墳の墳丘盛土除去後に検出されている。

D尾根ではD－1号墳に後続する古墳は検出されておらず、その痕跡すらみられない。

F尾根

F尾根では2基の古墳を検出している。当古墳群において検出した横穴式石室のなかで、F－1号墳は、唯一南西方向に開口する。石室はⅠb類に属し、Ⅰ期～Ⅳ期に該当する須恵器が出土している。F－2号墳は石室の掘方のみ検出しており、詳細は不明であるが、南東方向に開口していたと推定される。

G尾根

G尾根では2基の古墳を検出している。G－1・－2号墳はともに南東方向に開口する横穴式石室をもち、G－1号墳がⅠb類、G－2号墳はⅠc類に属する。G－1号墳のみⅣ期に該当する須恵器が出土しているが、G－2号墳もその築造時期は、G－1号墳と大差がないものと考えられる。

以上、各尾根の特質を概観したが、各尾根によって後世の削平の程度にばらつきがみられ、各単位群に包括されるであろう、家族単位とも言うべき小グループの在り方については明らかにできなかった。しかし、B尾根裾部の一群をみると、B尾根の東をほぼ南北方向に走行する谷筋を幹道とし、枝道を東から西へと延ばしながら、古墳を築造していった、2グループの姿を伺うことができた。

各単位群の全容が明らかでない現段階において、各単位間の序列等を言及することは困難であるが、二上山産出の凝灰岩製家形石棺や豊富な馬具が出土したD－1号墳を擁するD尾根の

系列と、三累環式柄頭をはじめ多くの武器が出土したＢ－１号墳を擁するＢ尾根の系列は、当古墳群を代表する系列であったことは疑いないであろう。特に、Ｄ－１号墳の集団は、淀川の水運を軸としたであろう当地の有力者層が中央と深い関係をもち、伸長していくことに深く関わった集団として位置付けられる可能性がある。

註

1）田辺昭三　『須恵器大成』　角川書店　1981　による。
2）神林淳雄　「環頭大刀雑攷　－環頭大刀とその文化」『考古学雑誌』第33巻　第12号　1943年
3）新谷武夫　「環状柄頭研究序説」『考古論集　－慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集－』　1973年
4）穴沢咏光・馬目順一　「三累環刀試論　－伝・下総岩井出土の竜紋三累柄頭を中心にして－」『藤沢一夫先生古希記念古文化論叢』　1983年
5）註４と同じ
6）井守徳男『中井古墳群・中井鴨池窯跡』　兵庫県文化財調査報告書　第38冊　兵庫県教育委員会　1987年
7）斎藤　優　『若狭上中町の古墳』　1970年
8）名古屋市博物館　『古墳時代の馬具』　特別展「古墳時代の馬具」展示図録　名古屋市博物館　1985年
9）花谷　浩氏の御教示を受け、実測図を拝見させて頂いた。
10）註８と同じ
11）梅原末治　「摂津福井の海北塚古墳」『日本古文化研究所報告四』　日本古文化研究所　1937年
12）梅原末治　『持田古墳群』　宮崎県教育委員会　1969年
13）小野山　節先生に御教示を賜わった。

土器観察表（一）

挿図番号	図版	種類	法量（cm）	調整	胎土	焼成	色調
1	47	土師器　杯身	口径　=12.6 器高　= 4.4	口縁部内外面、体部外面横ナデ調整　体部内面に放射状に暗文（長短さまざま）	密	良好	内外　橙色
2	47	土師器　甕	口径　=16.3 器高　= 7.5	底体部内面部分的に不定方向のナデ調整　口縁部外面に横ナデ調整がわずかに残るが、他は摩滅のため調整不明	密	良好	内外　浅黄橙色
3	47	須恵器　杯蓋	基部径　=10.1 器高　= 3.4	天井部外面3/5粗雑な回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整	密	良好堅緻	内外　灰白色
4	47	須恵器　杯蓋	基部径　=10.9 器高　= 3.4	天井部外面ロクロ不使用のヘラケズリ調整を外方に向かって施す（右まわり）　他は回転ナデ調整	密　φ2㎜以下の黒色粒φ4㎜以下の白色粒含む	不良	内外　灰白色
5	47	須恵器　杯蓋	基部径　=10.9 器高　= 3.5	天井部外面1/2未調整　他は回転ナデ調整　その後、頂部内面に一定方向のナデ調整	密　φ2㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内外　青灰色
6	47	須恵器　杯蓋	基部径　=10.6 器高　= 2.8	天井部外面1/2粗雑な回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整	密　φ1㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内外　青灰色
7	47	須恵器　杯身	基部径　= 9.4 器高　= 3.0 受部径　=11.2	底部外面ヘラ切り未調整　他は回転ナデ調整	密　φ2㎜以下の白色粒わずかに含む	良好堅緻	内外　灰白色
8	47	須恵器　杯蓋	基部径　=13.8 器高　= 4.9	天井部外面3/4回転ヘラケズリ調整（頂部のみ未調整）　他は回転ナデ調整	やや粗 φ4㎜以下の白色粒　φ1㎜以下の黒色粒多く含む	良好堅緻	内　オリーブ灰色 外　オリーブ灰～青灰色
9	48	須恵器　杯蓋	基部径　=13.9 器高　= 4.6	天井部外面2/3回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整　その後、頂部内面に一定方向のナデ調整	密	良好堅緻	内　青灰色 外　青灰～暗青灰色
10	48	須恵器　杯蓋	基部径　=14.6 器高　= 6.0	天井部外面1/2未調整　その周囲（2/3まで）に1周のみ回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整（調整は全体に粗雑）	密　φ3㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内　青灰色 外　緑灰色
11	48	須恵器　杯蓋	基部径　=15.1 器高　= 4.4	天井部外面ほぼ全面回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整　その後、頂部内面に一定方向のナデ調整	密　φ1㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内　暗青灰色 外　青灰色
12	48	須恵器　杯蓋	基部径　=15.1 器高　= 5.2	天井部外面ほぼ全面回転ヘラケズリ調整（2回に分けて施されており、粗雑）　他は回転ナデ調整	密　φ2㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内　緑灰色 外　オリーブ灰色
13	48	須恵器　杯身	基部径　=11.9 器高　= 3.7 受部径　=13.0	底体部外面1/2未調整　他は回転ナデ調整（粗雑）	密	良好	内外　明オリーブ灰色
14	48	須恵器　杯身	基部径　=12.5 器高　= 3.9 受部径　=14.8	底体部外面3/5回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整	やや粗 φ5㎜以下の白色粒多く含む	良好堅緻	内　灰色 外　灰～緑灰色
15	48	須恵器　杯身	基部径　=12.5 器高　= 4.2 受部径　=15.0	底体部外面2/3回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整　その後、見込み部に不定方向のナデ調整	密　φ2㎜以下の白色・黒色粒含む	良好堅緻	内　オリーブ灰色 外　明オリーブ灰～灰色
16	49	須恵器　杯身	基部径　=13.0 器高　= 5.3 受部径　=15.9	底体部外面2/3回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整	密　φ3㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内　青灰色 外　緑灰～青灰色
17	49	須恵器　杯身	基部径　=13.1 器高　= 3.8 受部径　=15.8	底体部外面4/5回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整　見込み部に同心円の当て具痕あり	密　φ2㎜以下の白色・黒色粒含む	良好堅緻	内　青灰色 外　緑灰～青灰色
18	49	須恵器　短頸壺蓋	基部径　= 6.6 器高　= 2.8	天井部外面ほぼ全面回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整	密	良好堅緻	内外　青灰色
19	49	須恵器　短頸壺身	口径　= 4.7 器高　= 6.0 体部最大径　= 8.5	底部外面回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整	密	良好堅緻	内外　青灰色
20	49	須恵器　提瓶	口径　= 5.1（推定） 器高　=17.2（推定） 体部最大径　=14.4 体部厚さ　= 8.9	体部前面回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整	密　φ3㎜以下の白色粒多く含む	良好堅緻	灰白色～青灰色～暗青灰色 釉は緑色
21	49	須恵器　提瓶	口径　= 6.9 器高　=19.0 体部最大径　=16.5 体部最大厚さ=10.0	体部前面、背面回転カキ目調整　口頸部内外面回転ナデ調整	密	良好堅緻	青灰～暗青灰色 釉の濃い部分は緑色
22	49	須恵器　無蓋高杯	口径　=12.8 器高　=18.8 脚基部径　= 3.9 脚底径　= 9.3 脚部高　=14.3	底部外面回転ヘラケズリ調整　脚部内面の上方2/3は未調整で、しぼり目がみられる　他は回転ナデ調整　その後、体部下方に櫛描き烈点文をきざむ	密　φ2㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内外　青灰色 杯部外面の釉のかかった部分は暗青灰色

土器観察表（二）

挿図番号	図版	種類	法量（cm）	調整	胎土	焼成	色調
23	50	須恵器　台付長頸壺	口径　＝8.1 器高　＝26.0 体部最大径　＝15.4 脚基部径　＝5.8 脚底径　＝12.4 脚部高　＝11.4	底体部外面ほぼ全面回転ヘラケズリ調整　壺体部内面は不明　他は回転ナデ調整	密　φ2㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内外　青灰色
24	50	土師器　壺	口径　＝12.2 器高　＝19.1 体部最大径　＝13.8	口頸部外面タテ方向のミガキ調整　体部上方横方向のミガキ調整　体部下方横方向のケズリ調整　他は摩滅のため調整不明	密	良好	内外面 明赤褐色
25	50	須恵器　杯蓋	基部径　＝12.7 器高　＝3.9	天井部外面2/3回転ヘラケズリ調整（粗雑）　他は回転ナデ調整	密　φ2㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内外　青灰色
26	50	須恵器　杯蓋	基部径　＝12.5 器高　＝4.2	天井部外面1/2未調整　そのまわりに8㎜ほどの幅で回転ヘラケズリ調整を1周のみ施す　他は回転ナデ調整	密　φ3㎜以下の白色・黒色粒含む	良好堅緻	内外 オリーブ灰色
27	50	須恵器　杯蓋	基部径　＝13.5 器高（推定）＝4.4	天井部外面4/5回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整	密　φ2㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内外　青灰色
28	50	須恵器　高杯蓋	基部径　＝14.5 器高　＝4.9 つまみ径　＝2.5 つまみ高　＝0.9	つまみ周辺部に取り付けの際にナデ調整を施す　つまみ周辺部を除く天井部外面2/3回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整	密　φ1㎜以下の黒色粒含む	良好	内　黄灰～オリーブ褐色 外　灰白～オリーブ灰色
29	50	須恵器　長頸壺蓋	基部径　＝10.0 器高　＝3.0 つまみ径　＝1.6 つまみ高　＝1.0	つまみ部を除く天井部外面4/5回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整	やや粗　φ2㎜以下の白色粒含む	不良	内　にぶい橙～にぶい褐色 外　にぶい褐～灰褐色
30	50	須恵器　長頸壺蓋	基部径　＝10.6 器高　＝3.2 つまみ径　＝1.3 つまみ高　＝1.2	天井部外面2/3回転ヘラケズリ調整　その後、つまみを付ける際に回転ナデ調整を、つまみとその周囲に施す　天井部内面不定方向のナデ調整　他は回転ナデ調整	やや粗　φ3㎜以下の白色粒含む	不良	内　にぶい褐色 外　橙～褐灰色
31	50	須恵器　高杯（脚部）	脚底部(推定)＝14.9 残存高　＝14.6	脚部内面、外面ともに回転ナデ調整	密	良好堅緻	内　青灰色 外　明オリーブ灰～黒色
32	51	須恵器　有蓋高杯	口径　＝11.9 器高　＝15.7 受部径　＝14.1 脚基部径　＝4.8 脚底径　＝13.9 脚部高　＝11.3	杯底部外面4/5回転ヘラケズリ調整　その後、脚部を取り付けている　他は回転ナデ調整	密	良好堅緻	杯部内面と外面の一部灰色 杯部外面と脚部内外面　明オリーブ灰色
33	51	須恵器　有蓋高杯	口径　＝12.9 器高　＝18.7 受部径　＝15.4 脚基部径　＝4.5 脚底径　＝13.1 脚部高　＝13.3	杯底部外面3/5回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整	密　φ1㎜以下の黒色粒含む	良好堅緻	内　青灰色 外　明青灰色 釉のかかる部分は黒色
34	51	須恵器　長頸壺蓋	基部径　＝10.6 器高　＝2.0 かえり端部径＝8.7	天井部外面2/3回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整　その後頂部内面に一定方向のナデ調整	密　φ1㎜以下の黒色粒含む	良好堅緻	内外　青灰色
35	51	須恵器　杯蓋	基部径　＝12.6 器高　＝4.3	天井部外面2/5未調整　他は回転ナデ調整（粗雑）　その後、頂部内面に一定方向のナデ調整	やや粗　φ5㎜以下の白色粒多く含む	良好堅緻	内外　灰色
36	51	須恵器　杯身	基部径　＝10.9 器高　＝3.8 受部径　＝13.1	底部外面未調整　他は回転ナデ調整　（体部下方のナデ調整は非常に粗雑）　その後、見込み部に一定方向のナデ調整を施す	密　φ3㎜以下の白色粒多く含む	良好堅緻	内外　灰色
37	51	須恵器　杯身	基部径　＝11.9 器高　＝14.2 受部径　＝4.4	底部外面未調整　体部下方に粗い回転ヘラケズリ調整を1周のみ施す　他は回転ナデ調整	密　φ5㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内外　灰色
38	51	須恵器　有蓋高杯	口径　＝12.5 器高　＝14.0 受部径　＝14.9 脚基部径　＝4.4 脚底径　＝13.6 脚部高　＝10.5	脚筒部内面は未調整で、しぼり目がみられる　他は回転ナデ調整	密　φ1㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内外　青灰色
39	51	須恵器　有蓋高杯	口径　＝12.1 器高　＝14.9 受部径　＝14.8 脚基部径　＝4.7 脚底径　＝13.8 脚部高　＝10.8	杯底体部外面3/4回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整　その後、杯見込み部に一定方向のナデ調整　脚部内面上方にしぼり目が残る	密	良好	杯内　緑灰色 脚内　明緑灰～明黄褐～黄灰色 杯脚外　にぶい黄褐～灰白～灰色

土器観察表（三）

挿図番号	図版	種類	法量（cm）	調整	胎土	焼成	色調
40	52	須恵器　短頸壺蓋	基部径　＝ 9.3 器高　＝ 3.2	天井部外面1/2未調整　その周りに粗雑な回転ナデ調整　他は回転ナデ調整	密　φ２㎜以下の白色粒多く含む	良好堅緻	内外　灰色
41	52	須恵器　杯蓋	基部径　＝ 9.6（推定） 器高　＝ 3.0	天井部外面2/3未調整　他は回転ナデ調整　頂部内面に一定方向のナデ調整	密　φ２㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内外　灰色
42	52	須恵器　杯蓋	基部径　＝11.0 器高　＝ 3.7	天井部外面2/5未調整　その周りに一周のみ粗雑な回転ヘラケズリ調整（１㎝幅）　他は回転ナデ調整だが、天井部内面は摩滅のため調整不明	密	不良	内　灰白色 外　灰白～灰色
43	52	須恵器　杯蓋	基部径　＝11.0（推定） 器高　＝ 3.6	天井部外面2/5未調整　その周りから4/5まで回転ヘラケズリ調整（粗いヘラ使用）　他は回転ナデ調整　頂部内面に一定方向のナデ調整	密　φ１㎜以下の黒色粒含む	良好堅緻	内外 明オリーブ灰色
44	52	須恵器　杯蓋	基部径　＝10.8 器高　＝ 3.5	天井部外面1/2粗雑な回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整	密　φ３㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内　灰白色 外　灰白～灰色
45	52	須恵器　杯蓋	基部径　＝11.8（推定） 残存高　＝ 3.0	天井部外面3/5未調整　そのまわりに１周のみ回転ヘラケズリ調整（部分的に途切れる）　他は回転ナデ調整	密	良好堅緻	内　明青灰色 外　明青灰～青灰色
46	52	須恵器　杯蓋	基部径　＝12.2（推定） 残存高　＝ 3.4	天井部外面回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整	密　φ１～６㎜の白色粒含む	良好堅緻	内外　青灰色
47	52	土師器　杯	口径　＝11.6 器高　＝ 4.0	口縁部内外面横ナデ調整　底体部外面は摩滅のため調整不明　底体部内面に放射状の暗文を施す	密	良好	内　橙色 外　橙色 炭素吸着部は黒色
48	52	須恵器　杯身	基部径　＝ 8.9 器高　＝ 3.2 受部径　＝11.2	底体部外面3/5未調整　他は回転ナデ調整	密　φ１㎜以下の黒色粒含む	良好堅緻	内外　灰白色 釉は緑色
49	52	須恵器　杯身	基部径　＝ 9.6 器高　＝ 2.9（推定） 受部径　＝11.5	底体部外面3/5粗雑な回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整	密　φ１㎜以下の白色粒わずかに含む	良好堅緻	内外　灰白色
50	52	須恵器　杯身 残存部1/6	基部径　＝10.7 器高（残存）＝ 3.2 受部径　＝12.7	底体部外面1/2未調整　他は回転ナデ調整	密　φ３㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内　灰褐色 外　青灰色
51	52	須恵器　杯身	基部径　＝11.1 器高　＝ 3.6 受部径　＝13.2	底部、未調整　底部の周りに一周のみ回転ヘラケズリ調整を施す　他は回転ナデ調整	密　φ２㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内外　灰白色
52	53	須恵器　提瓶	口径　＝ 8.3 器高　＝17.4	体部前面細かいカキ目調整　背面、回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整	密　φ３㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内　緑灰色 外　緑灰～青灰色
53	53	須恵器 無蓋短脚高杯	口径　＝ 9.1 器高　＝ 6.0 脚基部径　＝ 3.5 脚底径　＝ 5.1 脚部高　＝ 2.0	内外面とも回転ナデ調整	密	良好堅緻	内外　青灰色
54	53	須恵器　長頸壺	口径　＝ 9.3 残存高　＝12.4	内外面とも回転ナデ調整	密	良好堅緻	内　青灰色 外　青灰～暗青灰色
55	53	須恵器　平瓶	口径　＝ 4.1（推定） 器高　＝ 6.0 体部最大径　＝ 9.5（推定）	口縁部内外面回転ナデ調整　底部未調整　体部は底部の周りに一周のみ回転ヘラケズリ調整　下方は横方向のヘラケズリ調整　上方は一部にヘラケズリ調整の跡をとどめるほかは摩滅のため確認できない	密	良好堅緻	内　青灰色 外　青灰～暗青灰色
56	53	須恵器　平瓶	残存高　＝12.6 体部最大径　＝17.1	口頸部内外面回転ナデ調整　底体部外面2/3回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整（摩滅のため、明瞭でない）	密　φ２㎜以下の白色粒わずかに含む	良好堅緻	外 明オリーブ灰色
57	54	須恵器　長頸壺蓋	基部径　＝ 9.9 器高　＝ 4.9 かえり端部径＝ 7.1 つまみ高　＝ 1.6	天井部外面3/4回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整	密　φ１㎜以下の黒色粒多く含む	良好堅緻	内　青灰色 外　青灰色 釉は青黒色
58	54	須恵器　短頸壺蓋	基部径　＝10.5 器高　＝ 4.4	天井部外面4/5回転ヘラケズリ調整（頂部のみヘラ切り未調整）　他は回転ナデ調整　その後、天井部内面に一定方向のナデ調整	密　φ２㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内外　青灰色
59	54	須恵器　杯蓋	基部径　＝14.4 器高　＝ 4.3	天井部外面1/3回転ヘラケズリ調整（頂部のみヘラ切り未調整）　他は回転ナデ調整　その後、天井部内面に一定方向のナデ調整	密　φ３～６㎜程の白色粒含む	良好堅緻	内外　淡灰色
60	54	須恵器　杯蓋	基部径　＝13.7 器高　＝ 3.4	外面2/3回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整　その後、天井部内面に一定方向のナデ調整	密　φ１㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内外 淡青灰色
61	54	須恵器　杯蓋	基部径　＝13.6 器高　＝ 4.1	外面3/4回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整　その後、天井部内面に一定方向のナデ調整	密　φ３㎜白色粒含む	良好堅緻	内外 淡青灰色
62	54	須恵器　杯蓋	基部径　＝14.2 器高　＝ 4.3	外面1/2回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整　その後、天井部内面に不定方向のナデ調整	密　φ１㎜以下の白色・黒色粒含む	良好堅緻	内外 淡青灰色

土器観察表（四）

挿図番号	図版	種類	法量（cm）	調整	胎土	焼成	色調
63	54	須恵器　杯蓋	基部径　=14.0 器高　= 4.4	天井部外面3/4回転ヘラケズリ調整（中央部のみ粗雑）　他は回転ナデ調整　その後、天井部内面に一定方向のナデ調整	密　φ2㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内外　青灰色
64	54	須恵器　杯蓋	基部径　=13.8 器高　= 3.7	天井部外面3/4回転ヘラケズリ調整（粗雑）　他は回転ナデ調整　その後、天井部内面に不定方向のナデ調整	密　φ1㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内外　暗灰色 断面　赤褐色
65	54	須恵器　杯身	基部径　=12.7 器高　= 4.7 受部径　=15.3	底部外面5/8回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整　見込み部に一定方向のナデ調整	密　φ5㎜以下の白色粒含む	良好	内　淡黄青色 外　淡黄灰色
66	54	須恵器　杯身	基部径　=11.9 器高　= 3.2 受部径　=14.5	底部外面1/2回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整	密　φ0.1㎜以下の白色・黒色粒、φ7.5㎜のケイ石含む	良好	内　濃灰色 外　灰色
67	54	須恵器　杯身	基部径　=13.2 器高　= 4.5 受部径　=15.6	底部外面1/2回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整　見込み部に不定方向のナデ調整	密　φ1㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内　青灰色 外　淡青灰色
68	55	須恵器　杯身	基部径　=12.8 器高　= 4.4 受部径　=15.3	底部外面3/4回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整　見込み部に不定方向のナデ調整	密　φ3㎜以下の白色粒含む	良好	内　淡青灰色 外　青灰色～白灰色
69	55	須恵器　杯身	基部径　=12.5 器高　= 4.7 受部径　=15.2	底部外面2/3回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整	密　φ1㎜以下の白色粒含む φ3㎜程の粒砂が混ざっていた痕跡あり	良好堅緻	内　淡青灰色 外　灰白色
70	55	須恵器　杯身	基部径　=12.8 器高　= 4.4 受部径　=15.5	底部外面1/2回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整　見込み部に不定方向のナデ調整	密	良好	内　淡灰色 外　灰色
71	55	須恵器　杯身	基部径　=11.8 器高　= 3.4	底部外面非常に粗雑な回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整	密	良好堅緻	内　淡青灰色 外　淡青灰～青灰色
72	55	須恵器 無蓋短脚高杯	口径　= 9.9 器高　= 8.6 脚基部径　= 3.6 脚底径　= 8.2 脚部高　= 4.7	杯底部外面回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整	密　φ2㎜以下の白色粒、φ5㎜以下の黒色粒含む	良好堅緻	内　淡灰色～淡青灰色 外　淡青灰色 杯部内面に重ね焼による色ムラがみられる
73	55	須恵器　無蓋高杯	口径　=12.8 器高　=16.8 脚基部径　= 3.7 脚底径　=11.1 脚部高　=13.1	杯体部外面に櫛描き烈点文　他は回転ナデ調整（杯底部外面および脚部外面のナデは粗い布目によるもの）	密　φ1㎜以下の白色粒多く含む	良好堅緻	内外　灰色
74	55	須恵器　無蓋高杯	口径　=11.9 器高　=18.4 脚基部径　= 3.5 脚底径　=10.1 脚部高　=13.5	杯体部下方に櫛描き烈点文　他は回転ナデ調整	密　φ1㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内　淡灰色 外　灰色
75	56	須恵器　無蓋高杯	口径　=12.4 器高　=18.7 脚基部径　= 3.6 脚底径　=11.4 脚部高　=14.5	杯体部下方に櫛描き烈点文　他は回転ナデ調整　見込み部に不定方向のナデ調整	密	良好堅緻	内外　灰色 自然釉は暗灰色
76	56	須恵器　無蓋高杯	口径　=11.2 器高　=19.2 脚基部径　= 2.7 脚底径　=12.0 脚部高　=14.3	回転ナデ調整	密　φ1㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内　灰色 外　灰色 自然釉は暗灰色
77	56	土師器　壺	口径　= 9.5 器高　=16.4 基部径　= 7.7 体部最大径　=14.0	底部および体部下方外面、回転ヘラケズリ調整のち不定方向のケズリ調整　体部内面、粗い布目による横方向のナデ調整　底部内面一定方向のナデ調整　他は回転ナデ調整　基部内面にユビオサエの痕残る	密　φ1㎜以下の黒色砂粒含む	良好	内　茶褐色 外　淡黄褐色
78	56	須恵器　台付長頸壺	口径　=－ 残存高　=15.7 体部最大径　=12.7 脚基部径　= 4.7 脚底径　=11.9 脚部高　= 6.7	体部外面4/5回転ヘラケズリ調整　体部上方櫛描き烈点文　他は回転ナデ調整	密　φ2㎜以下の黒色粒多く含む	良好堅緻	内　灰色 外　灰白～黒灰色 断　灰白色
79	56	須恵器　提瓶	口径　= 7.3 器高　=17.8 体部最大幅　=14.7 体部最大厚さ= 9.2	口頸部内外面回転ナデ調整　体部全面カキ目調整	密　φ1㎜以下の白色砂粒含む	良好堅緻	内外 青緑灰色

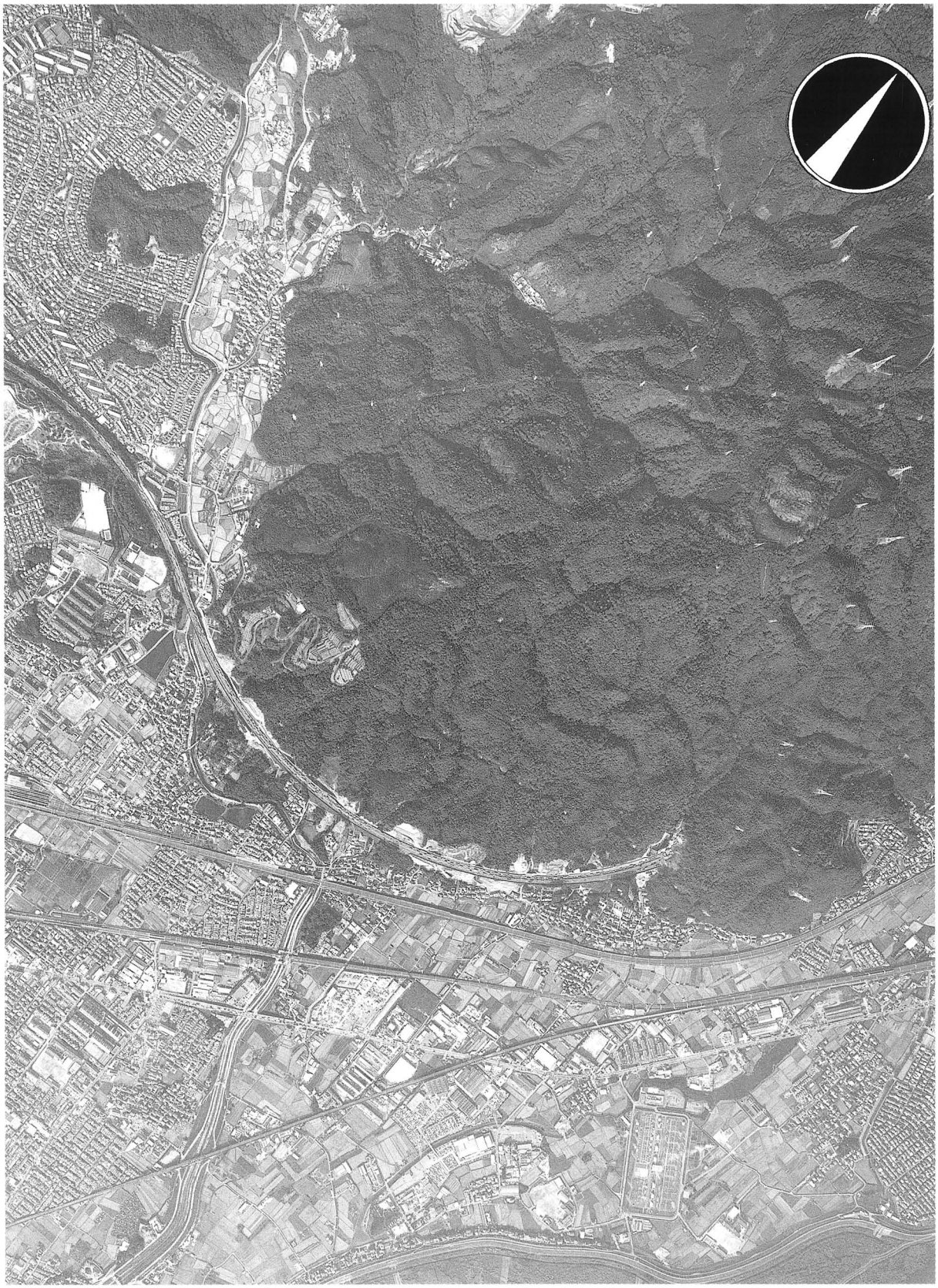
土器観察表（五）

挿図番号	図版	種類	法量（cm）	調整	胎土	焼成	色調
80	56	須恵器　甕	口径　=25.8 器高　=43.5 体部最大径　=45.3	口縁部をのぞく外面全体に格子タタキ　肩部、体部、底部内面に円弧タタキ　口頸部内面および口縁外端面はナデ調整	密　φ3㎜以下の黒色粒多く含む	良好堅緻	内外断 淡灰色 自然釉は濃緑色
81	57	須恵器　台付長頸壺	口径　=10.9 器高　=26.8 体部最大径　=15.2 脚基部径　= 5.2 脚底径　=15.6 脚部高　= 9.8	体部外面3/4回転ヘラケズリ調整　体部上方櫛描き烈点文　他は回転ナデ	密　φ1㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内外 淡青灰色
82	57	須恵器　台付長頸壺	器高　=11.0 体部最大径　=18.7 脚基部径　= 6.4 脚底径　=16.1 脚部高　=10.0	壺見込み部不定方向のナデ調整　肩部、体部の内外面、体部外面2/3、脚部内外面回転ナデ調整	密	良好堅緻	内外　灰色 断　白灰色
83	57	須恵器　長頸壺蓋	基部径　=11.5 器高　= 4.7 かえり端部径= 8.4 つまみ径　= 2.8 つまみ高　= 0.9	つまみ部を除く天井部外面、ほぼ全面回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整	密　φ3㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内外　青灰色
84	57	須恵器　杯蓋	基部径　=15.4 器高　= 5.8 つまみ径　= 3.9 つまみ高　= 1.0	つまみ部を除く天井部外面、ほぼ全面粗い工具による回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整　その後、天井部内面に一定方向のナデ調整	粗　φ4㎜以下の白色粒非常に多く含む	良好堅緻	内　灰色 外　暗灰色
85	57	須恵器　杯蓋	基部径　=12.7 器高　= 4.2	天井部外面3/4回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整	密　φ2㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内外　青灰色
86	57	須恵器　杯蓋	基部径　=13.9 器高　= 3.9	天井部外面2/3回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整　その後、天井部内面に一定方向のナデ調整	密　φ1㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内　緑灰色 外　緑灰～暗緑灰色
87	57	須恵器　杯身	口径　=10.2 器高　= 3.0	底部外面未調整　他は回転ナデ調整	密　φ1㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内　灰白色 外　灰白～灰色
88	57	須恵器　杯身	基部径　=12.2 器高　= 4.6 受部径　=14.6	底体部外面1/3回転ヘラ切り未調整　その周りから3/5まで回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整	密　φ1㎜以下の白色粒多く含む	良好堅緻	内　青灰色 外　青灰～暗青灰色
89	57	須恵器　無蓋高杯	口径　=10.6 器高　=14.4 脚基部径　= 3.5 脚底径　=11.2（推定） 脚部高　=10.3	杯底部外面4/5回転ヘラケズリ調整　脚部内面2/3上方未調整　他は回転ナデ調整　その後、杯底部上方と体部にそれぞれヘラ描き斜行文を施す	密　φ2㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	杯内 明オリーブ灰～灰色 脚内 オリーブ灰～灰色 杯脚外 緑灰～青灰色
90	58	須恵器　無蓋高杯	口径　=11.4 器高　=14.1 脚基部径　= 3.2 脚底径(下面)=10.0 〃　(最大)=11.0 脚部高　= 9.6	脚部内面上方をのぞく全面回転ナデ調整　その後、見込み部に不定方向のナデ調整と杯体部下方に櫛描き烈点文	密	不良	内外 灰白～灰色
91	58	須恵器　高杯 （脚部のみ）	底径　= 9.9 残存高　= 5.6	全面回転ナデ調整	密　φ1㎜以下の白色・黒色粒含む	良好堅緻	内　灰色 外　灰～暗灰色
92	58	須恵器　高杯 （脚部のみ）	脚基部径　= 5.2（推定） 脚底径　=14.3 残存(脚部)高=13.4	内面上方は未調整　他は回転ナデ調整	密　φ1㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内　青灰色 外　青灰～暗青灰色
93	58	須恵器　有蓋高杯	口径　=13.6 器高　=20.8 受部径　=16.8 脚基部径　= 5.5 脚底径　=15.8 脚部高　=14.8	杯底体部外面4/5回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整　その後、脚部下方に三条の波状文を施す（下方から順に施しており、重なっている　下24本以上、中20本前後　上30本前後、途切れる部分が多い）	密　φ4㎜以下の白色粒多く含む	良好堅緻	杯内　青灰色 杯外　暗緑灰色 杯外面はほとんど剝離その部分は明緑灰～灰色 脚内　杯外に同じ 脚外 暗緑灰色
94	58	須恵器　瓶	口径　=15.0 器高　=17.1 基部径　= 4.4 体部最大径　= 9.2	底部外面全面回転ヘラケズリ調整　その後下方のみ回転ナデ調整　他は回転ナデ調整　その後、口頸部上位に一条20本前後、中位に一条35本ほどの波状文を施すが、中位のものは粗雑で部分的に途切れる　体部中位に櫛描き烈点文を施す	密　φ1㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内　灰白～灰色 外　青灰色
95	58	広口壺	底径　=19.2（推定） 残存高　=13.7	口頸部内外面回転ナデ調整　（内面下方に未調整部分残る）　その後、一条がそれぞれ40本前後と25本前後の波状文をめぐらす	密　φ5㎜以下の白色・灰白色粒含む	良好堅緻	内　青灰～暗青灰色 外　暗青灰～青黒色

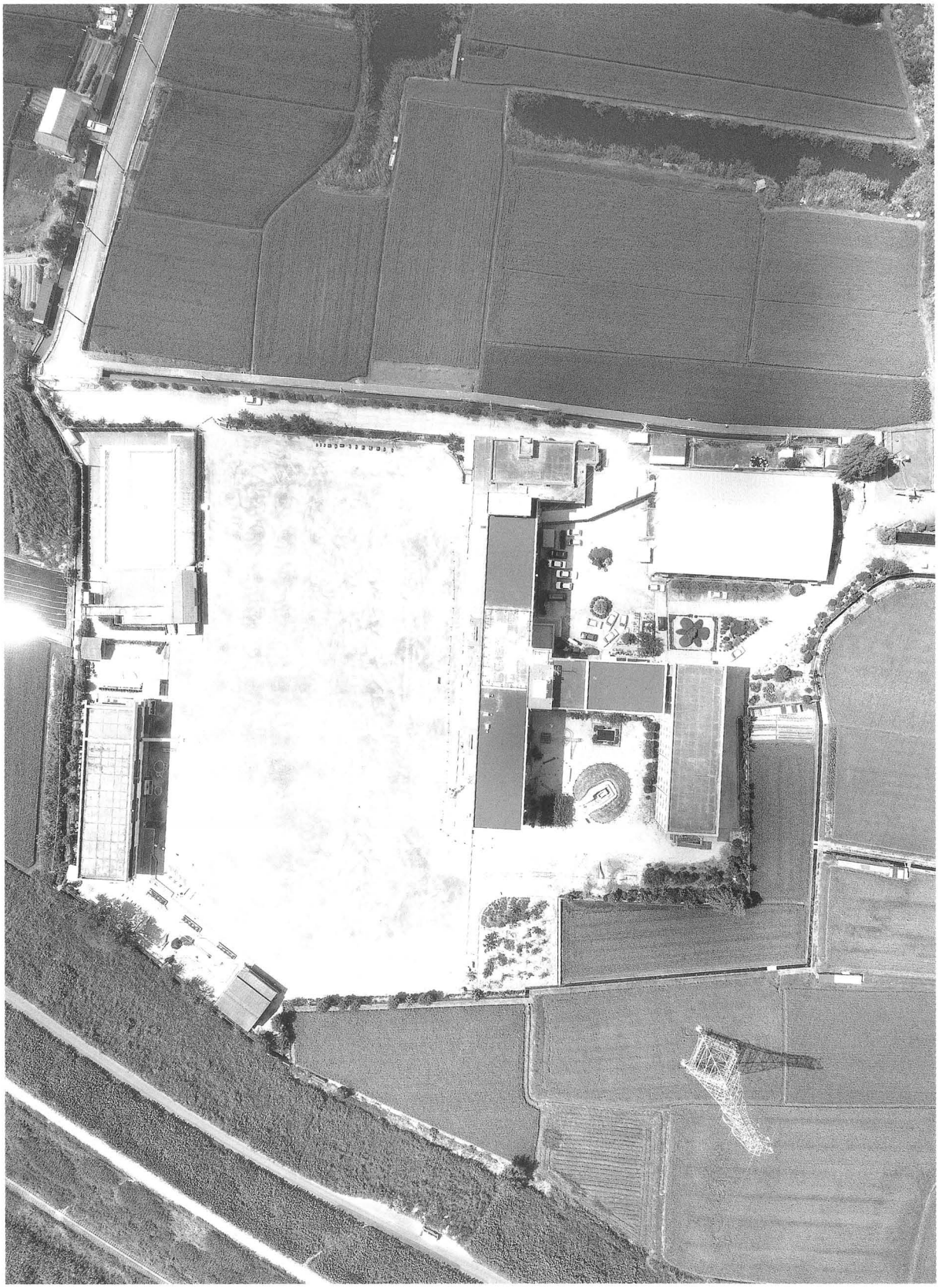
土器観察表（六）

挿図番号	図版	種類	法量（cm）	調整	胎土	焼成	色調
96	58	須恵器　台付壺	口径　＝ 9.4 残存高　＝14.9 体部最大径　＝12.4 脚基部径　＝ 5.4	底大部外面2/3回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整	密	良好堅緻	内外　灰色
97	59	須恵器　提瓶	口径　＝ 8.7 器高　＝22.1 体部最大幅　＝17.6 体部最大厚さ＝13.7	体部前面・背面ともカキ目調整（1㎝幅中7～8条）　口頸部内外面回転ナデ調整	密　φ1㎜以下の白色・黒色粒含む	良好堅緻	内　青灰色 外　灰～暗灰色 釉は緑色
98	59	土師器　甕	口径　＝15.4 器高　＝15.7 体部最大径　＝16.6	口頸部内外面ヨコナデ調整　底体部外面縦方向の粗いハケ調整（1㎝幅中10条）	やや粗　φ1㎜以下の白色粒・雲母等多く含む	良好	内　明黄褐～褐灰色 外　褐灰～にぶい橙色
99	59	土師器　甕	口径　＝11.0 器高　＝10.7 体部最大径　＝12.4	口頸部内外面ヨコナデ調整　底体部外面縦方向の粗いハケ調整（1㎝幅中6条）	やや粗　φ2㎜以下の白色粒・雲母等含む	良好	内外　浅黄橙～橙色
100	59	須恵器 無蓋短脚高杯	口径　＝ 9.6 器高　＝ 8.4 脚基部径　＝ 3.1 脚底径　＝ 7.5 脚部高　＝ 4.9	杯底部外面回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整　その後、見込み部に不定方向のナデ調整	密　φ2㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	杯内外 青灰～青黒色 脚内 青灰～暗青灰色 脚外　青灰色
101	59	須恵器　杯身	口径　＝ 9.9 器高　＝ 3.8	底部外面は未調整　他は回転ナデ調整	密　φ1㎜以下の白色粒わずかに含む	良好堅緻	内外　青灰色
102	59	須恵器　杯身	口径　＝ 9.5 器高　＝ 4.3	底部外面は未調整　他は回転ナデ調整	密　φ1㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内外　灰色
103	59	土師器　甕	口径　＝22.6 残存高　＝30.0 体部最大径　＝24.2	口頸部内外面ヨコナデ調整　体部外面縦方向の粗いハケ調整（1㎝幅中5条）	密　φ3㎜以下の白色・黒色粒含む	良好	内　灰褐～浅黄橙色 外　浅黄橙色 （煤は黒色）
104	60	土師器　甕	口径　＝26.8 残存高　＝30.0 体部最大径（把手除く） ＝30.7	口頸部内外面ヨコナデ調整　体部外面全体に不定方向のハケ調整を施すが、上方と下方でハケの細かさが異なる（1㎝幅中上方14条　下方9条）	密　φ2㎜以下の白色粒含む	良好	内外 浅黄橙色
105	60	土師器　甕	口径　＝28.5 器高　＝28.8 体部最大径　＝25.0	口頸部内外面ヨコナデ調整　底体部外面非常に粗い縦方向のハケ調整（1㎝幅中4～5条）	やや粗　φ2㎜以下の白色粒・雲母等含む	良好	内外　橙色
106	60	土師器　甕	口径　＝27.9 器高　＝28.0 体部最大径　＝25.0	口頸部内外面ヨコナデ調整　体部外面粗い縦方向のハケ調整（1㎝幅中5～6条）	粗　φ5㎜以下の白色・黒色粒等多く含む	良好	内外　黄橙～橙色
107	60	須恵器　双耳壺 （口頸部欠損）	残存高　＝20.9 体部最大径　＝26.4	体部外面回転ヘラケズリ調整　体部内面回転ナデ調整　底部内外面中央部のみ指オサエ調整	密　φ3㎜以下の白色粒含む	良好堅緻	内　青灰色 外　明黄褐～褐灰色
108	60	須恵器　杯身	基部径　＝10.6 器高　＝ 3.9 受部径　＝12.6	受部外面に回転ナデ調整がわずかに残るほかは摩滅のため調整不明	密　φ2㎜以下の白色粒含む	良好	内外 浅黄橙色
109	60	土師器　甕	口径　＝13.8 器高　＝15.9 体部最大径　＝15.9	体部外面縦方向の粗いハケ調整　他は摩滅のため調整不明	やや粗　φ2㎜以下の白色・黒色粒等含む	良好	内　にぶい黄橙～明黄橙色 外　浅黄橙～橙色
110	60	須恵器　杯身	口径　＝10.4 器高　＝ 4.2	底部外面中央部は未調整　その周り4/5まで粗雑な回転ヘラケズリ調整　他は回転ナデ調整	密	良好	内外　灰白色

図　　版



梶原古墳群の全景航空写真



梶原古墳群Ｄ－１号墳の移築地の全景航空写真

調査地区の航空写真

A 1 調査地区

B 1 調査地区